

第18回SGRAフォーラム

—韓流・日流—

東アジア地域協力におけるソフトパワー



*Sekiguchi Global  
Research Association*

**SGRA**

関口グローバル研究会

第4回日韓アジア未来フォーラム・第18回SGRAフォーラム「韓流・日流：東アジア地域協力におけるソフトパワー」が東京国際フォーラムで2月20日（日）に開催された。これまでの日韓交流史に見られない画期的な出来事である韓流の意義について考えるフォーラムであった。日韓アジア未来フォーラムは、2001年より韓国未来人力研究院と共同で進めている日韓両国の研究者の交流プログラムで、毎年交互に訪問しあってフォーラムを開催している。

SGRAを代表して今西淳子さんによる開会の挨拶に続き、韓国未来人力研究院の院長、韓国高麗大学の李鎮奎（イ・ジンギョ）教授（自称、ジン様）が「韓流の虚と実」という演題で基調講演を行った。日本における韓流ブームを時代ごとに日本と韓国双方の分析を用いて検証し、日本での韓流ブームの原因をドラマ・中心層・日本人の意識の変化という観点から説明した。また、韓国ではなぜ日流ブームは起こらないのかという疑問点を歴史的認識と日本側の市場開拓戦略という面から説明した。さらに韓流ブームにおける危険性として韓流による韓国での文化経済主義的な視点、文化民族主義的視点への警戒が必要であると述べた。

基調発表に引き続き日本富山大学の林夏生（はやし・なつお）氏は、日韓文化交流政策の政治経済について発表した。韓流・日流が一般にはまるで「最近になって唐突に」出現した現象のように受け止められているが、実は「そうではない」とし、政策的には規制されながらも、海賊版が大量に流通するなど非公式な側面も含む「文化交流現象」が存在したこと、そしてそれへの対応がせまられたこともまた、近年の急激な変化をもたらす重要な要因の1つであったと指摘した。

自由に生きていきたいと叫ぶ韓国の新世代文化評論家の金智龍（キム・ジリョン）氏は、「冬ソナで友だちになれるのか」とやや刺激的な演題で発表した。自分の言いたいことは前の講演で言われてしまったとし、アドリブで30分の発表をこなし、長年にわたる日本での文化体験に基づきながら、今の韓流ブームは一方的な文化流入に対する反感を和らげる役割を十分に果たしているし、韓国の若者たちが日本文化を楽しむことに対するいかなる批判も根拠や理屈を失うことになるとした。日本文化であれ、韓国文化であれ、文化を共有することはお互いの理解を深めることになり、韓流ブームをきっかけとし、日韓両国の人がお互いに親しみを感じて友だちになることにつながると言い切った。

休憩を挟んで発表者を含めて5人のパネリストによるパネルディスカッションが行われた。内閣府参事官（元在韓国日本大使館参事官）の道上尚史（みちがみ・ひさし）氏は、政府の見解ではないという前提で、「文化、ソフトパワーと新日韓関係」について討論し、「こぐのをやめると自転車は倒れる」、「はやりすたりに任せるには、日韓関係は重要すぎる」という含みのあるメッセージを伝えた。

韓国国民大学（東京大学客員教授）の李元徳（イ・ウォンドク）氏は、「韓流と日韓関係」について、韓流・日流は明るい将来の日韓関係を示すシンボルであるとしながら、早急な楽観論は警戒すべきと指摘した。

最後に東京大学の木宮正史（きみや・ただし）氏は、日韓関係の構造的変容のなかで韓流現象を捉え、韓流は単なるブームだけではなく、日韓関係の緊密化という構造変容によって支えられているものであると指摘した。

その後、ディスカッションはフロアーに開放され、70名にも及ぶ参加者の中からコメントや感想が寄せられた。ジャーナリストの櫻井よしこ氏からは、李元徳氏と木宮正史氏に対北朝鮮政策や歴史教科書問題について「攻撃的」質問もあり、一瞬「暗雲」が場内をおおう場面もあった。予定より25分遅れてフォーラムは終了し、フォーラムの最後に韓国未来人力研究院の宋復（ソン・ボク）理事長による閉会の挨拶が行われた。フォーラムは、「ジュン様」と「ジン様」のご協力で立派なフォーラムができたことについてのお祝いの言葉と拍手で締め括られた。

なお、今西さんから、次回の日韓アジア未来フォーラムは今回のフォーラムの成果を踏まえ、日本における韓流、韓国における日流、そしてアジアにおける韓流と日流をアジアの視点から幅広く論じる形で2005年10月韓国で開催しようと呼びかけがあった。（文責：金雄熙）

当日、SGRA運営委員の許雷さんが撮った写真を集めたアルバムを、下記URLからご覧ください。

[http://www.aifs.or.jp/sgra/photos/index.php?spgmGal=SGRA\\_Forum\\_18](http://www.aifs.or.jp/sgra/photos/index.php?spgmGal=SGRA_Forum_18)

## プログラム

# 第4回日韓アジア未来フォーラム・第18回SGRAフォーラム 韓流・日流：東アジア地域協力におけるソフトパワー

2005年2月20日（日）午後1時半～5時半  
東京国際フォーラム G棟502号室

主催：関口グローバル研究会（SGRA：セグラ）

協賛：（財）未来人力研究院、（財）渥美国際交流奨学財団

後援：「日韓友情年2005～進もう未来へ、一緒に世界へ～」実行委員会

### 【フォーラムの趣旨】

日本では、数年前より韓国料理ブーム、ワールドカップに伴うサッカーブーム、韓国映画ブームが起り、今年の「ヨン様ブーム」に至って「韓流（韓国ブーム）」が爆発した。これは今までの日韓交流史に見られない画期的な出来事である。同様に、韓国においても、日本の音楽や漫画やゲームに対する若者の関心は非常に高い。このように密度の高い人的・文化的な相互交流の増進は、程度の差こそあれ、東アジア各国に共通する現象といえよう。政治的あるいは軍事的な「ハードパワー」においては様々な問題をかかえるこの地域にとって、急成長する「ソフトパワー」はどのような意味と意義があるのか考えたい。

13時30分

### 開会挨拶

SGRA代表 今西淳子

司会：全 振煥（ジョン・ジンファン） 鹿島建設技術研究所、SGRA運営委員

13時40分

### 基調講演

### 韓流の虚と実

李 鎮奎（イ・ジンギョ） 未来人力研究院院長、高麗大学経営学部教授

まず90年代末から始まった東南アジア諸国における韓国大衆文化ブームを通して「韓流」を定義し、その背景について国際関係学的視点と東アジアにおける文化的特徴を取り上げ述べる。それに続き現在の日本における韓流ブームを時代ごとに事例と日本と韓国双方の分析を用いて検証し、日本での韓流ブームの原因をドラマ・中心層・日本人の意識的变化という観点から考え、韓国ではなぜ日流ブームは起こらないのかという疑問点を歴史的認識と日本側の市場開拓戦略という面から考察する。さらに韓流ブームにおける危険性として韓流による韓国での文化経済主義的な視点、文化民族主義的視点への警戒が必要であると述べている。そして最後に日本と韓国がより深く文化交流を深めていくためには何が必要であるかを日・韓・中三国の文化共同体構想を取り上げながら具体的に提案する。

14時10分 主題発表1

## 日韓文化交流政策の政治経済学

林 夏生（はやし・なつお）富山大学人文学部国際文化学科助教授

- ・韓国における日本大衆文化開放政策や、韓流ブームに勢いを得た日本の対韓国文化交流政策は一般にはまるで「最近になって唐突に」出現した現象のように（それゆえ、一過性のものではないかという疑念をもって）受け止められているが、実は「そうではない」。
- ・大衆文化交流政策は、「外交政策」のみならず「文化政策」「産業政策」といった多様な側面を持っており、長年にわたる日韓両国間の外交関係の変遷や不況下における文化産業政策の活性化策などを濃厚に反映して推移してきたものである。
- ・加えて、政策的には規制されながらも、海賊版が大量に流通するなど非公式な側面も含む「文化交流現象」が存在したこと、そしてそれへの対応がせまられたこともまた、近年の急激な変化をもたらす重要な要因の1であった。
- ・そこで今回の報告では、ブームの陰に隠れがちで、これらの政策過程のなかから特に重要なポイントを幾つか選び、紹介する。そして、そうした視点から、今後の日韓文化交流の在り方を展望しておきたい。

14時40分 主題発表2

## 冬ソナで友だちになれるのか

金 智龍（キム・ジリョン）文化評論家

これまで日本文化を楽しむ韓国の若者はたくさんいるのに、韓国の大衆文化を楽しむ日本人はほとんどいなかった。それがまた新しい反感を生み、文化を利用して、韓国の精神を汚す日本政府の陰謀であるとのばかばかしい主張まで出るようになった。こんなことを考えると今のハン（韓）リュウブ-ムは一方的な文化流入に対する反感を和らげる役割を十分にできると思う。韓国の若者たちが日本文化を楽しむことに対するいかなる批判も根拠や理屈を失うことになると思う。お互い自分が好きなものを自由に選択できるようになった。それが日本文化であれ、韓国文化であれ、文化を共有することはお互いの理解を深めることになると思う。それが両国の人がもっと親しみを感じて友だちになれることにつながると思う。

15時10分 休憩

15時40分 パネルディスカッション

進行：金 雄熙（キム・ウンヒ）仁荷大学助教授、S G R A 研究員

パネリスト：講演者3名に加えて

道上尚史（みちがみ・ひさし）内閣府参事官（元在韓国日本大使館参事官）

木宮正史（きみや・ただし）東京大学大学院総合文化研究科助教授

李 元徳（イ・ウォンドク）国民大学副教授

17時20分 閉会挨拶

宋 復（ソン・ボク）未来人力研究院理事長

## 挨拶

## 開会挨拶

今西淳子

SGRA代表

皆さん、こんにちは。SGRA代表の今西と申します。恒例のことながら、SGRAとは何か、また今日は日韓アジア未来フォーラムとは何か、簡単にいきさつだけ説明させていただきます。

私は、今ご紹介いただきましたが、渥美国際交流奨学財団という、日本の大学院の博士課程で勉強する外国人留学生を支援する財団をしております。その財団は、年間12名を支援する非常にささやかな規模で行っているのですが、奨学生の皆さんが博士を取られて、奨学金が終わった後も続くネットワークを作ろうということで10年間やってきましたところ、今は100名を超える日本の大学院から博士号を取った知日派外国人研究者のネットワークが出来上がりました。そのネットワークを使って、もう少し何かしてみようということで始めたのがSGRAです。

SGRAは「関口グローバル研究会」の略で、関口というのはその財団がある場所です。東京都文京区の関口からグローバルに発信していこうということで名前を付けたものです。規模は非常に小さいですが、みんな意欲的に熱意をもってやっております。

渥美財団が5年目になった時にSGRAを作ったのですが、その直後にSGRAの研究員をしてくださっている、今日、後半の司会をしてくださる金雄熙さんから、韓国の未来人力研究院という財団があり、マッチングファンドがあれば研究者の交流プログラムをしようというお話があり、それでは是非やりましょうということで、2001年から始めたのがこの日韓アジア未来フォーラムです。

未来財団は、今日、基調講演をしてくださる李鎮奎先生がご自分でお作りになった財団法人の研究

所です。こういう本当に民間でやっている財団というのは、まだアジアにはそんなに多くないと思います。私は是非、このように個人で作った財団のネットワークをしたいという夢もありまして、未来財団との共同事業はその最初のものになります。

未来財団はソウルの郊外の楊平（ヤンピョン）という場所に研修館を持っていらっしゃるしまして、2001年に、そこで第1回のフォーラムをしました。そのとき初めて李鎮奎先生にもお会いしました。続いて2002年に軽井沢でSGRAフォーラムをしたときに来ていただき経済の話をしていただきました。

そのときまでは、先生と私は英語で話していたのですが、その次の年に先生は高麗大学のサバティカルで早稲田大学にいらして、1年間いらした後は日本語で私と話すようになりました。私としては結構ショックで、今度は私が韓国語を話さなければいけないということではないかというプレッシャーは感じているのですが、まだ勉強を始めるには至っていない状況です。

今日の後半はパネルディスカッションになります



---

すが、そのパネラーとして参加して下さっている李元徳さんが、未来財団の日本研究チームのチーフをされていて、このフォーラムで何をしようかというお話を去年の秋にしたところ、今、日韓の問題は軍事や経済などよりは、ソフトパワーを取上げた方がずっと面白いのではないかということになりまして企画が始まりました。

それで、今日のメンバーはむしろ李元徳さんのお友達という形で、日本人の先生方も含めて韓国側から組み立てていただいたフォーラムになっております。ヨン様ブームは突然やってきたような形で、それがまだ学術的にちゃんと分析されていないという印象は持っておりますので、今日はどういうお話が聞けるか大変に楽しみにしております。どうぞよろしくお願いいたします（拍手）。

## 基調講演

# 韓流の虚と実

李 鎮奎

未来人力研究院院長、高麗大学経営学部教授

(講演時に配布したフルペーパーは巻末の付録をご覧ください)

このたびは、日本で韓国文化のブーム「韓流」についてお話できる機会をいただき、大変うれしく思っています。今西さんが言われたように、2年前の軽井沢での私の講演は英語で行いましたが、私はこの間日本語を勉強しましたので、今回は日本語で講演を行ってみようと思います。どうぞ私のつたない日本語をご理解ください。(原文英語)

皆様、こんにちは。ただいまご紹介いただきました、韓国高麗大学の経営学部教授である李鎮奎(イ・ジンギョ)と申します。第4回日韓アジア未来フォーラムと第18回SGRAフォーラムの開催を、心からお祝い申し上げます。そして、私を招いていただいた渥美国際交流奨学財団の渥美伊都子理事長、SGRA代表今西淳子さんに、この場を借りて深くお礼を申し上げます。

基調講演をする前に、皆様に2つお願いがあります。1つは、私は韓流の専門家ではありません。したがって、韓流について深く触れることができないのでご了承ください。もう1つは、私は日本語の勉強は1年仕方っていないため、まだ日本語が足りません。下手な日本語ですのでご了承ください。

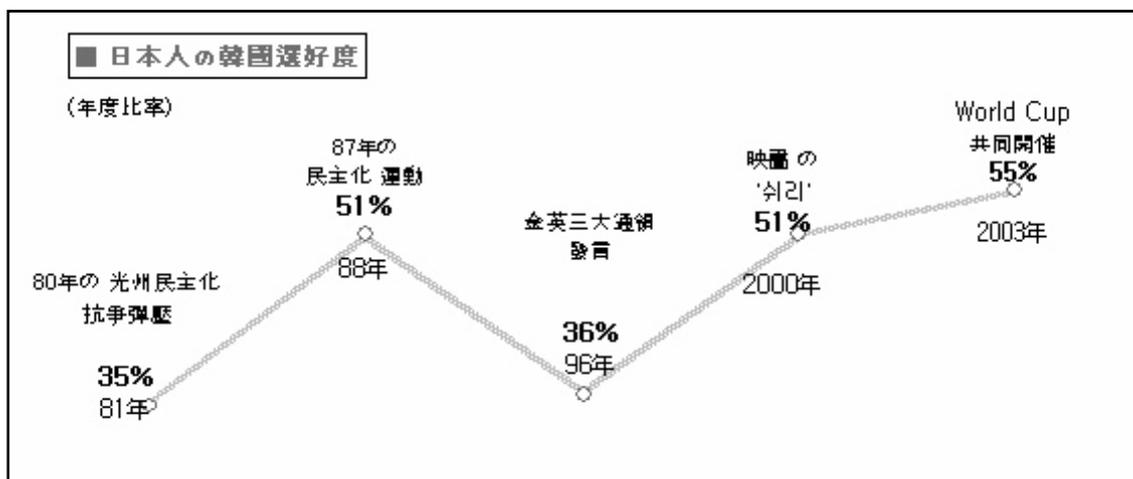
さて、韓流の定義及びその背景については、諸先生方から議論されると思われますので、私は本論に入ります。

まず、日本人の中で変わる韓国観について話します。日本の内閣府が毎年調査している韓国に対する親近感調査によりますと、韓国人に対して親近感を感じるという割合は、1990年代までは50%を超えていませんでした。

初めて50%を超えたのは1988年で、前年の民主化運動に対する好感が影響したものと思われる。

その後、2000年、映画「シュリ」の日本公開と、2002年のサッカー韓日ワールドカップ共同開催で、2003年の親近感は55%に増加しました。このような流れが60年間否定的な見方が強かった韓日両国の相互理解への新しい転機になっています。

次に、韓流と日流はブームになるのかについて話します。韓流について、日本での分析は肯定と否定様々なようです。「オバタリアン」と呼ばれる人たちのヨン様に対する熱狂は、プラトニックラブス



トリーにはまる最近の日本人の傾向を反映したという、日本の内部問題との見方があります。

一方、韓国では日本のドラマがはやりもしないし、韓国人は日本を好きにもならないのに、日本人だけが韓国にはまっているのではないかという声も聞かれます。韓流が日本に及ぼす影響は、何よりも日本の文化人たちの考え方を変えたことにあります。

次に、日本での韓流ブームの原因について話します。日本で韓流がはやった1つ目の理由は、韓流ドラマが主導していることです。2つ目は、韓流ブームの中心が中年層の女性であるという点です。今までの各種の世論調査では、この年代が一番「韓国が嫌い」と答えていました。しかし、この年代が「韓国が好き」というように変わってきたということから、その上昇効果は大きいと思われまます。3つ目は、韓国が魅力のある国として急速に変わってきていることを認識し始めた日本人が増えたことです。

次に、「日流」はなぜ韓国でブームにならないのか。日本からの植民支配という過去に傷ついた国民の心理を考え、両国政府は段階的開放、つまり「速度調節」を行ってきました。このような韓国の「心理的」閉鎖性を、いち早く見抜いた日本側の消極的な市場開拓の努力のなさも、「日流ブーム」が形成

されない理由として挙げられます。

次に、韓流ブームの危険性について。現在このように韓流は後戻りのできない大きな流れを形成しています。しかし、その裏に隠れた危険性を指摘しなければなりません。ここで韓流ブームの危険性を大きく分けて2つの点から指摘することができます。

1つは、韓流ブームの核心は、「文化はお金」ということです。「文化＝お金」というのは、最近、文化コンテンツ産業の振興論理の基盤でもありますが、「文化＝お金」という論理とは、言い換えると、文化はお金であるから、金にならない文化は意味もなく、価値もないという結論に達するおそれがあります。もう1つは、韓流ブームの中に隠れた「民族主義的な態度」です。韓流ブームが日本と中国など東アジアの国家に対する民族主義的な優越感を高揚する契機になってはいけません。韓流ブームは、文化経済主義的な視覚と文化民族主義的な視覚を警戒しなければなりません。

次に、私は未来に向けての提言をお話します。韓日両国は、お互いに争ったり、批判したりしても、協力と協調が不可欠な国です。ビジネス関係であれば、実利が伴えばすぐ親しくなるけれども、友情とは相手に対する理解と関係の持続性に対して、その





価値を認定することなのです。東アジアの平和共存と未来繁栄のためには、何よりも相手への理解がなければなりません。

私は、相手への理解と信頼を築くために次のようなことを提案したいのです。

1つ、韓日中3国の文化的な共同体を築き上げていかなければならないことです。文化の共同体を築き上げていこうとするときに、最も重要なことは文化的交流です。文化から構築された価値は、政治経済の領域でどんなことが起きても揺さぶられることがないからです。特に、夏休みなど長期の休みのときには、韓国語を学びたい学生をホームステイさせ、韓国文化を体験させながら言葉を教えるということから始めたらと思います。

2つ目の提案は、韓日両国が共同基金を設けて芸術分野の若者たちに奨学金を与え、相手国に少なくとも2～3年間留学させる方法です。1つの国に2～3年間滞在しながら文化に触れ合った人は、ほとんどはその文化の友達になります。両国間の文化的懸橋が、今までよりさらにより相互関係に寄与することにもなるはずで

3つ目に、政府の次元で相手国を研究する専門家

を、長期的・持続的に支援していかなければなりません。研究の人力が持続的に働くように、政府からの基盤を作らなければなりません。

国際関係から見れば、文化というのは政治領域と同じく重要な外交的役割を果たします。文化交流をしなければ、民族間の交流は不可能であるからです。

ヨーロッパは世界市場で様々な価値を生み出してきました。ヨーロッパで生み出された普遍的な価値の中で、自由・正義・平等という価値は人類の文明史に大きな影響を与えました。我々も東アジアの伝統からグローバル化できる価値を模索しなければならない時期に来ていると思います。お互いに未来に向けて力を合わせ、東アジアの文化形成のため頑張ら

最後に、このような場を設けてくださった関係者の方々に深くお礼を申し上げます。下手な日本語でしたが、最後まで聞いてくださってありがとうございます（拍手）。

## 主題発表 1

## 日韓文化交流政策の政治経済学

林 夏生

富山大学人文学部国際文化学科助教授

ただいまご紹介いただきました、富山大学人文学部の林と申します。本日このフォーラムで発表の機会を頂きましたことを大変光栄に存じます。私はこの名前で日本人なのです。よくこの名前のために国籍を間違えられたりします。中国に同姓同名の方がいらっしゃることは分かっているのですが、韓国語で読むとイム・ハセンです。速く言うと「いません」と言われるので、「いるんですけど」みたいな感じなのですけれども、申し訳ないことに、日本人が日本語で発表させていただきます。

専門は国際関係論です。文化論ではありません。ですから、皆様のご期待に添えますかどうか。韓流や日流の中身そのものではなく、それを取り巻く政治や経済の動き、そういったものとの関係を今回は取り上げたいと思います。限られた時間なのですが、できるだけ具体的な交流の姿を皆さんにお目にかけて、今回フォーラム主催者の方々のご協力も得て、スライドを使用してお目かけます。

この報告の中で、「文化交流政策」という言葉が何度も出てきますが、これはちょっと慎重に定義しなければいけません。「国際交流」と「文化交流」はどう違うかということには今日は余り深入りしませんが、一言でいえば、「国際交流」は国境を越えて人や物や金や情報が行き交えば国際交流です。一方で、「文化交流」というのは、同じ国の中でも都市と農村や世代間など、そういうものは「文化交流」になりえます。ですから、本当のことを言うと、国境を越えて文化的な交流というのは「国際文化交流」と言うべきなのですが、ちょっと長いので、今回はそれを「文化交流」と略しております。

次に、「文化交流政策」というのは交流する政策でしょうと多くの方が思われますが、実は私はそうは考えておりません。なぜなら、なぜ文化交流をするかという、政策として考えると、それによって目標を達成するから手段としてやるわけです。では、交流をしないことによって目標が達せられるのであれば、それもやはり文化交流をコントロールすることによって何か得ようとする政策なわけですから、そこは共通しています。ということなので、余り一般的な理解ではないかもしれませんが、ここからは「交流を進める政策」と「させない政策」をつなげて考えたいと思います。

とはいうものの、やはりこの「韓流」「日流」という言葉に象徴される交流の拡大の様子から、まずは紹介します。

ここでまたもう1つお断りなのですが、本当は日本と韓国どちらに関してもイーブン（均等）に紹介をしたいところなのですが、時間の制約のため、むしろ、今回ここは日本ですので、韓国の中で何が起きているのか、いたのかというということをメインに紹介しようと思います。

ですから、わざわざ韓国から来ていただいた方は「そんなの知ってるよ」ということばかりで恐縮かもしれませんが、「そうじゃないよ」とか、いろいろ指摘があったらどうぞ教えてください。

長い歴史をざっとまとめます。今につながる韓国の「日本大衆文化開放」。開放というのは、要するに規制緩和、解禁です。それまで公式に輸入したり販売したり公開したりすることが制約されていた、日本の映画や漫画がまず公開されたのは、1998年10月からです。北野武の「HANABI」など

が、この年の12月に上映されています。

次に、1999年の秋には、今度は日本人歌手が歌うことが、小規模な室内など制限付きで許可されました。さらにその次には、コンサートは屋外のどんな大規模なものでもOKとか、音楽ソフトも日本語の歌詞がなければOKなどと徐々に広がっていききました。

ところが、それが2001年に一変開放が中断されました。ご存じのとおり、日本の教科書問題、靖国参拝問題でもめたあの年です。

そうこうしているうちに、ワールドカップが終わってしまい、第4次開放は2004年まで持ち越しになりました。これをもって劇映画や音楽ソフトは完全開放、テレビはまだ制約付きという状態です。

具体例を見ますと、これは2002年8月、韓国のある繁華街、明洞(ミョンドン)の映画館でかかっていた日本映画です(図1)。見覚えのある女の子と豚がいます。拡大しますと、「千と千尋の行方不明」という名前がやっています。「まっくろくろすけ」がマニアの間では非常に人気だったそうです。

映画だけではありません。サウンドトラックCDなどの関連商品も非常によく売れました(図2)。サウンドトラックですから、日本も韓国も同じだと

思いがちなのですが、違いがあるのをお気づきですか。ハングルと日本語は違うのですが、数が違います。日本は21なのに韓国は20ですね。

「いつも何度でも」の曲が韓国語版には入ってなかったのです。これは木村弓さんという方が歌った印象的なテーマソングなので、これが聞きたくて買ったという人もいるかもしれませんが、残念ながらこれは入っていませんでした。なぜでしょう。それは日本語の歌詞が入っているCDをまだ売ってはいけなかったからです。それは、日本の植民地時代に日本語の使用が強制されたという記憶がまだ十分清算されていない中で、それを受け入れることはできないということです。

それが開放されたのが、第4次開放でした。実はこの瞬間が、日本では余り大きく報道はされていなかった印象があるのですが、韓国から見ると、このインパクトは結構あったのではないかと思います。今までは決して公式に聴くことができなかったものが、こうして聞けるようになった。ただし、これは地上波では放映をすることがまだ許されていません。ケーブルテレビとインターネット配信だけで許されたものです。生放送ですが、まだ完全開放ではありませんので、制約付きです。

一方、規制の方はどうか。これも半世紀に及ぶ歴史をまさかここで全部紹介するわけにはいかない



図1



図2

ので、よろしければ私の略歴にあります紹介文の中に、この報告に関連する論文を紹介していただいております。そちらの中に、こういったことに関しての詳細な分析を書いておきましたので、ご関心ある向きの方はどうぞご覧ください。

ざっと言いますと、韓国でいかに日本文化が規制されているか、特に日本の方でご存じないかたが多い。「規制されていることは知っているよ」とおっしゃっても、実は中身、規制の仕方が全然違ったのです。それをまとめてみました（図3）。

最初のころは、とにかく日本的な文化は全部だめでした。このときには日本が植民地時代に残していったものがたくさんあったからです。神社とか名前とか、そういうものは全部取り除く。そっちで一杯でしたから、まさか国交が始まる前に新しいものを受け入れるなんて到底考えられないでしょう。そんな時代が最初にありました。

国交正常化の前は、公式なものはOKだけでも、大衆文化はだめです。そういう日本の大衆文化は低俗だからと、選択的に拒否をしていました。その後、大衆文化が低俗だからということではなくて、ちょっとまた別の意味で、産業的なインパクトなどのために、「もう受け入れてもいいんじゃないの」「いや、まだだめなんじゃないの」という対立があった時期がありました。そして、今ご覧いただいたような開放の時期です。このように私は4つに分けて見てみました。

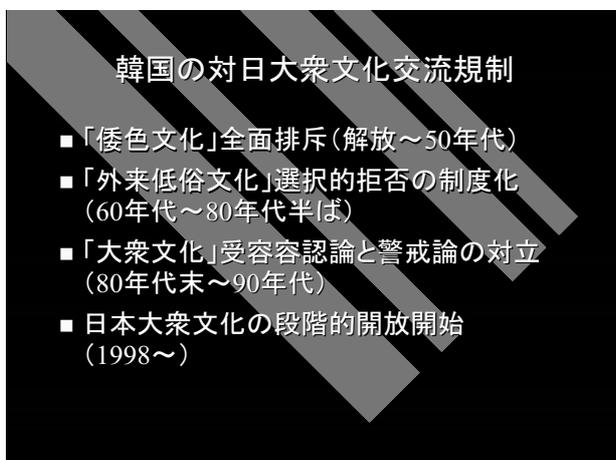


図3

ただ、細かいことをいろいろ調べますと、なかなか難しくなってきます。例えばどこに「日本のものはだめ」という法律があったかという、ないので。根拠となっているのは、例えば1961年に「公演法」というものが決まります。公演というのは、コンサートとか演劇とか、そういうものですが、人々の気持ちを乱すようなものを上演してはいけません。それから、外国人が出る場合は政府の許可を得なさい。まだ植民地から解放されて15年ちょっとです。「まだまだ植民地のつらい記憶のある人の目の前で、日本人の役者が演劇をしたり歌を歌うのが情緒を乱さないわけがない」というような解釈で、基本的にはどんなに申請をしても許可が下りませんでした。

これは公演だけではありません。「出版社及び印刷所の登録に関する法律」「映画法」「放送法」「音盤に関する法律」。音盤というのはレコードですが、CDやLDも入ります。こういうものが矢継ぎ早に整備されることによって、事実上の規制がしかれていったわけです。

余り抽象的な話や法律の文章だけ見ても面白くないので、実例をお聞かせします。  
（「トンベク・アガシ（椿娘）」の演奏）

このイントロで分かる方がいらっしゃったら、かなりマニアな方です。これはどこの国の曲でしょう。「演歌っぽいのでは」ときっと思われるかもしれませんが、正解は李美子（イ・ミジャ）さんです。李美子さんは芸歴がとても長くて、そろそろ50周年を迎えられる方です。「韓国の美空ひばり」という人もいます。これは韓国語です。別に作曲も作詞も歌詞も全員韓国の方です。ところが、禁止されたのです。なぜでしょう。情緒が日本的だからです。そのときに話題になったのが「酒は涙か溜め息か」です。楽譜をお読みになれる方でしたらお分かりになるでしょうけど、本当に譜面が似ているのです。これの剽窃ではないかという意見まで出て、「やっぱりこんな曲はまかりならん」と。でも、これは

1962年の大ヒットだったのです。朝鮮戦争後の混乱した社会の中で明かりをともした歌ということで大変人気があったのに、それが日本的であるからという理由で禁止されたというのは、非常にインパクトのあることでした。この禁止措置は80年後半まで維持されてしまいました。

ここまで大まかに事例を紹介しましたが、では、これを基に何を考えるのか。最初にお約束しましたとおり、それを政治経済との関連で整理してみましょう。

1つ目が、文化交流、特に大衆文化を規制するとかしないとか、それを外交の一部として見た場合。次に、それが国内の文化政策としてどんな意味を持っていたかという角度。さらには、それは多分ビジネスの話だ、政治ではなくて経済の話だという見方。そして4点目に、全然違ったものを後でお見せしたいと思います。

まず1つ目に、外交政策の手段として。今日いらっしゃる皆さんは大体お察しのとおり、文化交流というものが外交の重要な柱であることに異存のある方はいらっしゃらないと思います。「こんな国がここにあるんだ」「この国の文化はこのような性格を持っているんだ」、そういうことを知らせていくということは、どの国にとっても大事なことです。

特に韓国の場合は、日本の植民地下であって、ほとんど世界の人を知ることのなかった民族文化を知らせる必要が、解放直後、建国直後からありました。さらに朝鮮戦争後分断を経てからは、例えば、韓国はこんなにも、民主主義の伝統をちゃんと引き継いでいる正しい国としてここにあるのだということを知らせるために、非常に力を入れてやってきた分野です。

では、なぜ日本との間でそれがなされなかったのか(図4)。

最初のころは、まだ生々しい記憶があるから。国交が正常化されても歴史の清算が終わっていない

から。さらには、その歴史そのものを、清算とは別にどう認識するのか。教科書でどう書いたり、どう教育するのか。こういった問題が繰り返す中で、そんな日本のものは入れません。そういう姿勢を見せることで、日本側の反省や行動の変化を求める。そういったシグナルとして使われたという側面があります。

だからこそ、そんな政策の中で、特に大統領が変わった瞬間など、「私は日本と新しい関係を作ります」、「日本との文化交流をもうちょっとやりましょう」という意見が出てきやすかったのです。しかし、それも、こっちが譲歩したものの望んでいたような結果が得られないと、またパタッと手のひらを返して「やっぱり要りません」。これが何度も何度も繰り返されてきた、そういう見方がまず1つにはできるでしょう。

ただ、できるだけ角度を変えて、日本に対するメッセージではない側面があるとするならば、実はそれは北朝鮮や共産主義思想との関係です。日本による文化的抑圧の中で、民族文化を十分に育てるのが難しかった。それを開放・建国を経て一気に花を咲かせたい。そのためには、いいものはもちろん入れなければいけない。けれども、その中で何でもかんでも入れてしまって社会を不安定にするような思想までは入れてはいけません。ですから、そこは慎重に選別をする必要があったということです。

日本大衆文化規制の制度的根拠？

- 「公演法」(1961年制定)
  - 国民の情緒を乱してはいけない
  - 商業的な公演を行うためには政府への申請が必要、外国人が出演する場合は政府の許可を得なければいけない
- 相次ぐ文化関連法の制定
  - 「出版社および印刷所の登録に関する法律」(1961年)
  - 「映画法」(1962年)
  - 「放送法」(1963年)
  - 「音盤(レコード)に関する法律」(1967年)...

図4

実は、その大衆文化規制は、特に日韓関係の大衆文化交流という、日本のものが規制されたという話ばかりになりますが、別に規制されたのは日本のものだけではありません。ほかの自由主義圏のいろいろな歌や演劇などが、「そんなものは学生や若者によからぬ影響を及ぼすからだめだ」というケースがたくさんあったわけです。

しかし、目安としてはやはりオリンピックあたり1980年代ぐらいに、社会の民主化が進み、経済的に成長し、また、文化統合が完成したことによって、そもそもそういう文化的な枠をはめることがよくないというように考え方が変わって、規制の緩和に進んでいきました。これは外交とは全く違う説明のルートになります。

さらに角度を変えて、ビジネスの面から見てみましょう。韓国の映画は1960年代に花盛りの時期を迎えまして、今見ても非常に面白いものが多いです。ただし、軍事政権下で自由な文化的活動が制約された時期が長かったものですから、残念ながらその間に競争力を失ってしまいました。民主化になって一気に開放、ほかのものを入れてとなったときに、弱ってしまった韓国映画をだれも見ないのでは韓国の映画界がつぶれてしまいます。ということなので、こういうものを経済学で「幼稚産業保護」などといいます。その一環として文化産業を保護せざるをえなかったのです。

それが転換するのは、1980年代の「西便制(ソピョンジェ)」（邦題：「風の丘を越えて」）などが世界で徐々に評価されていくころです。ですから、輸出も始めるのですが、海外のものを入れずに自分のものを売るというのは、当時のウルグアイラウンドの自由化体制、自由化推進の体制の下で、「そんなことは不平等である」という反発を招くわけです。

さらにその後も、経済的な困難に向き合うごとに、新しい産業の創出が必要であるということで、名前が挙がっていたのが文化産業です。特に1997年のIMF経済危機のときには、一気に文

化と観光産業にてこ入れが進みました。

そして、今までは全部政府の考えだったのですが、4番目は全く逆のサイドです。困ったことに、政府はいろいろな考えで「あれは入れない」「これは入れない」としたいのに、国交が正常化されたり、それ以前にも日本が残したものを人々が楽しんでしまったりしたことがあったものですから、事実上の国際交流がどんどん増えてしまいました。それが公式には売れないから海賊版になります。海賊版がどんどん売れたとしても、非公式であることには変わりはありません。

中には、「こんなふうに海賊版のふりをして文化を浸透させてくる日本は本当にずるいやつだ」というような議論も出てくるのでした。実はこういうことをしてしまうと、韓国の文化産業が自分の首を絞めてしまうわけです。売れなくなってしまいますから。日本のBS放送を勝手に受信するアンテナをみんなが付けてしまったり、インターネットのボタン1つで音楽をダウンロードなどになると、もう打つ手がないわけです。それで緊急に具体的な対応が必要になっていったというような状況があります。

韓国がどのように困ったかという例は幾つかあるわけですが、例えばこんな問題が起きました。

韓国ロックグループの曲が、美空ひばりの「お祭りマンボ」、これを剽窃したのではないか。本当に日本のものが入ってこないのであれば、みんな気が付かなかったはず。けれども、インターネットでダウンロードしたり、留学している人がもういるわけですから、知ってしまい、ネットの掲示板に書いてしまいました。大問題です。当初は否定しましたが、とうとうそのルーラ(Roo'ra)というバンドのリーダーが、手首を切る自殺未遂を起こしてしまったことで本当に大問題になってしまいました。

このように、入れたくても入れられない、海賊版が横行する、みんな聞かないのだから似た曲を作ってもいいと、どんどんおかしなことになるわけです。こういうものはちゃんと整理する必要があるだ

ろう。そういったことが、実は韓国の文化開放を動かした重要な要因の1つではないかと私は考えております。

人々の文化的な現象は、確かに政府の政策による制約を受けます。しかし、逆に政府が、それは触れてくれるなというところでも、文化の接触はどんどん起きてくるし、そういう現象の存在が、「もうここまで海賊版が増えてしまったら仕方がない、別の手を打たなければ」とか、「いやいや、そんなふうに入ってきてしまうものだから、もっと規制しなければ」とか、いろいろな影響をまた与えていたわけです。実はここに政策と現象、現象から政策、その相互の関係があると私は考えています。

このあたりは歴史的なことに随分戻りすぎたので、今の話に戻しましょう。そういう政策や現象が行ったり来たりしているわけではないのです。現象には目的などないのです。とにかくそれが面白いと思って触れる人がいたら、それで現象が起きてしまうわけですから、次に何が起こるか分かりません。

ヨン様好きなのだが、ヨン様に会いたくて韓国に行くのだけれども、会えません。でも、とにかくヨン様会いたさで旅行に行ってしまいました。行ったらご飯を食べなければいけないから食べる。食べたらいよいよ。韓国料理はみんな赤いと思ったけれども、赤くなくておいしいものが一杯ある。「先生はよく韓国に出張に行くけど、辛いものばかりで平気ですね」と言われるのですが、僕が大好きなのはサムゲタンといって、赤くない鶏の煮込みなのです。「冬ソナ」は本当に韓国料理の食事のシーンがすごく少ない。行って見て、「なんだ、韓国料理おいしいじゃない」「あの人たちの伝統文化に触れたい」。そういうことが起きるのが文化接触の面白いところです。

確かに「韓流」と呼ばれたのは、日本では「シュリ」や「J S A」などが流行した2000年以降のことではありますが、非公式な部分も含む文化接触の歴史は最近のものではありません。例えば韓国で1970年代から「キャンディ・キャンディ」が放

映されていたことが、日本で余り知られていないのです。ですから、韓国語が一言も話せない日本の方でも、この歌を知っていれば韓国へ行って一緒にカラオケで歌えるのです（笑）。

それから、ワールドカップで安貞桓（アン・ジョンファン）が「テリウス」というニックネームで呼ばれていたのは、この「キャンディ・キャンディ」の中の登場人物です。当然キャンディ・キャンディはハンデルでしゃべるわけですが、こういうことは「韓流」などというずっと前から起きていたことです。

あるいはロボットアニメの「ロボットテコンV」。どこかで見たような感じがしますが、韓国語でしゃべっていますが、日本のものではありません。これは韓国のアニメです。ご存じ、テコンドローの型をやっています。

この数年前、日本では例えば「マジンガーZ」が放映されていました。「マジンガーZ」に「パイルダー・オン!」といって、ああいうものが頭のところからスポッと入りますね。このあたりを見るとすごく類似性が高いので、「やはりこれもある種の剽窃ではないのか、問題視をせねば」などという意見もあったのですが、作家の方が「はい、確かに影響を受けました。ただ、本当だったらもっと正式に紹介したかったけれども、当時の韓国社会は規制があったので、自分が見て面白いと思ったものを韓国の子供たちにああいう形で紹介をした」というようなことをドキュメンタリーでお話になっていたのを見て、私とその立場だったら大変つらいだろうなと考えました。

以上、随分と早口で申し訳なかったのですが、まとめとしまして、タイトルにもありますように、「文化交流」というと、何か政治や経済と関係ないように思われるけれども、そこがトリックです。「政治的ではないよ」「経済的ではないよ」という顔をししながら、高い政治的機能と経済的機能を果たしうるといなのが、文化交流の面白くもあるし、恐ろしい

ところでもあります。まず、そういう多義性を持っているということが、日韓の場合にも非常に濃厚にいえると思います。

一方で、どんなに計算づくで実施されていく政策であったとしても、特に規制政策の場合などで、その裏をかくようにして起きていく現象が非常にたくさんあったし、その影響力というもの大変大きかったのです。

これを踏まえて、最後に一言だけ付け加えます。では、未来に対して何をいえるのか。私はまだちょっとここは十分整理ができておりません。強いキーワードとして述べるならば、「多様性」では

の伝統衣装や伝統の料理法などもちゃんと紹介され、提供されている必要があると思います。

最後に、実は私はこれが非常に今一番大きな問題かなと思うのですが、それで「国際交流」という言葉はあえて私は使いませんでした。韓国文化が分かった気になるとか、日本文化を分かった気になるというのは、やはり非常に難しいことではないか。なぜならば、日本にも韓国にもいろいろな人がいます。「冬ソナ」ブームで皆さん当然のことのように危惧されるのは、韓国人がみんなああではないから。同じです。「101 回目のプロポーズ」が韓国ではやったときに、別に日本人が全員そんなことをす



ないかと思っています。

ヨン様ブームについてももちろんいろいろな意見があるでしょう。ヨン様しかきっかけがないのはまずいと思います。けれども、ヨン様もある。伝統芸能もある。料理もある。そういうきっかけが多様であることがまずは重要でしょう。

また、ヨン様が好きになったからといって、それしか提供されないのではなく、次に、あれも関心できたからあれを、今度は伝統文化、料理の仕方、キムチの漬け方、そういったアクセスしうる文化が多様に準備されているのか。関心を持つきっかけがビジネスレベルでよく売れる大衆文化であったとしても、次にはむしろビジネスには乗りにくい韓国

などと思われたら困りますから。

もちろんドラマですから、当然の誇張はあるべきだと思いますが、その向こう側にある日本なら日本、韓国なら韓国の中にいる人々のありようの多様性というところに目が向くかどうか。これは本当に、私もこう言いながら難しいなと思っています。なぜならば、いつも「日韓文化交流」と冠がかぶせられるから、日本対韓国になってしまうから。本当だったら、アニメ好きな日本人同士対小説好きな日韓同士とか、いろいろな交流があっているのに、いつも「文化交流」というと、国境をまたいで向かい合うことしか発想しません。国境の向こうはあんな人たち、こんな人たちと、それが分かったつもり

なのが「文化交流」かということ、そんなわけではないでしょう。

なぜなら、「文化交流」というのは、「あの国の人たちは私たちが嫌っている」という先入観を取り除くために、本当にそこに生きている人々の姿を知るために、今までいろいろと努力が重ねられてきたのに、その売れっ子の大衆文化1つによってまた、「要するにあの国の人たちはこんな感じ」、それで埋め尽くされてしまうとしたら、とてももったいないのではないかと思います。

先ほど白状しましたように、まだこの辺は未整理なのですが、いろいろな意味で多様性を確保しつつ、人々に魅力を感じさせるいいきっかけを、大衆文化交流、韓流、日流というものが提供してくるといいのではないかと個人的には考えております。

以上で私の報告を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました（拍手）。

（全）ありがとうございました。私も韓国人ですが、私も知らない事実と共に、昔の懐かしい漫画を見せていただいてありがとうございます。1つ「銀河鉄道999」という漫画があったのですが、とても、それも日本の作品だったと思うのですが、非常に私のはまり、勉強せずにそれを見た昔の記憶があります。

## 主題発表 2

## 冬ソナで友だちになれるのか

金 智龍

文化評論家

皆さん、こんにちは。私は金智龍と申します。私は1992年から1998年まで日本で留学していたことがあり、結構日本語はできていたと思ったのですが、韓国に帰ってから7年間は、ほとんど日本語を使ったことがなかったので、時々変な言葉を使うかもしれません。それから、28歳になって学んだ日本語ですから、なまりがあって聞きづらいかもかもしれませんが、その辺は勘弁してください。

日本語で講演するのは2回目で、日本語を忘れたので原稿を書いてきたのですが、林先生が私の原稿に出ているような内容を結構話されたものですから、アドリブで講演をやります。

私は昨日韓国から来てホテルに泊まったのですが、NHKを見たら「美しい日々」をやっていたのです。それで、私は愛国心などは全くない人間だと思っていたのですが、日本で韓国のドラマをやっているのを見てうれしかったです。

1992年から留学したと先ほど申し上げたのですが、あのとき韓流ブームがあったらすごくよかったのではないかと思います。そのときは私は慶応の大学院に通っていたのですが、慶応にも変なやつがいます、僕の周りにはなぜか変なやつばかり集まるのです。それで、結構渋谷や新宿あたりにナンパしに行ったのですが(笑)、あのときは韓国人であることはナンパするときすごく弱点になりました。要するに、少し日本語をしゃべるとは言っても、なまりがあってすぐ外国人だと分かります。ブラジルから来た日系三世とかとナンパをしかけたのですが・・・今なら韓国人であることが強みになるかもしれませんから、試しに今夜新宿に行ってナンパでもしてみようかなと思っています。それ

は冗談で、冗談ではないかもしれませんが(笑)。

講演のタイトルは「冬ソナで友だちになれるのか」です。要するに韓国人と日本人が友だちになれるかということですが、よく日本人でも韓国人でも、お互いに会うと「隣の国だから親しくなろうよ」とか「友だちになろうよ」と、そんなことをよく言うのです。でも、私はそんな話を聞いているといつても不思議だと思うのですが、なぜ友だちになる必要があるのでしょうか。

韓国では日本のことを「近くて遠い国」というのですが、要するに、地理的には近いけれども、心では結構遠いと感じている、そのような国なのです。それはやはり隣の国だからそうなるのだと思うのです。僕は韓国でマンションに住んでいるのですが、上の階にやっかいな高校生が1人住んでいて、夜中2時に走ったり飛んだりするのです。それでびっくりして目が覚めたりするのですが、それが結構ひどい人で、何日か続けてやることもあります。そのとき、カッとなって包丁で人を刺す人の気持ちがよく分かったのですが、実行はしていません(笑)。

やはり隣の人というのは迷惑をかけやすいのです。韓国と日本は隣同士だから、お互い迷惑をかけたことがいろいろあったのです。もし韓国か日本がアフリカの国だったら、日本人と韓国人の心の中にいろいろなことがあることはないのです。関心がないでしょう。でも、やはり隣の国だからいろいろ歴史的なことで迷惑をかけることがあったのです。それがあから、やはり隣の国というのは友だちになりにくいのです。一番友だちになりにくいのが隣の国だと思います。ドイツとフランスもそうですし、

フランスとイタリアもそうだと思います。

隣の国が友達になりにくいもう1つの理由は、やはり似ているようで似ていないところがあるからだだと思います。皆さんもラーメンを結構食べていらっしゃると思いますが、韓国でもラーメンはあります。でも、ラーメンを食べることを比較すると、大勢の人がラーメンとご飯を一緒に食べるのですが、そのとき、韓国人はラーメンのスープにご飯を入れて食べます。日本人は別々に食べるのです。

私は留学しているとき、インスタントラーメンを食べながらご飯を入れて食べたのです。それを見た日本人が「気持ち悪い」と言ったのです。「なんで気持ち悪いの?」と言ったら、「なんでご飯をラーメンに入れるんだ。ラーメンとご飯は別々に食べるもんだ」と言ったのです。それで僕は「ばかばかしい、入れて食べたならおいしいのに」と(笑)。

カレーライスも、日本人はご飯の上にかけてそのまま食べるのですが、韓国人は全部混ぜて食べるのです。それをお互いに見て「気持ち悪い」とか「ばかばかしい」と思うのです。

要するに、例えばインドとか、よく知らないアフリカのある国の人の変な食べ物を食べているのを見たら、「面白いな」とか、「不思議だな」とか、「あんなものも食べるんだ」と思うのです。でも、韓国人と日本人は結構似ているものを食べているのですけれども、似ているようで似ていないので、それをお互いに「ばかばかしい」とか「気持ち悪い」と考える。だから隣の国で仲よくなるのは難しいのではないかと思います。

でも、やはり隣の国だからいろいろな交流をします。交易をするし、政治交流もあります。それは国民同士が仲よくならなくてもできることだと思います。経済交流(交易)だったらお金でしょう。お金になると何でもやる人種がビジネスマンです。ビジネスマンをけなしているわけではありません。僕も文化評論家では飯を食っていけないので、コンテンツを作るビジネスをやっているのですけれども、やはりビジネスマンとしての僕は、お金になると分かれば何でもやります。

でも、仲が悪いとお互いにいろいろな不便なことがあります。例えば10年前に日本で僕がナンパできなかったり、逆に日本人が韓国に旅行するとき、タクシーの運転手さんが日本人だと分かったら、「僕のタクシーには日本人は乗せない、降りろ」と言ったり。そんなことがしばしばありましたから、仲が悪いと不便だと思うのです。隣の国だからよく旅行に行くのに、お互いに変な目で見たり憎んだりすると、いろいろな不便なことがあります。だから、難しいけれども、仲よくなるのが大事だと思います。

それでは、どうすれば仲よくなれるでしょうか。政治交流などはだめです。政治家同士が会ってよく「親しくなろうよ」という宣言をしたりするのですが、韓国の冗談で、「政治家と精子は似ているものだ。人間になる確率がすごく低い」といいます(笑)。そのように、政治家を尊敬する人々は余りいないので、政治交流のような上のレベルの交流では、お互いの国民が相手の国民と仲よくなろうという気持ちを持つことは難しいと思います。やはりお互いに親密さを感じるには、文化を通じて、文化交流でお互いを理解することが大事だと思います。

それで、文化交流をやろうと、上のレベル、要するに政治家や公務員が結構いろいろなことをやっていたのですが、今までそのような文化交流がパツとしたことは一回もなかったと思います。3年か4年前、「K O R E A E X P O」という韓国の文化を紹介する企画を韓国の政府関係の団体が、予算を毎年10億円ぐらいかけて、東京で2回、大阪で1回やったのです。

そのとき、僕も諮問委員として、その団体に行っているいろいろなことを言いました。特に日本の若者たちが韓国に対する関心が薄いので、日本の若者に韓国の文化を紹介する、韓国の文化に接するきっかけを与えるという企画で、「K O R E A E X P O」をやったのです。聞いたことはありますか。ほとんど聞いたことがないでしょう。10億円をかけてビッグサイトでやったのですが。

多分それはこけるだろうと、僕は諮問委員をやる

ときに予想していたのです。なぜかという、そのような企画をやる人たち、公務員、学者—ここにも学者さんが何人いるのですけれども、すみません(笑)—それから、政治家などはちょっと頭が固いし、現場のことがよく分からないのです。それで、李美子さんのコンサートをやろうとか、ばかばかしいことを結構言ったのです。

僕が提案したのは、若者の心をつかむには、現場の文化、要するに若者が何が好きなのか、それをよく調べてやらなければならないと言いました。3

～4年前です  
から、あのとき  
日本では「カリ  
スマ美容師」が  
流行っていたの  
です。それで、  
韓国では「カリ  
スマ美容師」と  
いう言葉は使わ  
ないのですが、  
有名な美容師が  
いますから、そ  
の美容師を何人  
か連れてって、  
日本



のカリスマ美容師と競争させる。それで、現場で抽選で何人か選んで、その人の髪をその美容師が自分の作品として作る。そのようなことをやると結構若い人が来るのではないかと言ったのですが、結局そんなことはやりませんでした。

そのように莫大な予算をかけて文化交流をやることはやるのですが、人が集まらないのではほとんど意味がないと僕は思います。民間レベルで、若しくは個人レベルで文化交流をするというのは、文化交流ではなくて、お互いの文化に興味を持ってそれを楽しむことですが、それが文化交流の形としては一番いいことだと思います。

例えば韓国では、小学生と中学生の間では日本語

ができるやつが格好いいやつだと周りから認められているのです。小学生と中学生の中では、日本語ができると結構人気者になるのです。なぜかという、日本のゲームが人気があるからです。日本のゲームには、RPG(ロールプレイングゲーム)が主流になっていますが、ロールプレイングゲームをご存じですか。ゲームの中に入って自分が主人公になっていろいろな冒険をするのですが、それが物語の形式をとっているのです。それで、いろいろなせりふが出てきて、説明が出るのです。それを読みながら

ゲームをするのですが、日本語が読めないとゲームができません。

韓国では、日本文化解禁が1998年から始まったの

で、ゲームはOKです。人気のあるゲームはハンゲル語(韓国語)版が出て、全部訳して出るのですが、韓国のゲーム市場自体が小さいのです。韓国でもみんなゲームはやっているのですが、大体オンラインゲームといって、インターネットゲームをやります。ですから、1人でやるテレビゲームの市場はそんなに大きくないのです。でも、やはり「ファイナルファンタジー」や「ドラゴンクエスト」などの大作は韓国でも結構売れますから、韓国版を作りますので、それは日本語が分からなくてもいいのです。しかし、ゲームマニアというか、中学校や小学校に行くと、クラスの中で5～10人はゲーム好きなので、韓国版が出ていないゲームもやるの

です。

その方法は2つありまして、インターナショナル版を買うことと、日本語そのままです。インターナショナル版というのは英語版です。アメリカで売っているものです。アメリカで売っている日本のゲームは、全部英語に訳して出します。でも、韓国と日本の英語の教育は結構素晴らしいところがありまして、何年やってもできない教育をわざわざやっているのです（笑）。ですから、中学生の中で英語を読んでそのゲームができる人はほとんどいないので、日本語でやるのです。

なぜ日本語かという、英語は学校で学んでいるのですが、結構難しい。韓国語と日本語は語順が同じですから、本気で学ぼうと思えば1年でできます。もちろん話すことは難しいかもしれませんが、ゲームに出てくるせりふを読むぐらいなら多分6か月頑張ったらできると思います。それで、ゲームをやるために日本語を本気で熱心に学ぶ人がいるのです。その人は結構人気者です。なぜかという、ゲームをやるためにそんなに勉強する人はいませんから、日本語はできないけれどもゲームはやりたい。そうしたら、その日本語ができる人を家に呼ぶのです（笑）。そして、日本語が出ると「それは何か教えてくれ」と言うわけです。ですから、日本語ができるとあちこちの友だちの家に呼ばれて結構人気者になります。

文化が入るとこのような現象が起きます。昔は中学校と高校で第2外国語はフランス語をやったのです。フランスが格好いい国とみんな思っているので、フランス語を教える先生の数が多いこともあったのですけれども、8割は第2外国語でフランス語かドイツ語をやったのです。しかし、今は高校の6割ぐらいが日本語を第2外国語でやっています。それはやはり日本語を学びたいと思っている中学生と高校生が多いからだだと思います。なぜ日本語を学びたいかという、日本のゲームをやったり、日本の漫画をそのまま見たり、日本のドラマを字幕やダビングではなく、そのまま聞いて分かりたいという需要があるからです。

そのようにして、日本の漫画やドラマなどを楽しんだ今の高校生や中学生を見ると、日本人に対する反感が少なくなるのです。自分が好きなものを作っている国という意識は余りないと思うのですが、要するに、日本の漫画を見たり日本のゲームをやったりすると日本に慣れるのです。R P Gゲームは大抵ヨーロッパ風ですが、漫画は日本の家や日本人、日本の食べ物がそのまま出ますから、それを見て、日本が遠い国ではなくて、本当に近い国のように感じて、日本に1回も行ったことがないけれども、何か親しい国のように感じるのです。それで、日本語を学びたいということになるのです。

立場は逆になりますが、韓流ブームは、そのような意味で日本人の意識を変え、韓国に親密さを感じることに役立つと思います。

先ほど冗談でナンパの話をしたのですが、実際10年ぐらい前に渋谷あたりで、床屋の入り口に「外国人立ち入り禁止」という表札があるのを見たことがあります。それがいろいろな店の入り口に結構あったのです。それを見ると気持ちが悪いし、ぎょっとします。こんな国だったら外国人が差別されたり、危険な所に行くと、外国人であることだけで殴られたりするのではないかと不安な気持ちを感じるのです。

あるいは、若い人たちは韓国に対して無関心に近かったと思います。韓国や韓国人をよく知らないから、何となく距離感がある、そんなところがあったのですが、このように韓国ドラマを見たり、韓国の映画を見たりして、韓国人の考えや生活習慣に慣れると親しみは自然に出ますから、韓流ブームは、先ほど李鎮奎先生の資料で出たように、韓国に対する親近感を高めたのです。

そのようにして、日本人が韓国の文化を楽しむ。逆に、韓国では日本の文化を楽しむ。それを文化交流とっていいのかわかりませんが、それでお互いに親近感を感じれば、友だちにならなくても、お互いがお互いの国にいて不便や危険さ、不安を感じることはないのではないかと思います。その意味で、韓流が起こったのは、僕はすごく素晴

らしいことだと思えます。

なぜ日流ブームは起こらないのかということについて、僕が言っていることと、先ほど林先生が言ったことがちょっと違うので、疑問を感じる方がいらっしゃると思います。僕は毎日漫画を読んでいる人間ですが、毎日漫画を見たりアニメを見たりする人の目で見ると、日流が起こるはずがないと思います。

1998年に韓国に帰って『僕は日本文化が面白い』というタイトルの本を出して、日本文化を褒めたことで僕は評論家になったのですが、元々の専門は経営学です。別に日本の文化を研究していたのではなく、好きで好きでたまらなくて、毎日漫画を読んだりゲームをしたりしていたことが高じて評論家になってしまったのです。『僕は日本文化が面白い』で大人たちはショックを受けて、結構センセーショナルな本になったのですが、若者、青少年、中学生・高校生・大学生は、ショックどころか「あのおっさん、何言ってるんだ。当たり前のことをよく言うな」と感じたのです。なぜならば、日本文化解禁は正式には1998年ですが、みんなその前からずっと日本の漫画・アニメ・ゲームは見たりやったりしていたからです。

僕は1964年生まれですが、小学生のときから「鉄腕アトム」を見たり、大体手塚治虫の作品は韓国に入っていました。アニメでは「マジンガーZ」「銀河鉄道999」「ジャングル大帝」「リボンの騎士」など、ほとんど見ていたのです。ゲームもインベーダーを初め、日本のゲームはほとんどやっていたのです。それで何を解禁するのだと不思議に思ったのです。文科省の大臣に当たる韓国の文化部長官が、「今から日本文化を解禁します」と言うのを見て、コメディをやっているのかと思ったほどです。そのときは日本の漫画を解禁すると言ったのです。その解禁の内容は、韓国で日本語の漫画を日本語そのままでも出していいと。だれが読むのですか(笑)。

1960年代から大体の日本の漫画は翻訳されて韓国に入ってきていたのです。アニメもそうでし

た。ただし、日本の漫画やアニメであることは隠しました。神社が出るとそれを寺に変えたり、名前も全部韓国人の名前に変えたのです。僕は「スラムダンク」も結構好きだったのですが、韓国に帰って「スラムダンク」の話を若い人たちとすると、全然話が通じないのです。僕は日本で「スラムダンク」を読んだので、僕は「桜木花道」と言うのに、韓国の若い人たちはそれを韓国人の名前に変えた漫画を読んだから、主人公は「桜木花道」ではないのです。

このように、日本のアニメや漫画を禁止していたのではなく、日本の漫画であることを隠すだけだったのです。ゲームも大体そんな形で入ってきていたのです。僕は今41歳ですが、僕のように今でも漫画を読んだりアニメを見たりする人間は変人です。普通の大人は漫画やアニメを見てはいけないというのが韓国の一般的な考えですから、大人たちは自分も幼いころ漫画を読んでいたのに、それを忘れていて、状況をよく理解していなかったのです。解禁時でも韓国で出回っている漫画の7割が日本のものでした。テレビアニメは95%が日本です。ゲームはオンラインゲーム、要するにインターネットでやるゲームではなく、テレビゲームといってプレイステーションなどでやる形のゲームも、95%以上日本だと思います。ですから、解禁してもブームが起こるはずがないのです。元々ほとんど日本のものですから、95%が100%になったとして別に変わることはないのです。

その後、解禁した日本の映画ですが、日本の映画がだめなのは皆さんもご存知でしょう。日本人も見ない映画を韓国人が見ますか(笑)。それと音楽ですが、B o Aは日本で大ヒットしているのですが、日本語で歌っています。日本の歌が韓国にそのまま入ってヒットすることはないと思います。皆さんのような世代は趣味で音楽鑑賞などに行ったことがあると思います。音楽を聴く、それはビートルズのような時代の話です。

今は歌は聴くのではなく、カラオケで歌うのです。要するに、音楽の役割が、人に聴かせるのではなくカラオケで歌わせるのに中心が移ったので、

自分の国の歌詞でないとなかなか受け入れられないのです。韓国で日本語が分かるのは、若い世代で2～3%だと思います。そのような人はカラオケに行って日本語でそのまま歌うかもしれませんが、普通は日本語で歌えないのです。ですから、日本の歌が韓国でヒットすることはないと思います。

ただし、日本の歌はメロディがいいので、韓国の歌詞に変えて韓国の歌手が歌ったものは結構ヒットしたりするのです。それはあるのですが、言葉の問題で、日本のJ-POPがそのまま韓国に入ってヒットすることはないと思います。

逆に、幾ら韓流ブームがあっても、韓国の歌がそのまま日本で売れることはないと思います。サウンドトラックなどで少しは売れるものもあるのですが、やはり理解できないし、カラオケで歌えないのです。BoAのように最初から日本語を学ばせて、日本語で歌わせないとだめだと思います。

日本のドラマも解禁したのですが、なぜブームにならないかというと、短いのです。韓国のドラマは長いのです。「冬ソナ」は20回ですが、短いほうです。韓国では大体5～6回ぐらいたったとき、それが話題になると視聴率が上がるのです。でも、日本のドラマは大体11回か12回ですから、すぐ終わってしまいます。それは韓国人の気質には合わないのです。

中国はもっとすごいですから、あそこは20回以上でないとヒットしないらしいです。韓国のドラマも50回とかもよくやります。そんな文化的な違いがありますから、日本のドラマが、今ケーブルでやっているものはやっているのですが、そのまま一般のテレビで見ることはできないと思います。

もう1つは、元々NHKの番組を余り見ないですから、「冬ソナ」をやってもいいのです。「美しい日々」をやってもいいのです。視聴率が3%出るとNHKは喜ぶのではないですか。でも、韓国のテレビ局は4局あるのですが、どの局でも、視聴率が10%だったらその番組は廃止にします。日本のドラマをやっても大体視聴率5%だと思います。ですから普通のテレビでは放映できないのです。N

HKは余り視聴率が高くないので、「冬ソナ」で5%取ると大喜びしたのですが、向こうで日本のドラマをやって5%だったら、そのPDは首ですね。

日本文化解禁をしてもなぜ韓国は何も変わらなかったのかというと、このような事情があったのです。元々日本が世界的な競争力を持っている漫画・アニメ・ゲームはずっと昔から入ってきて楽しんでいたので、別に変わることはなかったし、音楽は言葉の問題で、テレビドラマは視聴率の問題で、映画は元々だめで、何も変わらなかったのです。

若者の間でも大人でも、日本に対する反感の1つは、韓国では日本の文化をすごく楽しんでいるのに、なぜ向こうでは韓国の文化を受け入れないのかというものでした。それで、解禁するとき、「向こうが受け入れていないのに、なんでうちだけ解禁するんだ」という声もあったことはあったのです。今の韓流ブームでそのような反感はなくなったと思います。逆に、韓流ブームが起きて、日本人の中では「うちではこんなに韓国の文化を楽しんでいるのに、向こうはなんで何もしないんだ」という誤解もあります。このような背景があるから、何も変わることはないのです。

林先生が素晴らしい講演をなさったので、アドリブで40分ぐらいろいろなことをしゃべったのですが、何を言ったのか僕も余り覚えていません(笑)。ただし、最後に一言いうと、韓国人の若者は日本の文化が大好きな人が結構いるのです。それで、日本に対する親近感が高まっています。そして、韓流ブームで、日本人の中で韓国に対する親近感が高まっているのですから、今まで「近くて遠い国」だったのですが、それが徐々に「近くて近い国」になって、お互いに友だちになる、そのような友情を感じる機会がたくさんあるのではないかと思います。今回の韓流ブームはお互いの国民のためにもすごくいいことではないかと思います。以上です(拍手)。

## パネルディスカッション

- パネリスト： 林 夏生（富山大学人文学部国際文化学科助教授）  
金 智龍（文化評論家）  
道上 尚史（内閣府参事官、元在韓国日本大使館参事官）  
木宮 正史（東京大学大学院総合文化研究科助教授）  
李 元徳（国民大学副教授）  
進行： 金 雄熙（仁荷大学助教授、SGRA研究員）

（金雄熙）第2部のパネルディスカッションを始めます。私は進行役を務めさせていただき韓国仁荷大学の金雄熙と申します。

私が勤めている仁荷（イナ）大学を日本の方に紹介するときに、昔は「イーナ大学」と言っていたが、最近、その紹介の仕方変えようかと考えているところです。今の韓流ブームの中で、ヨン様のほかにも韓国のイ・ビョンホンさんという俳優が注目を集めているようですが、イ・ビョンホンさんが主演した「オールイン 運命の愛」という有名なドラマがあって、その中の役名が「イナ」ですね。それで、これからはそういう形で日本の方々に紹介すればいいかなと思っているところです。

私は、1991年から1999年の3月まで日本に留学しました。8年ぐら生活しましたが、そのときは、先ほど金智龍先生の発表にも話が出ましたが、韓国の存在感は余りなかったのです。あるとすれば、一部の焼き肉屋に行った時に、「ああ、ここはちょっと韓国のにおいがするな」くらいだったと思います。

最近はそのが大分変わりました。私も昨日、日本の知り合いの所に伺いまして、そこで韓国の存在感が日本の一般家庭まで広がりを見せているのではないかという気持ちを持ちました。日本の民放に「韓流アワー」というものがあって、そこで「天国の階段」という韓国のドラマを上映していました。

それを見てびっくりしました。本当に隔世の感を覚えました。

さて、今日のパネルディスカッションに参加して下さるパネリストの皆様をご紹介します。

私の右側からご紹介しますと、道上尚史さん、内閣府参事官でいらっしゃいます。皆さんの側から見ると一番右側が、韓国の国民大学副教授であり、現在は東京大学の客員教授でいらっしゃる李元徳先生です。先生の隣は、現在、東大総合文化研究科の助教授でいらっしゃる木宮正史先生です。それから、今日の主題発表者のお二方の先生もパネルディスカッションに加わっていただきます。

次に、討論の進め方について簡単に説明いたします。

まず、パネリストの3人の方に10分程度議論していただいて、その後今日の発表者のお二方に感想なり答弁を頂きます。そして、フロアに議論をオープンしたいと思っております。

今日のパネリストとして参加するご予定だった大橋さんは、急にご病気で今日は不参加ということになりました。

では早速、道上先生からご議論をいただきます。なお、今日の議論は、パネリストの皆様の属する組織や国籍にとらわれずに、個人の立場から自由に議論を展開していただくこととなりますので、ご了承ください。

(道上) 内閣府におります道上です。今日はお招きいただきありがとうございます。

私は元々外交官で、ずっと長い間韓国をやってきました。初めて韓国に留学したのが1984年です。ソウル大学でここにおられる李元徳先生(当時は修士の学生)と出会い、それから20年たってしまいました。

ほんの数年前までは、「韓国の映画は面白いよ、俳優もなかなかいいよ」と日本人に言っても、「ふーん」とつれなかったのですが、最近では、私が知らないようなドラマや俳優を、日本の普通の女の子やお婆さんたちが知っている。この韓国ブームは、嬉しくもあるし、自分だけの宝物がみんなのものになってしまったようで、ちょっと寂しい気もしています。

さて、「パリ症候群」という言葉をご存じでしょうか。日本の、主に女性が、「芸術の都パリ」にあこがれて留学に行く。でも、パリの現実に突き当たってう

まくいかない。キャリアアップもできないし、夢見ていたロマンスも生まれない。パリの人は冷たいし、日本のような丁寧なサービスもない——ということで、がっかりして適応不全を起こし、お医者さんのお世話になるという人も多い。これを「パリ症候群」といいます。

私は最近の韓流ブームは、この「パリ症候群」と対照的なものだと思います。つまり、明治以来、日本人はフランスに、欧米にあこがれたわけです。よく分からない遠い国にあこがれた。過大評価ともいえる。実際に接してみると、夢からさめてがっかりする。韓流ブームはこの逆で、実はすぐそばに、魅力のある、活気あふれる国があるのに、日本側が気

付かずにいた。過小評価や偏見もあった。最近やっと遅ればせながら気がついて、韓国も案外いいじゃないかと「発見」し、評価する、そんな構図ではないかと思っております。

2000年に、私はソウル大学で講座を持たせていただき、日本に留学していた韓国学生たちの色々な話を聞きました。彼らは非常に正直で、韓国側の日本観、非常に古い、的外れの日本観を批判的に紹介してくれました。「正式国名は大日本帝国だろう」「日本では毎日小学校で天皇の写真に最敬礼しているのしょう」「日本語なんか勉強して、売国奴じゃないか」という見方が現にあるのです。

他方で、日本側の驚くべき無知もまだあるのです。「韓国語というのがあったの?」とか、植民地支配を知らない、或いは「日本は韓国と戦争して勝った」とかです。

日本語もよくできる女子学生が、ボランティアで知り合った日本のお

婆さんから、「韓国人は、日本は昔どうしたとかいう人ばかりかと思っていたけど、あなたのような人とは仲よく付き合えそうね」と言われたのです。

その学生さんも人がよくて、「そうですね」と笑顔を返した。でも帰って考えると「あの答えは間違っていた」と思った。慰安婦問題のニュースなど見たら、本当に悔しくて涙が出る、日本が悪いと思う——というのです。彼女のそういった葛藤は、自然なことだと思います。同時に私は、ここでとりあげたお婆さんを、韓国への理解が浅いと批判することは可能なんですけど、余り目くじら立てて、せっかく芽生えた隣国への関心を消したりするのは生産的でないという気がします。ともかく韓国に目を



向けることが重要なスタートだと言いたいのです。最近の韓流ブームについて、上っ面だけの、泡のようなものだという見方がありますが、私はもう少し肯定的に見ています。

その理由は3つあります。1つは、友だちでも夫婦でも、完全に相手を理解することなどありえないわけです。まず相手に関心を持つこと、向き合って話をし、付き合うことがスタートです。目をそむけては何も始まらない。日韓はその第一段階に達していなかった。日本側も韓国を警戒したり、基礎知識がなく敬遠したりで、ちゃんと向き合っていなかった。完璧を求めるのではなく、とにかく第一段階を突破したこと自体に意義を見出したいのです。次の段階では意見がちがひ、けんかをすることもあるでしょう。それでいいと思うのです。

2つ目に、相互理解についてそれなりの基盤、インフラが両側にでき、育ちつつある、その上の流行だから、泡のような現象ではないだろうということです。今日もいろいろ建設的な分析、発表がありましたね。韓国側でも日本側でも、昔のように観念論をふりまわしてバツサリ批判するとか、相手の実像を見ずにつばを吐いたりということは、大分少なくなってきました。相手国への一面的な見方を戒める自己批判も、双方で育っています。

3つ目に、今日会場には女性の方も多いのですが、私の20年来の経験では、日本側が韓国に目を向ける一番の障壁というか、最後のとりで、ハードルは、中高年女性だったという気がします。先ほど申しましたように、「韓国って面白いんだよ、歌も映画も…」といっても、一番応じてくれない。韓国はこわい国、わかりにくい国という思いが最も強かった。その中高年の女性が、今回振り向いてくれた。ついにそこまで来た、これは本物だということです。

以上、日韓相互理解がそれなりに基盤を築いてきているという方向でお話ししましたが、そう簡単じゃないというのも真実です。私は外交官生活が長く、明るい希望と厳しい現実の両方をいつも見るし、見ざるを得ないのです。「日韓関係はよく

なった、もう大丈夫だ」という人は20年前にもいたし、今もいるのですけれども、そういう人に対して私は、「いや、まだ安心はできません。バラ色の夢にひたってはいけませんよ」と言います。片や、歴史問題などに悲観的になって、「やっぱりだめだ。日韓は結局、わかりあえないんだ」という人には、「いえ、十分希望はあります」と言うのを常にしております。

これから、私の7つのポイントないしメッセージを、駆け足で申し上げます。

1つ目は、日本は韓国が不得意科目だといいますが、逆に韓国も日本のことが不得意科目なのです。ほかの国に比べると日本に関心を向けてくれます。それはありがたいし、大事にしなければいけません。でも、韓国には「日本などよく知っている」という人が多いのですが、実はそうでもないのです。日本について基本的な誤解や無知も多いのに、「自分の日本観が絶対正しい」「それへの批判は、欺瞞だ、危険な右傾化だ」とやってしまう人が、まだ少しいる。お互い姿形が似ているからこそ、「自分と同じ発想だろう」とまちがった思い込みをしやすいのです。実際は、考え方、ものの感じ方に大きなギャップがあります。相手は自分と違うのだ、自分は相手を知らないのだということからスタートしたほうがいいのです。

よく言うように、日本側は1945年以前の歴史を知らなすぎる。韓国は45年以降の日本を知らなすぎる。そのとおりだと思います。

人間も国も双方向、お互い様であります。つまり、相手が自分のことを嫌いだ、いつも悪口ばかり言っている、信用していないとわかると、自分もその人のことをなかなか好きになれません。人間も国も同じだと思います。「あなたは自分と大分違う。でも、あなたは大事な相手だ。あなたのいいところはわかっている」と、お互い、他者の存在、異質なものの存在を受け入れることから始めることが大事です。意見は違っていいのです。国内でもみんな意見が違うわけですから。そういう違い、神経がざらざらした付き合いを負担に思わず、逆に楽しむこ

とができれば、本物です。ちょっとやりにくい面もあるけれど、すごく良質の刺激を受け、国内では気づかないことに気づく。それが外国付き合いの醍醐味です。人間も国も、自分だけでは生きていけないわけで、対立はあり、主張すべきは主張しつつも、大事にしていくべきです。

2つ目は、「文化」は魔法ではない、外交問題をさっと解決してくれるわけではないことです。

文化は大事ですし、外国に対するいわれのない偏見や無知などを随分解消してくれます。日本国内でも偏見はありまして、私は大阪の人間なのですが、「大阪人はがめつい」とか、「東北の人間は暗い」とかは、正に偏見なのですけれども、ドラマや映画は、そういう歪んだ決めつけを修正してくれる場合があります。

でも、歴史問題や安保問題、外国への歪んだイメージ、知識不足を、文化が瞬間的に解消するわけではないわけです。武道館を満員にするような有名なミュージシャンが、インタビューで「万という人を集めることはできても、音楽なんかで世の中変わりませんよ」と、さめた答えをしていました。

「冬ソナ」ブームは結構なことですし、文化交流一特に韓国や中国一は大いに拡充したいのですが、それで国民同士の関係は安心だというものではありません。小中学校の教育や、新聞・雑誌、テレビの報道や家庭での対話で日々形成される外国イメージというのが、非常に大きいのだらうと思います。

隣の国ゆえに付き合いが難しいということもあります。遠く離れた家ならば、ごみの出し方が悪かろうが、ピアノの音がうるさかろうが関係ないのですが、隣だったら気になります。隣の子供がいい高校、大学に受かったというのも、自分のところがうまくいっていなかったら腹が立ったりするのです。それゆえに、日韓は今後も問題や葛藤は避けられません。それは当たり前で、隣国の宿命だと思います。

しかしながら、これもキーフレーズのつもりなのですが、「日韓関係は、はやりすたりに任せてはいけないほど、重要」なのです。たまたまうまくいっ

た、ではダメでして、つねに意識的な努力が必要なのです。ワールドカップ共同開催が、韓流ブームが、ヨンさまがあるからもういいということではなくて、常に自転車をこいでいなければいけません。自転車は、こぐのをやめると、止まるのではなくて、バタッと倒れてしまうのです。お互いネガティブな見方が根強いだけに、自然に任せるのではなく、常に意識的に前にこぎ続ける必要があります。それは、相手のためというより、自分のために必要な作業なのです。

3つ目に、「戦後日本の根本的な問題は、ヒストリーとセキュリティだ」と考えています。つまり、一方には、安全保障というものを全然理解しない人がいた。平和憲法があるから攻めてこないとか。冗談ではありません。今なら誰もがわかりますが、国際社会とは、そういうものではないのです。片や、自国の歴史をきちんと振り返ることをいやがる人、戦争と言えば被害者意識だけが先に立つ傾向があった。「歴史問題、うるさい。中国韓国ガタガタ言うな」という人がここ10年ぐらい日本で結構目立っていますが、これは間違いだと思います。外国に言われたからとして教科書を直す必要はないのです。それはちょっとおかしなことだと私は思います。むしろ、自分の国の歴史だから、光も陰も、自分たちの近現代史をきちんと振り返り、子供たちに堂々と教えましょう、ということです。誇りを持っていい歴史です。同時に百点満点ではなかった。日本人が日本の歴史を知らないということではよくないと思います。

歴史「認識」という言葉をふりまわして議論が混乱するケースが多いように思います。私がいつも言うのは、基礎的な「事実」を知ろうということです。歴史「認識」というのは、なかなか難しく、ナポレオンをどう評価するかはイギリスとフランスで大いに違おうし、第一次世界大戦の契機になったサラエボ事件の評価も、時期によって相当揺れ動くわけです。歴史学者は盛んに議論してもらっていいのですが、一般の国民は、「認識」以前に、A B C的な「事実」を知ることが肝腎です。認識以前の基礎知

識です。我々はここが弱いのです。

真珠湾攻撃は、またヒロシマ・ナガサキは、アメリカの歴史であると同時に日本の歴史だといえます。同じことで、朝鮮支配は、日中戦争は、日本の、同時に韓国や中国の、歴史なのです。「こういうことがあった」と知っていた方がいい。

たとえば、高校生や時には大学生でも、太平洋戦争はさすがに知っているけれど、朝鮮の植民地支配したことを知らないとか、日清戦争・日露戦争というのは正に朝鮮半島を巡る争いで、あの辺で行われた戦争なのですが、それも知らない。日本は中国とロシアと戦争をしました、勝ちました、終わり。これでは本質をとらえていないでしょう。閔妃（ミンピ）暗殺を知らないというのは、僕が韓国人だったら唾然とするでしょうし、にこにこ付き合いながらも、なんと底の浅い人（国）かと思ってしまう。別に韓国の人と議論して勝つためではなく、自分の国の歴史をもうちょっと知っておこうよ、というわけです。

4つ目に、韓国と中国を比較してみましょう。まず日本の調査で、韓国中国それぞれへの親近感の数字を掲げてあります。

(内閣府世論調査；数字は%)

	1980年	2004年(20代)
韓国に親しみを 感じる	43.1	56.7 (63.1)
中国に親しみを 感じる	78.6	37.6 (31.3)

1980年頃——中国は改革・開放の時代、鄧小平さんが日本に来る前後です。韓国は全斗煥さんが政権を取る少し前、光州事件という流血事態もあり、政情不安定で、経済的にも離陸していないときです。当時は中国への親近感の方がはるかに数字が高いのです。80年では、中国が8割近い。韓国は4割ぐらい。それが2000年を迎える少し前に逆転してしまっていて、2004年には韓国の方がずっと高い。しかも若い人だけを見たら、韓中の差はもっと大きいのです。63対31ですから、完全にダブルスコアです。日本の20代の方は、韓国にググツとなびいてきて、中国からサーッと離れてきている

ということです。

さて、韓国が日本文化にどのように接し、受容してきたかという話がさっきのセッションでありました。ここでは、中国が日本文化にどう接したか、どういう印象を持ったかを振り返ってみましょう。

1980年代前半、中国では、日本のドラマ、映画、アニメの一大ブームがありました。その存在感は今よりずっと大きかったのです。非常に多くの中国の方が、おしん、鉄腕アトム、一休さんなどのTV番組に夢中になり、山口百恵、高倉健、中野良子の人気は大変なものでした。日本文化の印象は非常に鮮烈でした。欧米文化が、政治的配慮もあって紹介されていない時代です。それまで革命スローガン色の強い「文化」に慣れ親しんだ人たちにとって、日本文化は、「自由な西側文化」を代表する、とても新鮮で、人間的な魅力あふれるものでした。今、日本の歌やドラマは、当時ほど大きなインパクトはありません。ここ十数年、村上春樹や浜崎あゆみが人気を博したとか、今も若い日本ファンが多いとかはありますが、90年代以降アメリカ、ヨーロッパ、さらに韓国の文化が本格的に流入したため、以前に比べ、日本文化は相対化されたわけです。日本観については、90年代中国の愛国主義教育強化の影響があるという指摘もあります。

さて、この「親近感調査」の動向を見ると、時々政治的イベントによって、数字は敏感に変動することがわかります。天安門事件や歴史教科書問題とかです。基盤のしっかりした相互理解を進めるには、「普段着の付き合い」で事足りるのではないのです。

さて、韓国と中国とでは、そもそも日本との歴史が違うわけですし、日中は戦争をしたのに対し、日韓は戦争でなく植民地支配です。血の流れた量も大きく違います。そこをおさえつつも、1945年以降の韓中比較をした場合、2つのポイントがあります。

1つは、日本観というものの鍛えられ方が違います。韓国では——昔から「昼は反日、夜は親日」という、ちょっと揶揄したような言葉がありましたが——韓国で日本への反発を内心抱きつつも、日

本の技術水準の高さ、日本人の勤勉さというプラスの評価は、いわば裏の常識だったわけです。好き嫌いを問わず、結構大きな存在だったわけです。60-70年代は、奇跡的な経済成長への賞賛、現代的で優美なファッションへの羨望もありました。98年以降の「日本文化解禁」のはるか以前から、日本の文物——書籍や技術や商品やデザイン——にたくさん接していたわけです。「でもやはり歴史的、政治的には許せない」というわけで、アンビバレントな、二面的な日本観が1945年以降続いていました。

中国では、知識人も一般国民も、もっと単純な日本否定ないし非難という構図が強かったわけです。日本の存在感というか「気になる度合い」も、韓国よりはずっと低かったわけです。

以上要するに、韓国の方が一我々から見たら日本理解はまだまだであるにせよ一日本への関心が、中国より高い。日本イメージが濃厚で屈折があるだけに、また中国より時々世論に左右されやすいだけに、揺れ動くことありますが、総じて、中国よりは日本観が鍛えられていると思います。

2つ目は、日本観のみならず、価値観や言論の多様さ、自由度について韓国と中国では大きな差があります。韓国では、以前から肯定面評価を含め色々な見方がありまして、数年前から、マスコミの方が、「従来の日本報道はあれでよかったのか」とずいぶん議論し反省もしておられます。正確な日本像を伝えるのでなく、むしろ感情的な反発を助長したものでないか、改めなければ、という方向の議論が公開の席でも結構見られます。

さらに1998年、小淵総理と金大中大統領の首脳会談に向け、両首脳の日韓関係改善の強い意欲が大きく作用し、結実したと思います。当時、互いに相手の国の映画が流行りました（「Love Letter」「シュリ」）が、特に日本から見て、金大中大統領のおかげで韓国のイメージは新しく、よくなったといえます。文化、社会意識だけでなく、政策面、指導者の改善意欲というのが相当大きく働くのだと思います。「はやりすたれにまかせるには、日韓関係

は重要すぎる」というメッセージです。自然に任せてはいけないわけで、意識的な努力が、自転車をこぎ続ける努力が双方に必要です。

この年、大統領は、「金融危機にある韓国を支援してくれて、日本ありがとう」と公の席ではっきり述べられ、「ODAをはじめ戦後日本のいいところはたくさんある。韓国はそれにもっと目を向けよう」と強調されました。それは日本人の目に非常に新鮮でありました。

5つ目は、言葉は日韓の大事な架け橋だということです。私は元々韓国というのは言葉の勉強から入ったのです。といっても、外務省に就職してから習い始めたのですが、日本人にとって韓国語ほど近い、学びやすい外国語はないわけです。

高速道路は「コーソクドロー」ですし、酸素マスクは「サンソマスク」ですし、調味料は「チョーミリョー」です。似ているものとして、図書館は「トソグァン」、市民運動は「シミンウンドン」です。木の芽が「スクスク」伸びるとか、うれしい意味で背筋がぞくっとするようなものがたくさんあります。中国語とは比べものにならないぐらい日韓は似ているわけです。英語のように、辞書を何度引いても覚えられないということは、まずありません。辞書を引かずともわかってしまうくらいです。

言葉というのはそもそも別の発想を知るというトレーニングでもありまして、日本人からみてやりやすいという意味でも、是非大事な懸橋として勉強されたいと思います。

最後に6つ目と7つ目はまとめてほんの一言にとどめます。アジア連帯、東アジア共同体、日中韓連携強化というのは基本的には結構なこととして、アジア各国で都市生活が大幅に増え、共感帯が広がっており、理解を進めるチャンスなのです。でも、首をかしげる面、気を付けなければという面がありまして、アジア人のアジア観、アジア論というものに問題がある、まだ本物ではないと思うのです。

日本以外のアジアでは、東洋と西洋を二極対立的なものとして、「西洋は強大だが邪悪な文明だ。我々東洋は、弱く貧しいが、清く正しい」「物質文明で

は西洋が世界を支配するが、精神的道徳的にはアジアが優位だ」という見方が強いのです。本当にそうでしょうか。私はこういう見方には全然同意しません。

それから、「アジアは1つ」「我々は顔が似ているから、皮膚の色が同じだから分かりあえますね」というのもよく聞くのですが、これもレイシズムという言い過ぎかもしれませんが、古い、歪んだものを感じます。私などは「いや、ちがうよ」と言います。「アメリカ人でもアフリカの人でも、心は通じるし、隣の国でも同じ国でも変な人はいるし、話の通じない人はいるよ」というわけです。アジアは1つというのも実に乱暴ですね。経済も政治も、文化も言葉も宗教も、国によって随分違うわけで、多様性を踏まえた上でなければいけないと思います。たとえば韓国でも、「我々韓国人は、アジア、アジアといひながら、アジア各国への差別意識があり、アジアを把握していない」との自己批判があります。

アジアはどうもこういう、克服すべき古く固い殻というか、コンプレックスの裏返しの部分がまだ相当残るわけです。こういう内に閉じた発想では、世界に通じないし、アジアのためにもならないと思います。うまくその辺を修正して、新しい、開かれた、しなやかなアジアという方向を発信すべきです。その先頭走者は、私は日本だと思います。自由で多様で、国や血の壁をこえた人間尊重、ヒューマンセキュリティーの考え方が根を下ろしており、それは日本のいいところだと思います。

日本のまわりを見わたすと、やはり韓国です。韓国の方々は急速にそれに追いついて、追いついています。今、30～40代の人々が、勢いがある国を動かしているのは、日本よりも韓国です。若い層が支える市民運動は、ちょっと危なっかしい面もあつたりするのですが、とにかく気概、バイタリティはすごいものです。韓国の学生さんは、ヨーロッパでもアジアでも、てくてく歩いている人が一杯います。社会の成長率というのがあつたなら、たぶん韓国は日本より高いでしょう。

対立的なアジア観を打破して、世界に通じる、世界

に貢献するようなアジア、いい意味でのアジア連携を発信できるのが日韓だと思います。

長くなって恐縮です。以上です。ありがとうございます（拍手）。

（金雄熙） ありがとうございます。「はやりすたりに任せるには、日韓関係は重要すぎる」という立場から、新日韓関係を築くための7つの提言、メッセージを下さいました。こういうメッセージを本にしたなら、ベストセラーになるのではないかと思いますけれども（笑）。

時間の関係で、早速ほかの先生の議論に入りたいと思います。先ほどご紹介の順に従って、李元徳先生にご議論をお願いします。

（李） 李元徳と申します。私も資料をあらかじめお配りしましたので、それを基本にしてお話しします。

その前に、この会議の経過について付け加えますと、私はサバティカルで10か月ぐらいアメリカに行き、去年の10月初めごろ日本に来たのですが、そのときにちょうど今回の日韓フォーラムで何をテーマにすればいいのかということをお西さんと相談をしたわけです。

当時、日韓関係は6つのテーマ、あるいは日韓関係で一番重要な懸案は6つの領域があるのだという考えがあつたのです。1つは北朝鮮関係、日本と北の関係をどうするか。2つ目が、安全保障の協力、あるいは葛藤をどうするかということです。3つ目が、FTAを中心とした経済関係。4つ目が、歴史問題、例の過去の問題を巡る対立という懸案があります。もう1つ、最近問題になっているのは、東アジアの共同体の建設を日韓がどうやってすればいいのかということが5つ目にあると思います。

最後に浮かび上がったのが、文化、韓流の話になったのですが、いろいろお話をする中で、一番面白い話題でインパクトの大きい、それから新鮮で含みをたくさん持っているのは、韓流や文化の交流の話ではないかという結論に達したわけです。それで、今回は韓流で行ってみようということで、

このような会議が今日行われることになったという経緯があります。今日の印象では、2人で相談して出した結論は、そんなに間違った結論ではなかったという気がします。皆さん、たくさん集まってこられたし、いろいろなお意見を持っていらっしゃる方もいろいろ集まったので、今日は非常にいろいろな話ができるのではないかと思います。

余り時間ありませんから、僕は3点ぐらい申し上げたいと思います。最初に、この韓流に対する印象論、感想から言いますと、正直に言って戸惑い、しかしながら喜ぶ出来事だと私は感じています。

私は、1988年から1994年まで日本で6年間勉強したわけですが、その当時と比べると、一種の違和感のようなものさえ感じるわけです。「隔世の感」といいますか、日本がこんなに変わったのかという感じです。ヨン様ブームに対する日本のおばさんたちの反応を見ると、昔だったら想像もできないことだという気がします。

それから、私は映画が好きなので、ビデオ屋さんに行ったら、韓国の映画が並んであふれているというのも、昔と比べたら非常に違った現象です。テレビを見ても、ほとんど毎日のように韓国のドラマが見られます。これも非常に面白い現象です。食文化を見ても、どこへ行ってもキムチを売っています。ですから、やはり日本は韓国に対して変わったという印象を持つわけです。

私はこういう現象を日韓関係で見ますと、革命的な現象だといえると思うのですが、これが長期的な流れとして定着できるのかどうかということ言いますと、若干疑問があるわけです。ただし、これは一瞬のブームには終わらないだろうという予測を持っております。

それから、こういう韓流現象が日韓関係にどういう影響を及ぼすのかということ考えますと、非常によい影響を及ぼすだろうと見ております。先ほど道上さんが統計を持ってきましたが、総理府の統計を見ましても、韓国に対する親近感あるいは韓日関係に対する理解度が、去年の統計で最高を記録しました。56%の日本人が、韓国に対して親近感を感

じると答えました。これは戦後の日韓関係史で見ますと、非常に意味のある現象だと思っております。

なぜこの数字が出たのかということ、先ほどもお話がありました。日韓関係において、あるいは国際文化の理解でいうと、日本のおばさんたちは余り交流の前面に出ていない人たちだったのですが、今回のヨン様ブームではおばさんたちの活躍ぶりが一番目立っていて、こんな数字になったのではないかと思います。大まかに言って、こういう韓流や文化交流が盛んになることは、政治的にも経済的にも、あるいは安全保障の面まで見ても、いい影響を及ぼす方向に行くという気がします。

私は日韓会談で博士論文を書きました。当時、1950～60年代の日本人の韓国に対する認識を新聞などでちゃんと調べたことがあるのですが、一言でいうと、否定的なイメージが多かったと思います。韓流は、当時、日本人が持っていた韓国人のイメージからしますと、非常に大きな差を感じます。韓国に対する否定的なイメージを変える1つのきっかけになるのではないかと思います。期待が正直あるわけです。やはり相互の文化に対する理解こそが友好関係の土台になるということを考えますと、やはりいい影響が出るのではないかと思います。

それから、韓流現象というものをどう見るかということですが、1つ指摘したいのは、今の韓流の現象は、その原点を探ってみますと、やはり1998年の金大中大統領時代の日本の大衆文化の開放政策にあると思います。これは多分林先生の専攻になると思うのですが、私が見る限り、1998年の「日韓パートナーシップ宣言」と、金大中政権の対日文化開放政策は、日韓関係の構図を大きく変える役割を果たしたと私は見ております。

それと関連して、韓国での「日流」はどうなるか。先ほど金智龍先生も言及しましたが、私が見るには、今、韓流のような大きな現象としては表れてはいないけれども、韓国の若者・子供の世界では、日本の文化に対する親近感が非常に大きいのです。私は大学で日本の政治や外交を教えているのですが、ほとんどの学生は子供の時代から日本のアニメ

や漫画を見ているし、日本のポップスを1～2曲は歌えるというのが常識になっています。それを見ますと、日本で韓流というものがあるのだけれども、韓国での日流も無視できない現象だということを目指したいと思います。こういった日本で韓流と韓国での日流という現象は、考えてみますと、将来の日韓関係・韓日関係を明るくするシンボルではないかと思えることができます。

韓流の背景、今の現象がなぜできたのかということを中心に考えてみますと、僕は3つの点を指摘したいと思います。1つは、やはり「冬ソナ」です。2つ目が、2002年のワールドカップです。そして、もう1つ付け加えたいのは、皆さんも覚えていると思うのですが、李秀賢君の事件がありました。高麗大学出身の留学生、李秀賢さんが新大久駅で日本人を救出して事故死したインパクトは非常に日本人には大きかったと思います。韓国の青年であんな立派な人がいるのだというのも、韓流ブームの底流にある1つの要因になるのではないかという気がします。

それから、韓流現象をどう見るかということで、政治的な意味合いを含めていうと、今や日韓関係は昔のような垂直的な関係ではなく、もっと水平的な、平等な関係になったということのシンボルとして見ることができます。1980年代以後の韓国を見ますと、経済的にも非常に成長しているし、政治的にも民主化され、市民社会も成熟しています。いろいろな意味で、韓国は日本人から見て、アジアで唯一相手にすることができる国になったということの1つのシンボルとして、あるいはその結果として、韓流というものが解釈できるのではないかと思います。

では、なぜいきなり韓流というものが、日本だけではなくて、東アジア全域でこんなに競争力を持つようになったのかということを考えてみますと、1つは韓国には「386世代」という言葉があります。1980年代に大学時代を経験した、結構優秀な人材が、韓国では「だんたら」というのですが、文化芸能関係の世界に結構入りました。この「386

世代」は、韓国社会の圧縮成長、あるいは政治的に見てもイデオロギー的に右から左を豊富に経験しました。こういう人たちが文化界に入って、非常に競争力を高める役割をしたと私は見えています。実証的には言えませんが、印象論としてはそういう印象を持っています。

3つ目に入りますが、韓流現象というものがほかのイシューとどんな相関関係にあるのかということです。一言でいうと、韓流現象と裏腹に、日韓関係にはいろいろな難しいイシューがまだまだ残されています。ですから、韓流があって日韓関係はこれから問題ないというのは早急な結論であり、ひどい楽観論になるのではないかという気がするわけです。もうちょっと考えてみますと、日韓関係には対立する課題、対立する摩擦要因が依然強く残っています。これと関連して、東アジアの今の情勢を考えますと、僕はナショナリズムの復活が非常に猛威をふるっている時代だと見ておりまして、日韓だけでなく、中国まで含めて、最近、いろいろなナショナリズム的な動きが顕著になっています。

例を挙げると、高句麗関係の歴史歪曲が中国にありましたし、領土紛争も最近しばしば起きています。日本や中国を見ても、国内政治的にも右傾化とはいえないかもしれませんが、ナショナリズム的な風潮が出ています。韓国も大体同じ現象だと考えますと、韓流現象とは裏腹に、東アジアにおける政治、外交、あるいは過去の問題で、依然として対立の傾向が残されていると私は見えています。ですから、韓流があっても、ややもすると日韓関係や東アジアの関係は対立の局面に陥る可能性は十分あると思います。ソフトな側面での接近があるのですが、ハードな側面での認識のギャップは依然大きいといえると思います。

歴史問題との関連でいうと、私が1988年に日本に初めてやってきたときにも、オリンピックのブームがありまして、韓国ブームが、今とは比べものにならないと思うのですが、少しあったのです。親近感のグラフを見るとすぐ分かるのですが、1990年代に入ると、いろいろな過去問題や歴史

紛争が起こって、韓国に対してちょっと冷え込みが来たということがありました。このように、過去問題、歴史問題と韓流は別の次元で動くともいえるかと思えます。ですから、楽観はできません。今年3月になって、もし歴史教科書問題を巡ってまた紛争が起きたら、この韓流はどうなるのかという疑問も正直あるわけです。僕は日韓関係で、依然として歴史摩擦問題は時限爆弾のような存在だと思えます。

それと関連して僕の意見を申し上げますと、歴史認識というのは、先ほど道上さんもおっしゃったと思うのですが、根本的な違いを解消することはほとんどできないと思えます。それに時間も相当かかると思えます。ただ重要なのは、そういう歴史問題で日韓関係全体が悪くなることは避けるべきだと思います。その点でいうと、歴史摩擦問題ができれば起こらないようにする予防措置が日韓間で話し合われればいいと思えます。

それから、もしそういう歴史摩擦問題が起こったとしても、それがほかの 이슈に及ばないように、それから日韓関係全般を悪化するような方向に行かないようにする管理のメカニズムが必要ではないかという感じを持っております。

過去問題以外にも、日韓間にはいろいろな難しい問題が今あります。皆さんもご存じだと思いますが、北朝鮮問題、北朝鮮を巡るアプローチで、日韓の違いは非常に憂慮すべき次元にあると思えます。それから、中国との関係で見ても、韓国は、最近では日本よりは中国の方に近づいているような感じがするのです。ですから、それを日本がどう見ているのかということと考えますと、やはり対立の要因があります。

それから、アメリカとの関係で見ても、日米関係は戦後一番友好な時代を迎えていると思うのですが、今の韓米関係で見るとどうでしょう。やはり大きな隔たりがあると思えます。それと関連して、日韓関係が難しい局面に陥る可能性は十分あると思えます。F T A問題も同じだと思います。F T A交渉に入ればいろいろな対立が出てくるわけです。ですから、韓流という明るい側面と裏腹に、いろい

ろな障害物が依然残っているというのが私の印象です。

最後に1つだけ、今後の課題を申し上げます。今、世界の趨勢を見ますと、地域主義が非常に強く出ています。ヨーロッパではE Uができ上がり、アメリカではN A F T Aができ、東南アジアのA S E A Nも強くなるという中で、北東アジアだけにまだ民族主義、ナショナリズムの強い風潮が残されています。今後のこの地域の未来を考えますと、やはりこの地域においても東アジア共同体というものを作るべきです。いろいろな側面でそういう動きも出ていると思うのですが、そうなった場合に、東アジア共同体とか、東アジアの協力体を作るうえで、やはり重要なのは日韓関係です。

日本と韓国は、考えてみますといろいろな面で価値観を共有しています。市場民主主義を共有しているし、開放的な文化、自由、人権などということを考えますと、アジアで一番価値観を共有している2つの国を挙げるとしたら、やはり日韓です。政治から見ても、日韓関係はアジアで東アジア共同体を作る上で非常に重要な役割を果たすべき関係だと思います。そういう観点で見ますと、この韓流や韓国での日本大衆文化に対する理解は、非常に貴重な資産になりえます。韓流があって、すぐ日韓が協力することはできないと思うのですが、韓流という現象をもうちょっと明るく発展させて、この地域全体の平和と共同繁栄を作るのに非常に重要な資産として、文化的な基盤としてこれを活用すればいいのではないかというのが私の最後の結論です（拍手）。

（金雄熙） どうもありがとうございます。韓流現象の肯定的な側面なり、意義だけではなく限界を、東アジアの共同体構築や日韓関係のさらなる進展との関連でご説明くださいました。

続きまして、東京大学の木宮正史先生にご議論をお願いします。

（木宮） 木宮と申します。実は昨日別の会議で1時間ほど講演をしたものですから、もう余力が残っ

ていなくて、レジュメを準備できなくて大変申し訳ありません。

今までのお話で話そうと思っていたことがかなり言い尽くされた感があるのですが、この韓流ブームがなぜ起こったのかを考えた時に、お互いの国民同士が相互に行き来をして、交流が深まって、相互理解が深まるという、そういう1つの力が働いていることはもちろん事実ですが、私が本来、国際政治を勉強しているということもあるのですけれども、もう少しマクロな、日韓関係のある種の構造的な変容の中で、こうした韓流ブームが起きているのではないかとすることをまずお話させていただきます。

このことが意味することは何なのかというと、1つはこうした韓流ブームが起こって日韓関係がいわゆる緊密化するようになったということが、それがただ単なるブームだけではなくて、ある種の構造によって支えられているものなのだ、だからそれほど弱いものではないのだということを、メッセージとして伝えたいのです。

しかし、他方では、こうした韓流ブーム、日韓の相互理解の深まりは、林先生のお話にもありましたが、実はそうしたある種の国家間の利益、国益という問題と切り離して考えることもできない、つまりある種の利害・打算の産物でもあるという、そういう2つ目の側面も持っているのです。したがって、この韓流ブームが起こったからといって、日本若しくは日本人の韓国観が全く変わるとか、韓国人の日本観が全く変わるとか、そういうことでもない、ある種利害・打算の産物であるという側面もやはりあるのだということを意味しているわけです。

私は、今日の日韓関係というのは、やはり非常に大きな構造的な変容を迎えていると考えております。具体的なことは今までいろいろな先生方がおっしゃられたのですが、次の5つぐらいにまとめてみたいと思います。

1つは、いわゆる日韓の政治経済体制のある種の接近、収れんと、市場民主主義という基本的な価値観の共有です。もちろん市場民主主義という規範自体がかなりグローバル化していることは確かです

が、やはりその中でもこの東アジアの中で日韓関係ほどこうした基本的な価値観を共有している関係はないと思います。

第2点は、日韓のパワー（力）が、あくまで相対的という意味ですが、均衡化してきているといえるのではないかと思います。もちろん現在でも、一人当たりの名目GDPで見ても、私はかなり意外感があるのですが、日韓の間にはまだ3倍ぐらいの差があります。購買力平価などで補正すれば、恐らくそれは1.5倍ぐらいに縮まるのだらうと思えますけれども。そうした格差はもちろんありますが、過去から現在へのトレンドを見れば、やはり日韓の力関係が縮まる方向にあって、均衡の取れた関係に変わっていく趨勢にあるという点はほぼ間違いないのではないのでしょうか。これは、ある意味では戦前戦後問わず、東アジアにおいて常に飛び抜けた存在であった日本にとっては、中国の大国化とともに大きな条件の変化として受け止めなければならないのではないかと思います。

第3には、日韓の相互認識の均衡化という点がいえるのではないのでしょうか。今、道上さんがいみじくも指摘されたように、日韓関係においては、例えば学校における歴史教育などはその最も典型的なものです。常に韓国の対日認識が、日本の対韓認識を量的に上回ってきたと言えるでしょう。質的に違うのはもちろんあるわけですが、やはり量的に全然違うわけです。そういう不均衡が存在してきたわけです。しかし、こうした不均衡が、90年代以降かなり改善されてきたのではないかと思います。

一方で、日本にとって外交、経済、政治、文化、様々な点で韓国の比重は嫌が応にも飛躍的に高まらざるをえない。これは韓国のパワーの増大や価値観の共有とか、例えば中国をどう認識するのかという問題とももちろん絡んできているわけです。そうした日本社会の韓国イメージがかなり変わってきているし、しかも関心が高まっています。

他方で、韓国はどうかということですが、1つには確かに韓国における対外関係の多様化に伴って、あくまで相対的という意味ですけれども、日

本の比重が低下していることは否定できないと思います。韓国にとって最大の関心の国というのは、もちろんアメリカです。従来はその次に来ていたのは、好き嫌いを問わず、と言っても嫌いが圧倒的だったわけですが、日本だったわけです。しかし、1990年代以降は、この地位は完全に中国に取って代わられている、これは否定できないと思います。ただ、それを私はそれほど悲観的に考えるべきではないと思います。

もう1つは、韓国社会における日韓関係、韓日関係の相対化という点です。韓国にとって韓日関係というのは、歴史認識の問題にしても、領土問題にしても、ある意味では善悪二元論で理解されるという意味で、絶対的な問題であったといえるのではないかと思います。しかし、例えば中韓関係の深まりとともに、韓国と中国との間で高句麗という歴史上の国家の帰属を巡る歴史認識上の争いなどが浮上することで、こうした歴史認識の問題や領土問題というのは、何も韓日間だけに存在するものではないということが認識されるようになってきたわけです。

また、韓国自身、私は非常に興味深い現象だと思っております。現在、大韓民国という国家のアイデンティティをどのように見るかという、正に韓国自身の歴史認識を巡る問題に関して、例えばそれを歴史教科書にどのように書いたらいいのかという点に関して、大論争が起きているわけです。私は、日本の新しい歴史教科書を作る会の教科書にはとても賛成できませんが、なぜ日本の中でこういう歴史認識を巡る問題が起こるのかということが、今まで恐らく韓国では余り理解できなかったと思うのです。しかし、韓国の中でそういう問題が起こること、なぜ日本の社会の中でこういう問題が起こること、ある意味では理解できるようになってくるのではないかと思います。

第4としては、これは先ほど来、98年の金大中・小渕首脳会談のときの話が出ていますが、「日韓パートナーシップ共同宣言」というものがあったわけですが、私はその中で非常にやはり画期的なことがあったと思うのです。それ以後、それが

どの程度生かされているかどうかというのは若干留保が必要なのですが、それは何なのかというと、グローバルな問題に関して日韓が協力して対処していこうという問題意識が非常に強く出てきたという点、これは非常に画期的なことだと思います。

なぜなのかというと、日本でも韓国でも、日韓関係をイメージするとき、日本と韓国の間の問題、100%それが日韓関係だという認識がほとんどだったわけですが、共同宣言もそうですが、それ以来、日韓関係それ自体が第三者に向けて何ができるかという問題意識がかなり出てきて、そういう関係にだんだんできてきているのではないかと思います。

日韓の間には、対米関係においても違いがあるし、対北朝鮮認識においても違いがあるし、対中認識においても違いがあるという話は、諸先生方がいろいろお話しになりましたが、私は、もちろん違いはあるけれども、例えばアメリカや中国と比べて、そうした対米関係、対北朝鮮関係、対中関係に関して、実は日韓は意外と共通利害を持っていることが多いのではないかと思います。今までそういうことがありながらも、いわゆる日韓間の関係に非常に問題が多かったために、それが必ずしも意識化されていない、認識されなかったということが多分にあったのではないかと思います。実は意外とそういう面が多いのではないかと思います。

しかも、そうした日韓の間の利害を共有するという点と、そうした利益を実現するためには、実は日本だけが頑張ってもだめだし、韓国だけが一人でやってもだめだけれども、日韓が協力をすることによって、初めて少ないコストで多くの効果・利益を上げられる、そういう関係が次第に形成されつつあるのではないかと思います。

第5点は、何よりも日韓関係は今日、政府間関係や経済関係だけには還元されない、非常に多層的な関係が形成されつつあるということを指摘することができるかと思います。以前は、韓国に関心を持っている学生が韓国人の友人を持つことはあったわけですが、私が最近、学生を見ていると、

非常に面白いと思うのですけれども、韓国には全然関心がなくても、韓国人の友人を持っています。昔は韓国の人と友人になるためには、韓国に行ったり、若しくは韓国から日本に来ている人と知り合いになるしか方法はなかったのですが、今は世界じゅうどこへ行っても大体韓国の人と知り合いになる機会は非常に多いわけです。

私は1年ハーバード大学のイエンチン研究所というところにいましたが、そこは中国、日本、韓国、ベトナム、台湾、香港などから研究者が集まる所なのですが、私はもちろん韓国のことを研究しているということもあったと思うのですけれども、そうでない場合としても、一番価値観が共有できるのは、やはり日本と韓国から来た研究者だったのです。そういう意味でも、非常に多層的な関係ができてきているということが重要なのではないかと思います。

そうした多層的な日韓関係というのは、国益を媒介とした抽象的な関係としてしか理解できないような日韓関係ではなく、もう少し目に見える具体的な関係として、日韓関係を理解するということを可能にするのではないかと思います。例えば日韓の間で今後も定期的に起こるであろう歴史教科書の問題に関して、単なる日本対韓国という国民の歴史の違いという抽象的な問題としてそれを考えるのではなく、例えばこの問題に関して相手の友人はどう考えるのか、そういうイメージネーションを働かせて考察をする。若しくは実際に相互に議論を重ねて、お互いの考え方を話し合う。そのような個人間の関係を積み重ねることが重要なのではないかと思います。

そうした構造的な日韓関係の変容があって、こうした韓流ブームがあるわけですが、では、こうした日韓関係ができたから日韓関係は大丈夫かということになると、やはりそれは過大評価するべきではないのかもしれませんが。例えば今の韓流ブームは、確かに私もそういう構造的な変容の上に乗った現象であり、そういう意味でいうと、ただ単なるブームではないと思います。

例えば北朝鮮認識を巡る問題に関して、もちろ

ん私は韓国に関心を持つことと、北朝鮮に対して強硬な立場をとることは、論理的には十分両立しうることだと思います。私はそれ自身が問題だとは思いません。ただ、私が今問題だと思うのは、例えば韓国に対して関心を持つことと、北朝鮮の問題が、実はやはり関連しているという認識が足りない。少なくとも韓国の立場から見ると、非常に関連性を持っています。いわゆる韓流ブームの中にいる日本の側が、その2つの問題をどれだけ関連付けているかどうか、私はかなり疑問があるところです。もちろんそれが入り口となって、どういう立場を取るにせよ、関連付けるということはやはりする必要があるのではないかと思います。

それから、やはり交流が深まれば深まるほど、摩擦の要因も増えます。相互に期待水準が高まることになるわけですから、その期待水準が高まったのに、果たして結果がどうなのかということになります。例えば今度の歴史教科書の問題も一体どの程度の採択率になるのかという点に関して、期待水準の高まりがあれば、逆に失望感も高まるということもあるかもしれません。そういう意味でいうと、それほど過大評価するべきではないのかもしれませんが。

それから、こうした日韓関係の構造的な変容があるからといって、日韓の協力関係がスムーズに進むというわけではもちろんありません。やはりその根底には日韓の相互不信もあるわけですし、国際関係において確かに日韓が協力して何かを果たす、日韓が利害を共有するという側面はもちろん一方であるけれども、しかしながら、どちら側がより多くの利益を占めるのか、独占するのかという問題までクリアされているわけではないわけですから、そうした問題はやはり残るわけです。そういう問題が、日韓の相互不信の問題と絡まっているわけです。

この歴史教科書の問題や日韓の相互不信がなぜ問題なのかというと、日韓が利害を共有して、相互に協力をして何か価値を実現するということが十分可能であるにもかかわらず、そうした相互の協力というものを困難にしている1つの最大の問題が、そうした日韓の間の問題、歴史認識の問題になるか

と思います。そういう問題にとらわれているということは、実は結局日本にとっても韓国にとっても非常に損、いわゆる不利益になるわけです。

それから、私は日韓関係というのはただ単なる日本の問題、韓国の問題だけではなく、日韓が協力して、例えば北朝鮮の問題をどうするか。それから、アジアにおける共同体、平和的で、かつ非覇権的なそういうある種の秩序を形成するということが、東アジアにとっては課題だと思っています。その場合に、日韓が相当程度重要な役割を果たさなければならないと思います。それが果たせないということになると、やはりそうした東アジア共同体や、平和的でかつ非覇権的な秩序というのはなかなかできません。なぜできないかというところには日韓が協力するということができないというところがあるかと思うのです。そういう意味で、現在、日韓関係は絶好のチャンスだと思います。そのチャンスを生かせるかどうかということが、正に今問われているのではないかと思うのです。

そういう意味でいうと、私は韓流ブームはもちろん好ましいことだと思いますし、しかもすさまじいエネルギーを今、韓流ブームが出していることは事実なのですが、果たして日韓の政治はどうかと思います。つまり、そうしたすさまじいエネルギーを持って漂流している、その上に乗ってただフラフラ漂流しているだけなのではないか。むしろ、そうしたすさまじいエネルギーをある種方向づけるような政治的なリーダーシップが、日韓の間にもう少し形成されないと、せっかくのこのチャンスを、このすさまじいエネルギーの漂流を生かすきれないのではないかと考えております（拍手）。

（金雄熙）ありがとうございました。日韓関係の構造転換の中での韓流の位置付け、そしてその韓流というエネルギーを生かすための日韓の政治的なリーダーシップの役割についてご議論くださいました。

時間が迫ってまいりましたので、発表者の先生方には、パネリストのご議論に対する反論やコメント

があった場合に限って、5分以内で議論をしてくださいようお願い申し上げます。では林先生。

（林）文化交流に人々が参加することが、国際社会、国際関係にどんな影響があるのか、日韓をケースに15年やってきてずっとつらかった。その現実が見えてこない。それが今になってこんなに世界のいろいろな人とその話題を共有できるということは、まずとてもうれしいことです。そういう個人的な話題とは別に、文化交流のことをもっと研究したいけれども、なかなかとっかかりがないと悩んでおられる大学院生の方がきっとこの中におられると思います。私は本当に大学院生のころの自分に戻って、いつか道は開けると肩をたたいてあげたいと思います。

なかなかケースとして扱いにくいことは本当に多いのですが、私がこれから述べたいのは、その事例として日韓のこの話題を最後にどうまとめるかということにしたいと思います。絞りに絞って3点です。1点目、結局、韓流・日流の本質とは何だったのか。2点目、その韓流の未来。3点目、その韓流を今どう評価し、未来にどう生かすか。

1点目です。今日のご議論をいろいろ伺いまして私なりに整理すると、韓流には3つの顔があります。1つは、人々の熱狂です。2つ目は、政府及び企業の戦略です。3つ目は、文化の移動です。いきなり韓国のを日本に持ってきて売れる、また日本のものを韓国に持って行って売れるという文化市場が出現したことによって、企業がそこに飛びつきました。でも、韓国には既に入っていましたから、それは戦略として大きく打ち出すことのメリットは少ないです。逆に効果があったのは日本です。それは、政府においても同様に戦略として採用されました。ここにおいて、韓流というものがここまで大々的に取り上げられたそのポイントがあったのだと思います。

裏返せば、今日も日流はなぜ存在しないかというお話がありましたが、もう今まで入ってきたし、そこに新たな戦略は必要ないから出てこなかった

だけで、実はその向こうに、確かに程度の差はあれ、韓国の人たちが長年かけて日本のいろいろなことに関心を持ってきたのだという事実を我々が忘れてしまっては損をすると思います。

2点目と申し上げましたのは、韓流の未来です。2つの答えがあります。1つは、ブームですから終わるでしょう。終わらなかつたらうそです。けれども、戦略としては残ります。ただ、戦略はお金をかけて、予算をかけて、知恵をかけてやりますから、もっと巧妙です。なぜならば、一度流行になったら、同じ言葉を使ったらみんなが嫌がる、面白くなくなって見えるのは分かっているから、これからは違う名前と呼ばれるでしょう。ですから、「韓流」という名前が使われなくなっても、その名で呼ばれなくなっても、韓国のいろいろなものが、もっと固有名詞に近い形で紹介され、入ってくるという現象はきっとこれからも続くと思います。なぜならば、それによって日本側も韓国側も得をするからです。これが私の見る韓流の未来です。

そして3点目、では、そんな今の韓流をどう評価し、未来にどう生かしていくか。評価するためには目標が必要です。どんな基準、物差しを当ててそれを評価するか。このときに、木宮先生もおっしゃったように、日韓関係としてそれを見るというのと、第三者からそれをどう見るという2つに物差しが分かります。

まず1点目の物差しは、日韓の物差しを当てるときに、協力のための対話をどう進めるのか、そしてそれを多様なチャンネルでどう進めるのか、これが恐らく日韓のために当てる物差しだと思います。その場合、重要なのは、つまりかつてはすべてを知り尽くした一部の政治家が間に立って口をきけばよかったけれども、世代交代が進み、その人たちがいなくなった中で、国民が、企業が、政府の閣僚が、それぞれにチャンネルを育てなければいけません。そのときに一人でも多くの人々が相手の行動や考え方にアンテナを張り巡らせるかどうか、情報が得られるかどうか、そこがかぎだったはずで

日本と韓国の場合、1960年代、主に男性です

が、まずビジネスマンがたくさん韓国に渡り、ビジネスを展開しました。けれども、裏側では例えばキーセン観光のような現象も生み出したことがあります。その後オリンピックがありました。ワールドカップがありました。スポーツが好きな若者が動きました。それから、韓国の景気が悪くなってウォンが安くなったときに、安い韓国でお買い物をして、エステをして、グルメを楽しむ若い女性が動きました。ですから、やはり最後のとりでは中高年の女性であり、今どうしても注目が集まるのです。

でも、誤解のないように言うと、私の大学で指導している若い女の子たちも「冬ソナ」は大好きです。「冬ソナ」を中高年のものなどと言うと、彼女たちがかawaiiそうです（笑）。あれはもっといろいろな人が楽しんでいるものです。それをそういうステレオタイプでぜひ見ないでほしいと思います。でも、とにかくそういう一人でも多くの人々がアンテナを向けるという状態が今できたのです。いろいろな人が、いろいろな資源を使って、そうしようしようと思っていたのにできなかったことが。だから、これがチャンスでないはずはありません。

やはり固有名詞で、例えば先ほど「李秀賢さん事件」といって、まだ多くの方がきょとんとされたのは、やはりなかなか耳に残りにくい名前だからです。けれども、ワールドカップのアン・ジョンファン、そして今のペ・ヨンジュンと、かつてこれほど政治家ではない韓国人の名前を日本人が固有名詞で覚えたことがあったでしょうか。やはりそこが、これがいかに今までと違うかを見る1つのメルクマールだと思いますし、もう1つの印象が、「あの国が隣にあってよかった」という印象ではないかと思います。

それで、物差しの2本目は、日韓以外にそれがどんな意味があるのか。それは広く世界全体にとっての意味と、国境の内側にいる私やあなたではないだれかにとっての意味と、そしてここにいる私やあなたにとっての意味、3つがあると思います。余り時間がないので、これも詳しくは言いませんが、印象的だったエピソードを2つご紹介します。

日流・韓流のどこに在日コリアンがいるのでしょうか。在日コリアンの皆さんは、本当にインビジブル・マイノリティで、顔や形、話す言葉がどちらかのマジョリティに全く同じなのだけども、本質として溶け込まないものを持っています。民族名で生きることの難しさ、それは今この場で語る必要のないことでしょうか。けれども、例えば韓流ブームの中で、そういう民族名を語ることにちょっと誇りが持ててきたとか、いろいろな人たちとのかかわりの中で何かが変わってきた、そういうお話を幾つかの所で聞いたことがあります。必ずしもそれが全部とは私は言いませんが、例えば日流と韓流のはざままでそんなことも今起きている、それを我々は日韓の間に、国際関係にそれが乗っからないからといって、見過ごしてしまうわけにはいきません。

最後のエピソードは、個人的で申し訳ありませんが、母です。すごい「冬ソナ」ファンです。びっくりしました。私が韓国に留学するときに、「どうして韓国？」というリアクションを示した、京都に住む母です。辛いものもそんなに好きではないけれども、「冬のソナタ」は何かすごくお気に入りです。そして、DVDを買って見ました。何度も見たからせりふは全部頭に入っています。ヨン様の声で聞きたいから、今度は言語で聞きます。今となっては聞き取れてしまうのです。「ネエ」とか「ソンベエ」とか、全部分かります。それから、完全版を録画したいからハードディスクレコーダの操作も全部覚えてしまいました(笑)。

でも、そういうことよりも一番驚いたのは、母が新劇を見にいつてきました。当然日本の舞台です。そこで泣けてしまったというのです。もう今六十幾つですか、舞台を見て泣いたことなんかなかったけれども、あのドラマを見て、舞台を見て、ドラマを見て泣けるという経験がよみがえってきたのです。別にそれは日本や韓国にとって余り意味がないことかもしれません。けれども、そこにいるその人にとって、そんな意味があったのでしょうかね。

今回、日韓のフォーラムというところで日流と韓流を語る時に、もちろん意識は日本と韓国に還

元せざるをえません。そして、これからの条件としては、私の報告の中で最後に言った3つの多様性だと思います。きっかけとしての多様性、それからアクセスできる文化の多様性、そして中にいる、そこにいる人たちの多様性です。保守的な人もいれば、革新的な人もいれば、在日コリアンの人もいれば、セクシャル・マイノリティの人だっているでしょう。そういう人たちがそこにいるのだということをお忘れずに、でも、そのために楽しむのではない、私のためにそれを楽しむ、そこから前に進むエネルギーが生まれてくるし、それによって今までなかなかとっかかりがなかった人たちが、いろいろなとっかかりを今得ることができているのではないか。それは何も日本と韓国だけの話ではありません。これから例えば日本と中東の間でも、いろいろなこういうトライアル・アンド・エラーがこれから始まってもいいのではないか。そういうケースとして、あえて締めくくらせていただきました(拍手)。

(金智龍) 林先生の後では話しにくいです(笑)。

李元徳先生が、今の韓流ブームには戸惑いを感じるのか、違和感のことをおっしゃったのですが、韓国人の中ではその戸惑いや違和感を持つ人がたくさんいます。要するに、よく理解できないことが起こったのです。それで、戸惑いはいいのですが、その戸惑いからいろいろな偏見や誤解など、否定的な視覚が出てくる。私は新聞社と話し合っ、今年の夏ぐらいに新聞に連載することになるのですが、韓流というのはなぜ起こったのだろうということについて書くつもりです。2つだけ申し上げますと、よく分からないので、その韓流ブームを見て、「日本だけがもうかっているのではないか、けしからん」とか、そんな視覚があるのです。私は日本人がもうかっているからそのブームが長続きするのだと言うつもりです(笑)。韓流ブームがあって、日本人の中で一人ももうかいていないとしたら、そのブームはすぐ下火になると思います。

林先生も企業の戦略のことを言っていました、その戦略がうまくいって、日本人の中であらうか

いる人がたくさんいますから、なかなか下火にならないように、ここで日本人がそれを管理したり、いろいろな戦略を立てたりするのです。日本人がもうかっているのは当たり前で、それをもっともうかるようにするべきだと僕は思います。韓国も結局はもうかっているのですから、もっと日本人が韓流でもうかるようにするべきです。

もう1つは、なぜおばさんがばか騒ぎするのだろうと、そんな変な目で結構見ているのです。道上さんが言ったように、人間も国も自分を見下して嫌っている人には心を開きません。「冬ソナ」ブームで日本人の中高年の女性が韓国に旅行に来るのですが、それを「ばか騒ぎするな」というような冷たい目とか、からかうような視覚で見ると、気持ちが悪くなって韓国が嫌いになるかもしれないので、それについても書くつもりです。なぜ中高年の女性が大騒ぎするのかというと、中高年の女性だから大騒ぎできるのです（笑）。20歳代はお金がないのです。30～40歳代の女性はお金があるから韓国に旅行をしに来るのです。20歳代は行きたいけれども、行けない人が結構いるのではないですか。

もう1つ大事なものは、中高年の女性は3つの自分があると思うのです。お母さんとしての自分と、社会人としての自分と、女としての自分なのですが、僕は女心は絶対年を取らないし、変わらないと思います。少女から脱して女性になると、親にもなるし、社会人にもなります。特に親になると、女としての自分をなかなか外に出さないのですが、それが年を取るとなくなるとか、そんなことは絶対ないのです。

その中高年の女心を韓国のドラマがつかんだと思うのですが、なぜ韓国のドラマなのでしょう。日本人と話し合っていると、私は15～20歳上の人と結構話が合うのです。すべての世代も大体それが当てはまるのだと思うのですが、日本で全共闘世代があって、学生運動が一番激しかったのが1970年代です。韓国はそれが1980年代です。学生運動が終わって、日本では「しらけ世代」という、それが1973年からの1970年代です

が、韓国で学生運動が終わったのは大体1993年とみんな考えていますから、20年の差があるのです。新人類が出たのは日本では1980年代、韓国では90年代後半です。要するに、経済成長は日本が15年ぐらい早かったのも、その経済成長に合わせて人々の考えは変わるのです。韓国と日本で経済成長の差が15年あったので、人々の考えもそのように15年ぐらいギャップがあって似たような考えをする人が出るのです。

それで、韓国のドラマは、今の韓国の20歳代の女性を相手にして作ったものです。それが日本の35歳以上の女性にぴったり当てはまるのではないかと思うのです（笑）。今、日本の恋愛ドラマは大体20～35歳の女性を相手にして作ります。そこに出てくる主人公を、今、日本の20歳代の女の子が格好いいと思っている男を、中高年の女性が格好いいと思いますか。ちょっと違うでしょう。今、韓国で20歳代の女の子が格好いいと思っている男が、30～40歳代の日本の女性の方に格好いいと見られると僕は思うのです。韓国のドラマが日本の中高年の女性に人気があるのは、そのような世代の差から来るのではないかと思います。

日本人の30～40歳代の人々がどんな考えをしているのか理解すると、韓流ブームや、30歳代・40歳代の女性がたくさん韓国に来ることに違和感や偏見などは起こらないと思います。なぜこんなことが起こったのかをお互いによく調べないと、そのような偏見や誤解が起こりますから、ここに座っている先生方も研究すると思うのですが、私ももっと研究するように頑張ります。ありがとうございました（拍手）。

（金雄熙） 早速フロアからのご質問なり、ご意見をお伺いしたいと思います。

（大脇） 国際企業文化研究所の大脇と申します。私は3年ほど前から、有志の方々と「未来構想戦略フォーラム」というものを立ち上げて、ボランティアでやっています。先月、韓日文化交流会議の韓国

代表の金容雲(キム・ウンヨン)先生にインタビューをさせていただきました。日本側は平山郁夫先生です。金先生がおっしゃったことの中ですごく衝撃を受けたことがあります。平山先生が高句麗古墳の壁画を世界遺産にしようと強く働きかけ、実際にユネスコの歴史的な遺産になりました。金先生は、そのことで北朝鮮の軍事基地を全部撤去しなければいけないとか、自由にそれを世界の人に見せなければいけないとか、自由化とかおっしゃるのです、そういう意味で文化というものはいかにパワーがあるものかということのを再認識させられたのです。

私たちは、日本を再生するための一番のポイントは、日本の若者を国内で腐らせるのではなくて、できれば高齢者とペアでも世界の荒野に送って、ODAをバックに、物の援助ではなく人を行かせて世界に貢献する、という提案をしたのです。



そうしたら、「どうして日本だけでやろうとするのですか。日韓共同でやりませんか」と言われたのです。今日の本宮先生や李先生のお話と関係がありますが、日韓はお互い同士を見つめる段階からグローバルな視野を持って、世界の平和のためにどう協力できるのかを考えていかなければいけません。世界平和へ向けての高邁なビジョンを持って、お互いに競争で世界平和をやろうではないかということにおいて、本当の意味でのアジア共同体の動きがもっと加速化されるのではないかと痛感しました。

先週韓国で開催された世界平和サミットに参加したときにすごく感じたことが1つあります。先ほど李先生は触れられなかったのですが、実にあのオセアニアのたくさんの島国の大統領や閣僚クラスの方々が、真剣にオセアニアの共同体構想につい

て論じているのです。日本からもそれに対して協力して欲しいという要請もありました。正にこういうことは難しいから避けるのではなくて、私たち日本と韓国が生き残るためにも、本当の意味で真剣にそういうことに向かって、もっと頭脳を結集していくべきではないかと思います。また、そういう方向へ向かっている会だと思ったので、私の提案をさせていただきたいと思います。よろしくお願いします。金先生とのインタビューはブロードバンドで見られますので、ぜひご覧ください。

(道上) 日韓が外に出ていって、人の派遣の協力と言われたことは大変大事だと思っています。

(大脇) 韓国には兵役がありますね。2年間ぐらい行かなければならないでしょう。日本も2年間ぐらい行って、日韓共同で世界へ出て行け

ば仲よくなりますよ。言葉もできるし。

(道上) 実はそれに近い形が、2002年に東ティモールのPKOで既に実現しています。これは相当画期的なことだと思います。日本側は自衛隊の施設部隊でして、韓国の部隊と同時展開し、現場で協力したのです。一昔前なら、自衛隊ということで、相当抵抗があったはずですが、でも、それもいわば乗り越えたということなのです。

1998年の新しい日韓パートナーシップには、実は私もちょっと関与したのですが、幾つか大事な柱がありまして、1つは、先ほど本宮さんもおっしゃった、日韓2国間だけではない、グローバルな、世界に貢献するための日韓協力を進めることです。もう1つは、先ほどの双方向性ということなのです。

が、日本が歴史認識を述べて、韓国はそれをよしとする、それを評価し、かつ戦後の日本も評価するという仕組みがあったのです。こういう合わせ技で、日韓関係を支えるいいインフラになっているのだらうと思います。今後はさらに、1998年の次の仕掛けというか、それを中国、ASEANなど東アジアをにらんで、また人の貢献ということもできたらと思っています。

(櫻井) ジャーナリストの櫻井よしこと申します。まず李先生にお伺いしますが、これからも日本と韓国の間には歴史の摩擦問題が起こると予想しておられて、そのための予防措置、それから起きたとしてもそれを何とか広げないための仕組みが必要だとおっしゃいましたが、具体的に何かお考えがあるのでしょうか。

もう1つ、これは主に木宮先生にお尋ねしますが、先ほどの韓流ブームと北朝鮮問題を、いかなる形でも、余り結び付けてはならないという趣旨のことをおっしゃったと思います。韓流ブームで韓国への関心と北朝鮮との関係は関連しているのだから、どのように日本側が関連付けているのかということが問われているという趣旨のことをおっしゃいました。ご趣旨を私なりに分からないながら判断したのは、韓流ブームがあるから韓国の北朝鮮政策を日本が支持しなければならないという意味でおっしゃったのか、そのほかの意味でおっしゃったのか、まず明確にしていきたいです。そして、もし日本が韓国の盧武鉉政権と同じような北朝鮮政策を採らなければならないというご趣旨でおっしゃったのであるならば、その理由をお聞かせ願



たいと思います。

なぜならば、今の北朝鮮の政権は決して韓国民のためにもならないと思いますし、私自身は今韓国で起きている様々な変化についてかなり心配をしておりますので、その点についてのご見解を明確にしていきたい。

もう1つは、木宮先生が新しい歴史教科書問題についてかなり厳しい認識をお示しになりました。私は木宮先生とは全く正反対の立場で、今までの歴史教科書の内容が間違っていると思っております。それは、日本には日本の歴史があり、韓国には韓国

の歴史がある。その双方をきちんと述べ合うところから、本当の意味の理解が始まると考えているからです。

その意味で、木宮先生は新しい歴史教科書を作る会のその教科書のどこがいけないと思われているのか、また古いほかの教科書のどこがよ

ろしいと思われているのかお聞きしたいと思います。私は記者ですから、このすべてを一応読んで、それを比較した論文も書きましたが、木宮先生のご見解を承りたいと思います。以上です。

(金雄熙) 厳しい質問ですね。では、李元徳先生からお答えをお願いします。

(李元徳) 具体的にどんな事前の予防措置がありうるのか、それからそういう過去の摩擦が起こった場合にどんな管理メカニズムができるかということは、そんなに詳しくは考えたことはないのですが、私が思うに、日韓関係はいろいろなイシューや懸案を持っているのですけれども、いつも過去問

題が起こるとほかの懸案がほとんど機能なくなり、ほかのいい関係が全部悪化します。そういうことを考えますと、やはりこれは戦略的にでもこれを管理するメカニズムが必要だと思います。歴史認識を、両国を合致させるのは現実的には難しい。そうした場合にも、閣僚クラスの人たちが、朝鮮半島の歴史の関係で刺激をするような、韓国では「妄言」というのですが、そういうことはしない方がいいのではないか。ですから、そういう閣僚の方が考えている認識を問題にするのではなく、閣僚としてそういう発言をするということを問題にするのはある程度可能だと思います。日韓関係全体を考えた上で見ますと、やはり日本側も注意をすべきではないかということです。

それから、従軍慰安婦に関する発言や靖国神社参拝は、日本でも政治的に非常に敏感な問題だとは思いますが、それが国際社会でどういう発信、メッセージとして認識されるのかということ、日本の指導者たちももうちょっと考えた方がいいという趣旨です。具体的なことはこれから研究したいと思います。

(木宮) ご質問どうもありがとうございました。ただ、その問題に関してももちろん私なりの意見はありますが、少なくとも私がここで話した内容についての誤解を解いておかなければいけないことがあると思います。例えば韓流ブームと北朝鮮の問題に関して私がここで主張したのは、例えば韓流ということと、北朝鮮の例えば拉致問題に関してある種の強硬論を述べることで、その2つを関連付けることは十分論理的に成り立つ。したがって、別にそれ自体が問題ではない。ただ、その2つの問題が関連しているということを意識していないということになると、やはりこの韓流ブームと日韓関係はなかなか結び付かないだろう、ということが趣旨です。

質問の趣旨では、盧武鉉政権の北朝鮮政策に関して非常に憂慮しているということをおっしゃられたわけですし、私自身の北朝鮮に対する見方も質問されたと思いますので、若干話しておきたいと思

います。

私は、読みたいとは思っていたのですが、櫻井さんが「週刊新潮」に連載されている韓国に関するものを残念ながらまだ読んでいないので、不勉強で申し訳ありません。中吊り広告でしか読んでいないので大変申し訳ないのです。私はもちろん盧武鉉政権の政策、特に北朝鮮政策に関して、日本の政府なり日本の社会の中で非常に危惧を持つ向きがあることは存じ上げておりますし、それなりの理由がないわけではないと思います。ただ、私は逆に、かなり誤解されている側面もあるのではないかと考えてもおります。

それはなぜかという、私はびっくりするのですが、今の盧武鉉政権は反米・親北朝鮮政権だという評価が日本の中でかなりまかり通っているような状況にあるからです。私はやはりそれはちょっと違うのではないかと思います。盧武鉉政権の北朝鮮政策を私は100%支持するわけではありません。特に北朝鮮の人権問題に関しては、盧武鉉政権はもっときざんとした批判をするべきだと思います。ただ、北朝鮮の体制を批判し、人権問題を批判するということはもちろんある種コンセンサスとしてあるわけですが、それから一体何をするか、どういう戦略で、例えば北朝鮮の政策や体制を変えさせるかを考えなければなりません。「体制を変えさせる」というのは若干問題があるかもしれませんが、少なくとも北朝鮮の行動様式を変えさせるか、変えさせなければいけないという点に関しては、恐らく日本でも盧武鉉政権でも認識は同じだと思います。しかし、どうやって変えさせるのが、一番少ないコストで最大の効果を上げられるのかという点に関する認識の違いは、私は確かにあると思います。

盧武鉉政権の対北朝鮮政策が余りにも民族共助ということで、北朝鮮に対して甘すぎるのではないかという見方はもちろんあるかと思いますが、韓国から見れば、例えば自らの繁栄や平和を今までずっと享受し続けてきたわけですから。そういう問題を考えると、何とか北朝鮮の問題を平和的に、しかも韓国の繁栄をできるだけ損なわないような形で解決

していくためには、何が一番いいのかと考えた場合に、ある種の北朝鮮のソフトランディングが一番最優先の目標として達成されなければならないと思うのです。そういう意味でいうと、私は盧武鉉政権の対北朝鮮政策と、日本政府がとるべき北朝鮮政策との間に、櫻井さんがおっしゃるほど大きな乖離が果たしてあるのかどうかは非常に疑問です。

それから、歴史教科書の問題、これも私は歴史教科書がけしからんということを強調したつもりではありません。私は例えば新しい歴史教科書も、誤りを正せば文科省の検定が通るのはしかるべきだと思います。

私が注目するのは、日本の歴史教科書問題を見る韓国社会の見方が、従来とはかなり変わってきたのではないかと。つまり、今までは文科省が検定で新しい歴史教科書を通すということは、日本の政府がその教科書を公認し、お墨付きを与えたのだという目で見られていたのですが、韓国の中でも現在、自分の国の歴史をどう書いたらいいのかということで非常に悩んでいるわけです。そういう悩みを共有することができるようになったということは、日韓関係において非常に大きな意味があると私は思います。そういう点を私は強調したかったのであって、新しい歴史教科書を作る会の教科書がけしからんということをメインに据えたつもりはありません。

ただ、新しい歴史教科書に対する私の感想を具体的に申し上げます。教科書や西尾先生の『国民の歴史』も読んだのですが、私が見る限りは、もちろん評価や解釈が分かれる歴史、例えば日本の植民地支配に関してもそうですし、いわゆる日中戦争に関してもそうですが、解釈の分かれるような様々な問題

があるけれども、その解釈で、必ずしも例えば学会などにおいても評価が定まっていらないような問題に関しても、かなり都合のいい解釈だけをいい解釈だということで取り上げているという印象が私には受けられます。その点だけ申し上げたいと思います。

(金雄熙) ありがとうございます。ほかにご質問はありませんでしょうか。

(坂崎) 現在、東京大学の大学院に在学しております坂崎と申します。ソウル大学には1年間留学をしておりました。



まず、皆さんにお伺いしたいことがあります。私はカルチャースクールや語学学校などで韓国語を教えているのですが、確かに皆さん韓流ブームに乗って、ドラマや大衆の音楽、若しくは食べ物などに関しては関心を持って

いらっしゃるのです。そういう話題を提供すると非常に、俗な言葉を言うと、食い付きがいいわけです。でも、韓国というのはそれだけではないはずで。例えばソウル駅の裏側に行けば薄暗い通りがある。例えばヨンサン駅の北の方に行けば売春街があります。そういった所まで知って欲しい。知らなければいけないとは思わないのですが、例えば韓国の政治とか、経済とか、もう少しハード的な面についても、私としては関心を持ってもらいたいし、そういったことに対して少しは理解してもらいたいと思っています。

今の韓流ブームの段階からその段階に移行するときに、何か僕たちが努力できることはないだろうかということをいつも考えているのですが、それに

ついてもし先生方の中で何かお考えをお持ちの方がいらっしゃったら教えてください。

(林) 簡単に申しますと、文化人類学における文化触変や文化変容の議論の中では、文化は細かい要素の集合体であって、隣接するものは連鎖反応を起こしやすいといえます。そういう意味で、まだその連鎖反応がちょっと遠い距離にある人にも、そこで止めてしまえ、ではなくて、提示し続けることがまず大事だろうということです。

もう1つは、提示するとき、共通項がない話題よりもあった方がいい。例えばうちの学生に韓国の国家保安法の改正の話をしよと思ったけれども、なかなかそれを話してもピンときません。ですから、徴兵制の話の先にすると、自分と近い年齢の人が26か月も軍隊に行かなければいけない、彼氏・彼女が別れてしまう、大変だと、何かその辺からちょっと関心が持てます。

もちろん駅の裏の薄暗いエリアの話も、今の韓国社会のありよう、例えば規範などを考える上で非常に大事です。でも、「それは私の生活とは関係ない」と思ってしまったら、そこで食いつきが悪くなるのは致し方ないので、その辺りで共通項を1個かませ、おいしそうなプレゼンテーションをなさるときっといいのではないかと思います。

(金雄熙) では、最後の質問にしたいと思います。

(朴貞姫) SGR A研究員の朴貞姫と申します。中国の延辺朝鮮族自治区の出身です。現在は言語学専門で明海や清心女子大で韓国語を教えています。今日のテーマで、日本と韓国の間での日流や韓流の話題についていろいろ話を聞いて非常にいい勉強になったと思います。

ただ、私が、ちょっと違うかなとか、もう少し考えるべきではないかということで一言申し上げたいです。まず李鎮奎先生のレジュメにもありましたように、この「韓流」という言葉が最初に定義され

たのはやはり中国です。私は毎年3~4回ぐらいは中国に帰りますが、2000年頃から、韓国のドラマや、ドラマだけでなく、ものすごくいろいろな催しが行われるようになりました。歌だけではなく、飲食文化的にも韓国のもものが一杯入ってきます。そういうことで「韓流」という言葉ができたので、この「韓流」というのはただ日本と韓国の間での問題ではなく、なぜ韓国のこういうものがほかの国に受け入れられるのかということが大事ではないかと思っております。つまり、共通点があってこそこれが受け入れられるのだということです。韓国のこういうドラマなどいろいろなものがどうして受け入れられるのかといったときに、この基底や背後には、何か目には見えないけれども文化的な共通点があるのではないのでしょうか。

日本で今、すごい韓流ブームで大騒ぎになっています。私も最初はいいなと思ったのですが、このような流れになって、日本での韓流ブームはもうつまらないというぐらいに考えています。なぜかという、これはただ単に表面的なすごく浅いもので、深く意味を持つ交流が欲しいのにと感じるからです。変なインタビューなどを聞いたらすごく嫌な気持ちになります。これはただの奥さんたちのつまらない大騒ぎで終わってしまうのではないかと。ですから、このように、日本のマスコミで大騒ぎにすることに私は反対ですし、こういう気持ちで交流するということが長続きできるのかなと心配しています。

道上先生に、東アジアの価値とは何かということをお聞きしたいです。「日韓で新しいアジア」ということをおっしゃいましたが、これについてもっと具体的な説明をお願いしたいです。

(道上) ありがとうございます。東アジア連携には賛成だけれども、注意すべき点があるというのは先ほど申し上げたとおりです。

外から見て排他的な、閉ざされた、差別的な要素が、アジア人のアジア認識にあると見ています。欧米は「邪悪な文明」、アジアを「弱く貧しいが精神

的に優位」という規定や、「アジアは1つ」というスローガンは、余りに粗雑です。間違った発想です。「民族」や「血」にとらわれて、普遍的なヒューマンセキュリティの発想が弱いこともある。日本以外のアジア人の人にはそういう傾向がまだあります。そこで、東アジア連携を否定するのではなくて、もっとよいアジア連携にしていきたいということなのです。

レジュメの終わりの方にも書きましたが、メニューはいろいろあると思います。文化交流、市民交流だけでなく、安全保障でもPKOでもODAでも環境でも経済でも、貿易投資や金融でも、社会問題への対処でも、いろいろあると思います。

日本が、そしてまた韓国が持っていて、ほかのアジアの国々にはちょっと弱い要素、それは経済的にちょっと先を行っているからということもかかわるのですが、より自由民主主義的な、世界に通じる開かれた発想、「一人ひとりの人間が大事」という考え、あるいはより市場志向的な、マーケットにゆだねる自由な経済ということをもっと東アジアに広く広めたい。世界に通じない古い殻を破り、開かれた、しなやかなアジアを目指すべきです。この方向で既にある程度成功している日韓がそれを先導し、ひっぱっていくのだという考えです。

(金雄熙) ありがとうございました。時間の関係上、これでパネルディスカッションを終わりにしたいと思います。パネリストの皆さん、そしてオーディエンスの皆さん、ありがとうございました(拍手)。

## 挨拶

## 閉会挨拶

## 宋 復

## 未来人力研究院理事長

本日この日韓アジア未来フォーラムが大変盛況に行われたことを、お祝い申し上げます。私は、2年半前に延世（ヨンセイ）大学を定年退任した宋復と申します。私は30年間大学でずっと立って教えてまいりましたので、本日、このように立って皆さんにお話し申し上げることに、馬が走っているような感じを持ちます。

本日の日韓アジア未来フォーラムがいつの間にか第4回を迎えることになりました。これは、韓国未来研究院院長である李鎮奎さん、そしてSGRAの今西さんのお二人のおかげです。

最近はやっている韓流・日流に照らし合わせて申し上げますと、李鎮奎さんは「ジン様」、今西淳子さんは「ジュン様」に当たるのではないかと考えております。この場を借りて、ジン様とジュン様に大きな拍手をお送りいただきたいと思っております（拍手）。

「韓流」「日流」という単語から考えられるように、文化は流れです。文化が流れていないと、それは衰えてしまうことになると思います。その流れというのは、どこからどこに向かって流れるのか、その流れというのは何であるかということがとても大事です。

その文化の流れは、異なった国の生活様式や思考方式、行為形態が流れていくことを指すと考えております。また、その流れは、低いところから高いところ、いわゆる高級文化、それから面白くないものから面白いものへと、いわゆる大衆文化、固い硬直したものから柔らかいものへと流れていくものだと私は考えております。先ほど林助教授からお話があったように、規制から自律へ、閉鎖から開放へ、画一から多様へと流れていくものだと思っております。

ます。

この流れていく文化の中で、10年前の文化と今の文化が違っており、それを我々は変化といえます。その変化の中で文化は創造され、また再創造されるものになると思います。韓流や日流をこういう相対的な文化の概念の中で考えることが可能であると思います。日韓は、世界のどこの国より感情を共有しており、言語的共有を持っております。日韓はこのように近いからこそ拒否・拒絶ということが起こっており、そこからまた文化というものが作られると思っております。近ければ近いほど愛情が生まれ、そこからまた憎しみも生まれてくるものではないかと思っております。

私は日本語はできませんが、日本に来るたびに、日韓でさほどの差はなく、いつも親しみを感じております。日韓が現在のように韓流・日流というお互いの共通点を持つことによって、「一衣帯水」という言葉があるのですが、そういう言葉が重要性を増していくのではないかと考えております（拍手）。



## 講師略歴

### ■ 李 鎮奎 (イ・ジンギョ)

高麗大学経営大学経営学科教授。韓国の学者をネットワーク化し、環境、長寿、ジェンダー、地域研究など幅広いテーマを扱う、財団法人未来人力研究院を設立し、現在院長を務める。

52年ソウル生れ。79年高麗大学経営大学経営学科経営学士。82年米国 Michigan 州立大学経営大学院経営学修士。87年米国アイオワ大学経営大学院経営学博士。専門は、組織行動論、組織開発論、人事管理、経歴管理。主な国内外学会及び社会奉仕活動は以下のとおり。Academy of Management。Society for Human Resource Management。American Management Association。K M D I (韓国経営研究院)。韓国経営学会。韓国人事管理学会人事分科委員会及び常任理事。韓国社会科学協議会研究委員。韓国人事管理学会副会長。韓国経営学会常任理事。韓国経営史学会理事。韓国生産性学会理事。世界未来学会会員 (The World Future Society)。労使管理学会常任理事 (会長歴任)。

### ■ 林 夏生 (はやし・なつお)

70年京都生まれ。96年東京大学大学院総合文化研究科国際関係論専攻修士課程修了、98年10月同博士課程中退。96年から97年にかけて韓国ソウル大学校社会科学大学外交学科に特別研究生として在籍。98年10月から富山大学人文学部講師、03年9月から同助教授。

今回の報告に関連する著作としては「韓国の文化交流政策と日韓関係」(平野健一郎編『国際文化交流の政治経済学』勁草書房、1999年5月、231～258ページ)。国境を越えたヒトや文化の移動が「文化交流現象」として現代の国際関係に及ぼす影響を、特に日韓関係における文化交流政策に注目しながら研究中。

専門分野キーワード：国際関係論 国際文化交流研究 大衆文化交流 現代日韓関係 日韓文化交流。

### ■ 金 智龍 (キム・ジリョン)

「野望を捨てれば人生が楽しい」と叫ぶ新世代文化評論家。我々は「この世に遊びに来ているのだ」というのが、彼のモットーであり、人生観であり、社会観でもある。

『僕は日本文化が面白い』、『面白く生きていく人が成功する』、『僕は率直に生きていきたい』など多数のベストセラーを執筆した彼は自分の理論を徹底的に実践する人である。大した稼ぎにならなくても自分の生きたいまま生きてきた。高校を中退し、大学検定試験でソウル大学経営学科に入学。卒業後4年間在職した大手企業を退社し、日本へ留学。苦学して慶応義塾大学大学院で経営学を学んだ。日本の大衆文化について掘り下げて探求した経験や実際の体験を生かし、現在韓国で文化評論家として大活躍中。

### ■ 道上尚史（みちがみ・ひさし）

大阪生まれ。83年東京大学法学部卒業、外務省に入省。韓国ソウル大で研修。米国ハーバード大修士。本省アジア局、経済協力局、大臣官房、経済局勤務の後、95年在ジュネーブ代表部一等書記官（WTO担当）、98年在韓国大使館一等書記官、参事官（政務担当）。02年経済局国際経済第二課長（国際金融、東アジアFTA交渉）。03～4年、上智大学法学部で「日本外交の諸問題」を毎週講義（非常勤講師）。04年内閣府遺棄化学兵器処理担当室参事官（対中関係）。

著書に「日本外交官、韓国奮闘記」（文春新書）、「韓国を知らない韓国人、日本を知らない日本人」（韓国ムハン社）。発表論文に、「日韓過去史問題を解く4つの鍵」、「新世代が核心に迫る－日韓相互理解の課題（対談）」、「WTO貿易自由化と非貿易事項」「日本外交とAPEC」等。新聞寄稿に「ヒストリーとセキュリティー」（毎日）、「投資ルールと対アジア経済外交」（読売）。

韓国の大学、企業、市民団体等で25回講演、講義。慶応大学、上智大学で、外交問題に関する公開シンポジウムでパネリスト。早稲田大学、上智大学、大阪市立大学、長崎大学で外交問題を講義。

### ■ 木宮正史（きみや・ただし）

60年浜松市生まれ。83年東京大学法学部卒業。85年東京大学大学院法学政治学研究科修士（法学修士）。92年韓国高麗大学大学院政治外交学科博士（政治学博士）。93年法政大学法学部助教授を経て96年より東京大学大学院総合文化研究科助教授。2002年度より1年間ハーバード大学イエンチン研究所客員研究員を歴任。

主要著書に『韓国－民主化と経済発展のダイナミズム』（筑摩書房、2003年）、『国際政治講座3 経済のグローバル化と国際政治』（東京大学出版会2004年共著）、『日韓共同研究叢書4 市場・国家・国際体制』（慶應義塾大学出版会2001年共著）『戦後東北亜国際関係』（台湾中央研究院亚太研究計画2002年共著）、『朝日新聞アジアネットワーク リポート2001』（朝日新聞社2001年共著）、『韓国現代政治論2：第三共和国の形成・政治過程・政策（韓国語）』（ソウル、オルム、1996年、共著）、『韓国と日本：新しい出会いのための歴史認識（韓国語）』（ソウル、ナナム、1997年、共著）翻訳韓培浩『韓国政治のダイナミズム』法政大学出版局2004年（磯崎典世との共訳）など。

### ■ 李 元徳（イ・ウォンドク）

85年ソウル大学外交学科卒業。87年同大学大学院外交学科修士課程卒業（政治学修士号）94年東京大学大学院国際関係論専攻博士課程卒業（国際関係学博士号）95年よりソウル大学国際地域院特別研究員。96年より世綜研究所研究委員。98年より国民大学国際学部副教授。2002年－2003年12月 現代日本学会研究理事、編集理事歴任。03年3月より韓国国家安全保障会議（NSC）諮問委員。現在ピッツバーグ大学アジア研究所客員研究員。

主要著書に、＜韓日過去史処理の原点＞（韓国語）、＜日本右翼研究＞（共著：韓国語）＜脱冷戦期韓日関係の争点＞（共著：韓国語）、＜動揺する日本の神話＞（共著：韓国語）など。

主要翻訳書に、田中明彦＜戦後日本の安全保障＞、山口二郎＜危機の日本政治＞、和田春樹＜北東アジア共同の家＞など。

■ 金 雄熙（キム・ウンヒ）

89年ソウル大学外交学科卒業。94年筑波大学大学院国際政治経済学研究科修士、98年博士。博士論文「同意調達の浸透性ネットワークとしての政府諮問機関に関する研究」98年より韓国電子通信研究員専任研究員。00年より韓国仁荷大学国際通商学部専任講師、02年より助教授。S G R A 研究員。

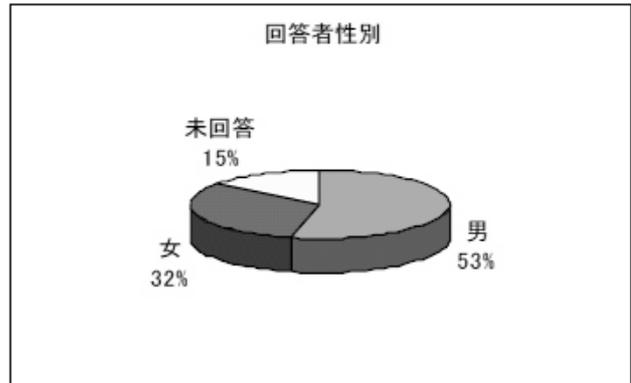
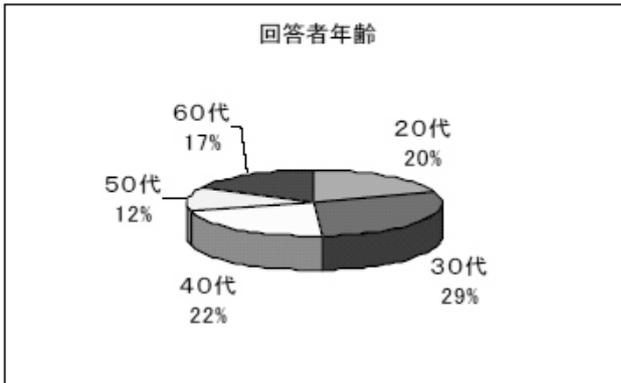
代表著作に、『動揺する日本の神話』共著、知識マダン、2002；『情報化の挑戦と韓国』共著、ハンウルアカデミー、2003；「日中韓 IT 協力の政治経済」『日本研究論叢』第17号、2003。

# アンケート結果

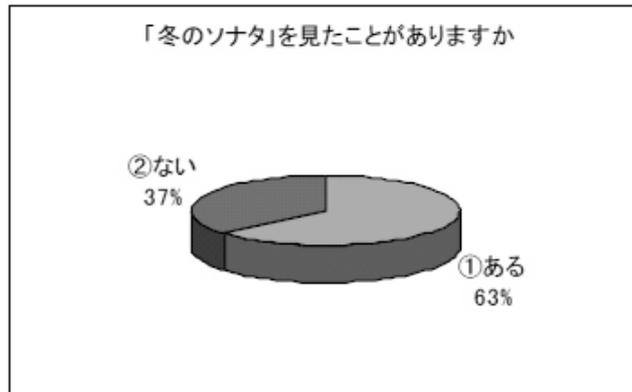
## 第4回日韓アジア未来フォーラム・第18回SGRAフォーラム

### 「韓流・日流：東アジア地域協力におけるソフトパワー」に参加して

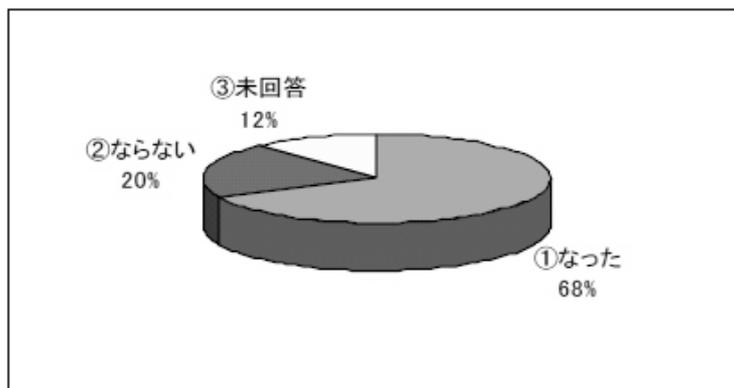
#### 0. 回答者について



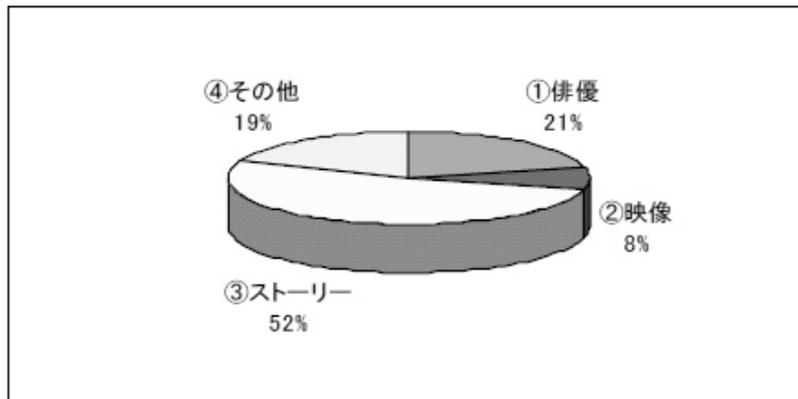
#### 1. 韓国ドラマ「冬のソナタ」を見たことがありますか。



#### 「冬のソナタ」を見た後、他の韓国ドラマや音楽などに前より接するようになりましたか。



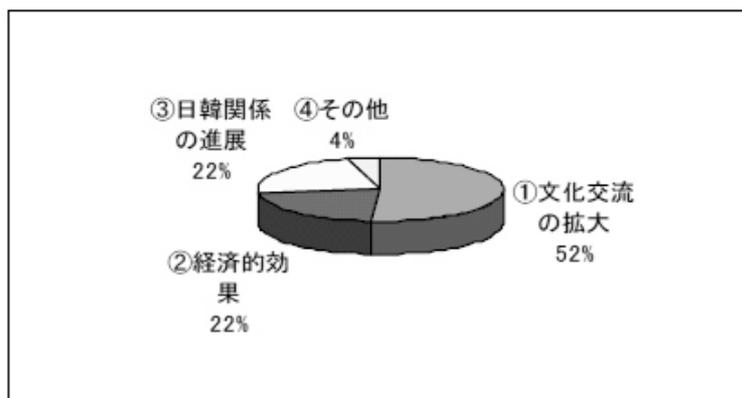
3. なぜ日本で「冬のソナタ」の人気があると思いますか。



④その他の意見

- ・ オリジナルラブ。純愛を通す、現代に失われつつある人類のノスタルジア。
- ・ 魅力があり、純粋なストーリーと聞いております。懐かしさを感じるのでしょうか。
- ・ 日本人の忘れかけていた懐かしい何かがある。
- ・ 韓国文化との出会いが新鮮だったから。
- ・ 日本ではいま余りテレビを通してみられない価値観があるから。
- ・ おばさま方の氷川きよしブームと同様。
- ・ 日本消費者、日本市場へのプロモーション（提示、売り込み戦略）が上手だった。（特にNHKによる翻訳とアフレコが良かった）
- ・ 音楽
- ・ 日本人の感性
- ・ 日本人の空虚感

4. 日本における「韓流ブーム」の効果のうち、何が最も大きいと思いますか。



④その他の意見

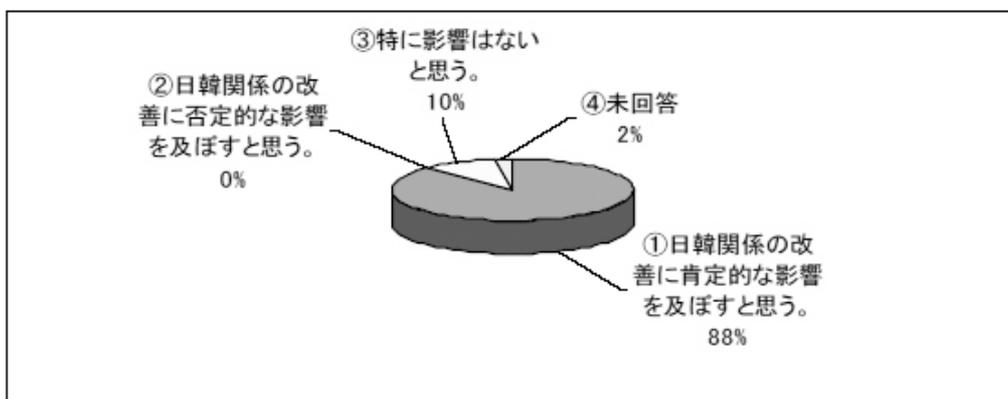
- ・ 認識の変化
- ・ 関心の高まり

5. 日本での「韓流ブーム」はこれからどれくらい続くと思いますか。

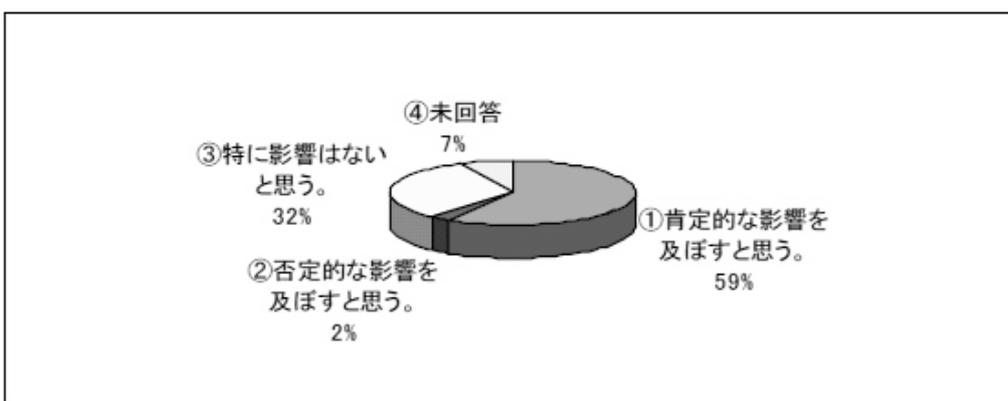
④その他の意見

- ・ “ブーム” としてはいつまで注目されるかは分からないが、その影響は長く続くだろう。
- ・ 2005年のような熱狂はすぐ冷めるでしょう。でも韓国のような文化がこれまで以上に入ってくる状況は長く続くと思います。
- ・ 永続
- ・ 2年以内。それ以上続くものは「ブーム」ではなく「トレンド」である。
- ・ もうピークは過ぎている感じがする。
- ・ 分からない

6. 韓流ブームは日韓関係においてどのような影響を及ぼすと思いますか。



7. 韓流ブームは日韓両国の歴史認識の共有にどのような影響を及ぼすと思いますか。



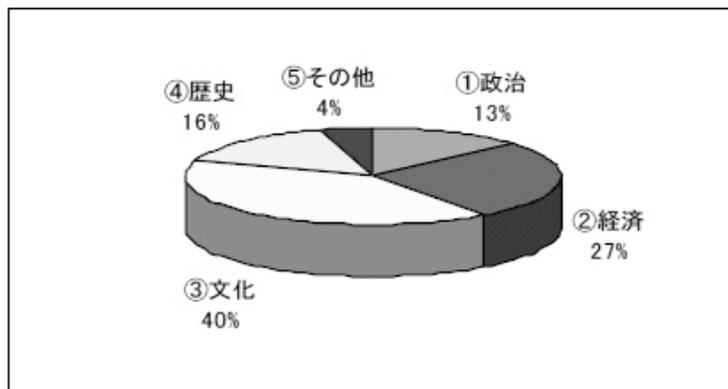
8. 「韓国」と言えば最初に浮かぶ人は誰ですか。

金大中（元大統領）	11
ペ・ヨンジュン	6
ノムヒョン	3
パクチョンヒ	1
イ・ビョンホン	1
チェジウ	1
ナム・ジュン・パイク	1
チョンキョンファ	1
李退溪	1
朴正熙	1
李スンシン将軍	1
BOA	1
韓国人留学生	1
今まで教えた学生	1
友達	1

9. 「韓国」と言えば最初に浮かぶことは何ですか。

キムチ	14
「韓流」がブーム	3
儒教的人間関係	2
焼肉	2
日本に最も近い外国	2
韓国ドラマ	1
南北分断	1
礼儀の国	1
友人の留学生	1
光州事件	1
インターネット	1
朝鮮陶器	1
李朝文化と焼物	1
サムゲタン	1
歴史問題	1
植民地問題、反日感情、李朝、浅川兄弟	1
からし	1
情	1

10. 日韓関係に更なる進展において、何が最も大きいインパクトを持つと思いますか。



⑤その他の意見

- ・ 歴史認識以前の歴史知識の欠如は自省すべきだと改めて思いました。
- ・ 北朝鮮問題が KEY
- ・ 選択不可

## ご質問、ご意見がありましたらお書き下さい。

- ・ 李元徳先生の分析はとてもよく現状を認識していると思います。私も、中韓日の陶芸シンポジウムとか韓国の大学との講演とかにおいて、常に負い目を持っている点があります。第二次大戦中の日本の歴史的な処理に対して不安を持ちながら交流を続けております。お互いに完全に和解するというのは難しいというご意見安心いたしました。より建設的な動きがこれから中韓日が出てくると思います。
- ・ 本日は素晴らしいフォーラムをありがとうございました。大変参考になりました。今後ともご期待いたします。＜ P.S. ＞ Question Paper などで Floor の意見を収集するチャンスがあれば良いかと思いました。
- ・ 表面的、表層的に過ぎる現在の“韓流”をいかにして双方に対して深みのある“相互理解”と“和合”につなげていけるのが最大の課題ではないだろうか。
- ・ 一般の参加者が会議室に入りにくい雰囲気があったので、運営上、そのところだけを改善していただきたい。それ以外は極めて良かったと思う。
- ・ グローバルな視野から未来に視点をおいた、日韓国際協力プロジェクトを推進されることを期待しています。
- ・ 在日韓国人の方達についてもっと知りたいと思いました。友達にも何人かいますので、彼らのことももっと知りたいです。
- ・ 時機を得た非常によい企画であった。相互理解のきっかけになると良い。
- ・ 今回の日韓関係のフォーラムは大変興味深く、楽しい企画だったと思います。第2戦は是非「韓国の映画産業の実態」、あるいは陶磁器の歴史のテーマでフォーラムを希望いたします。
- ・ 冬ソナもまともに見たことがありません。冬ソナに限らず日本製の連続ドラマもここ何年もろくに見てないわけですが。韓流ブームがポップカルチャーに傾きすぎているなという感じはします。お金になるからですよね。李先生が言われている「文化＝金」というのはマズイことです。ひねくれ者の私はブームなるものは疑ってかかるし、国や大企業が主導しているならなおのことです。それぞれの「マイブーム」が韓流とシンクロすればいいと思う。
- ・ 硬軟取り混ぜた先生方の発表に、大変興味深く聞けました。これからも日韓について関心を持ち続けたいと思いました。充実した会合でした。ありがとうございました。
- ・ 本日は大変良い機会を与えていただき本当にありがとうございました。とてもよい刺激になりました。貴フォーラムの今後ますますのご発展を心より祈念いたします。

## 付録 1

# 日本での韓流ブーム

李 鎮奎

未来人力研究院院長、高麗大学経営学部教授

## 1. 韓流の定義及びその背景

### 1) 「韓流」の定義

「韓流」とは、90年代の末から東南アジアで始まった韓国大衆文化の流行をいう。96年、韓国のテレビドラマが中国に進出し、その2年後には音楽の世界にもその規模を拡大し、中国で韓国大衆文化が大流行した。「韓流」は、中国で大流行した韓国大衆文化ブームを表現するため、2000年2月頃に中国マスコミが呼び始めた言葉である。

以後、韓国大衆文化の流行は中国だけでなく、台湾、ベトナム、タイ、インドネシア、フィリピン等、東南アジアはもちろん、日本にまで拡大した。特に、2000年以降は、ドラマ、音楽、映画等の大衆文化だけでなく、韓国のキムチ・コチュジャン・インスタントラーメン・家電等、メイドインコリア製品に対する消費者好感度が向上したがそれを包括的に表現したものが“韓流”だ。

### 2) 韓流、その背景

韓流大ブームの背景は、2つの側面から考えることができる。

1つ目は国際関係学からの視点である。80年代初め、ピークにきていた東アジア価値論争が、この地域で起きた通貨危機の影響で大きく崩れ始めた。特に、中国は儒教文化圏発祥の地であったにもかかわらず、社会主義的なイデオロギーが残っているために、文化的中心にはならなかった。欧米文化の直接の流入は国民の情緒上異質であり、また時期的にも早かった。また、日本文化は歴史・植民地問題など民族的な閉鎖性のため、東アジア価値の文化的モデルとしては限界を見せていた。韓流はこの日本文化の排除というまた違う側面を反映している。

2つ目の理由は、それまで東アジア地域の文化的リーダーの役割を果たしてきた香港文化の衰退が挙げられる。香港映画が武俠映画以外に魅力的なコンテンツを持っていなかったことも弱点といえるが、特に、97年中国に返還されてから文化的競争力が大きく後退した。したがって、韓流は資本主義の価値がいち早く拡散している東アジア地域で、日本と香港文化の間を絶妙にくぐり抜け文化的なトレンドになったのである。

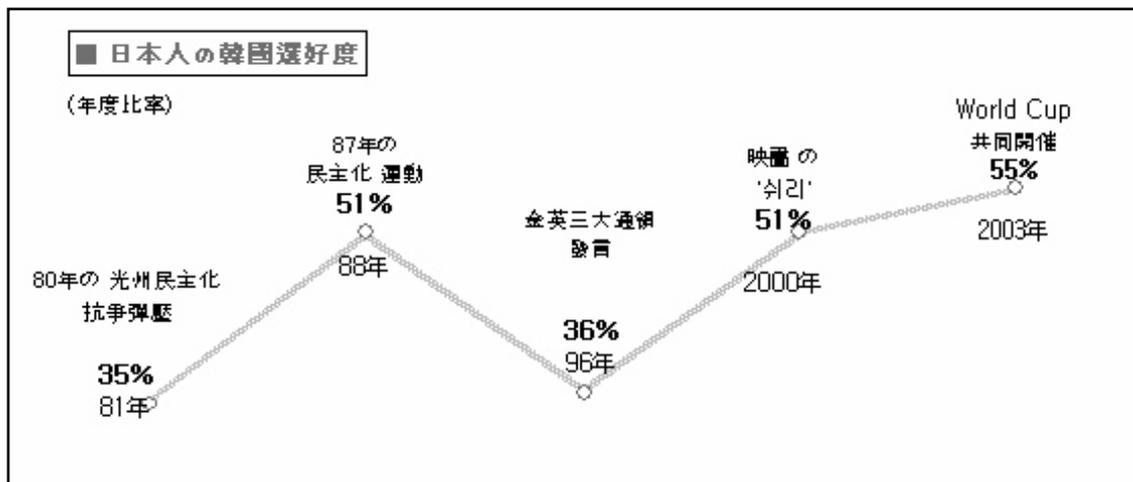
## 2. 日本での韓流

### 1) 日本人の間で変わる ‘韓国観’

日本の内閣府が毎年調査している‘外国に対する親近感’調査によると、韓国人に対して親近感を感じるという割合は、90年代までは50%を超えていなかった(平均40%)。これは政治的な状況によって上下していた(表1参照)。初めて50%を超えたのは88年で、87年の民主化運動に対する好感が影響したもの

と思われる。その後2000年‘シュリ’の日本公開とサッカーの2002年の韓・日ワールドカップ共同開催で2003年の‘親近感’は50%を超えた。

<表1 日本人の韓国選好度>



韓国人に対する印象が肯定的に変わったのは、映画‘シュリ’とテレビドラマ‘秋の童話’‘冬のソナタ’の人気、そしてワールドカップ大会期間中‘レッドデビル’の応援を通じて韓国の若者の熱気に触れたことが大方の分析である。

このような流れが60年間否定的見方が強かった韓・日両国の相互理解への新しい転機になっている。

## 2) 韓流と日流はブームになるのか

韓流について、日本での分析は肯定と否定様々だ。‘冬のソナタ’とヨン様に対する熱狂はプラトニックラブストーリーにはまる最近の日本人の傾向を反映したという‘日本の内部問題’との見方がある。一方、韓流ブームの謎を分析し日本ドラマ復活を望んでいる声もある。もちろん、‘韓流ブームは起こっていない’という声もある。

一方、“韓国では日本のドラマが流行りもしないし、韓国人は日本を好きにもならないのに日本人だけが韓国にはまっているのではないか”という声も聞かれる。

韓国での日本文化の開放がいつ、どれほど進行するのかに対し、日本では関心が高い。98年から始まった段階的な開放が一段落したが、まだ韓国でJポップ（日本の音楽）ははやっていないし、テレビドラマも地上波では放映されていない。韓国ドラマが日本国内で流行することで、韓国に対する認識を変えたことと同じように、韓国で‘日流’が流行したら根強い反日感情や偏見も長期的には緩和されるという期待を持っている。

しかし、韓流が日本に及ぼす影響は他にもある。何よりも日本の文化人たちの考え方を変えたことにある。韓流以後、日本の文化界には韓国のように政府が文化産業を積極的に支援・投資しなければならないという声も上がっているし、実際に政策としても立案されている。

## 3) 日本での韓流ブームの原因

日本で韓流が流行った1つ目の理由は、韓流をドラマが主導していることである。家族みんなで見ることのできる連帯感、そして不幸から幸福に至るまでの‘人生逆転’劇、また、理解しやすい登場人物の設定、そして‘愛してる’等、直接的な表現が多いことと典型的な美男美女俳優を起用した韓国ドラマの特性が社

会現象になる兆しを持っていた。

2つ目には、韓流ブームの中心が中年層の女性であるという点にある。今までの各種の世論調査では、この年代が一番‘韓国が嫌い’と答えた。しかし、この年代が‘韓国が好き’というように変わってきたがその上昇効果は大きい。韓国に対する何の先入観のない子供の世代にまで韓流が拡散されている。

3つ目は、韓国が魅力のある国として急速に変わってきていることを認識し始めた日本人が多くなってきていることがある。日本の大衆文化の段階的な開放、IT 先進化、構造改革、日韓ワールドカップ共同開催等で日本人が韓国に目を向けるようになった。“韓国へ移民したい”という 50 代の主婦が現れるほどだが、これを韓国人はまだ信じない。これまで想像もできなかったことが日本で起きているのが、今の韓流ブーム現象なのである。この現象は、外交関係が極端に悪化しない限り続くと思われる。

#### 4) ‘日流’ はなぜブームにならないのか

1998 年 10 月から昨年 9 月まで日本の文化は 4 回に分けて開放された。しかし、当初の予想とは違い、‘禁忌された物に対する好奇心’はそれほど大きくなかった。今現在韓国での‘日流ブーム’はない。なぜ日流ブームは起きないだろうか。

日本からの植民支配という過去に傷ついた国民の心理を考え、両国政府は段階的開放、つまり‘速度調節’を行ってきた。その影響で地上波放送の中、日本単独制作のドラマやバラエティ番組は、依然として開放されていない。日本のレコード業界は不振の最大原因を地上波放送の制約だと考えている。

韓国の‘心理的’閉鎖性をいち早く見抜いた日本側の消極的な市場開拓の努力のなさも‘日流ブーム’が形成されない理由だ。

#### 日本での韓流ブームの流れ

時 期	内 容
胎動期 (1980 年代～2000 年代)	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 80 年代初にチョ・ヨンピルの‘釜山港へ帰れ’が日本で人気に</li> <li>* 86 年チョ・ヨンピルのアルバムがオリコンチャート 13 位にランク</li> <li>* 80 年代の後半桂銀淑とキム・ヨンジャが日本のトップ演歌歌手として活躍</li> </ul>
発展期 (2000 年～2002 年)	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 2000 年映画‘シュリ’が日本全国 170 の映画館で公開され、130 万人の観客を動員</li> <li>* 2002 年韓・日ワールドカップ共同開催 ワールドカップとレッドデビルは日本人の中で韓国の大衆文化について関心を呼び起こすきっかけとなる</li> <li>* 2002 年 B O A が日本市場を席卷 B O A は‘NO.1’という曲で日本でデビューし、その年 NHK の紅白歌合戦に出演する等トップ歌手として成長</li> </ul>
拡張期 (2003 年～現在)	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 2003 年ドラマ‘冬のソナタ’が NHK 衛星放送 BS2 で放映 このドラマをきっかけにペ・ヨンジュン、チェ・ジウ等が韓流スターとして活躍し、現在まで韓国ドラマが日本で放映されている</li> <li>* 2004 年映画‘殺人の追憶’が 220 万ドル (約 26 億円) で日本に売られたのを初め‘JSA (共同警備区域)’‘猟奇的な彼女’‘スキャンダル’等韓国映画が日本で本格的に公開され始める</li> <li>* イ・ビョンホン、チャン・ドンゴン、ウォンビン、イ・ヨンエ等その他の韓流スターも誕生。歌手はアイドルグループ‘神話 (シンファ)’が有名、最近では‘ピ (rain)’とセブンの日本進出が有力、‘東方神起’等が日本内活動を積極的に摸索中</li> </ul>

### 3. 韓流ブームの危険性

日本列島を席卷している‘ヨン様’ペ・ヨンジュンが象徴するように韓流ブームがとどまるところを知らない。確かに韓国はアジア地域の大衆文化の発信源の役割を果たしている。韓国のスターやキャラクター商品に熱狂するアジア各国の人々を見ていると一時香港映画や香港の俳優達に熱狂していた韓国民が思い出される。

このように韓流は後戻りできない大きな流れを形成している。しかし、その裏に隠れた危険性を指摘しなければならない。大きく分けて2つの点から指摘することができる。

1つ、韓流ブームの核心は“文化は金”ということである。

‘文化＝金’というのは最近文化コンテンツ産業の振興論理の基盤でもある。実際に、韓流スター関連商品は現代の消費資本主義経済の核であるし、国家的な次元で文化産業を投資・育成する理由でもある。しかし、‘文化＝金’という論理というのは言い換えると、文化は金であるから金にならない文化は意味も無く価値もないという結論に達する恐れがある。いかに危険で非文化的な発想であるのかが分かる。

もう1つは、韓流ブームの中に隠れた“民族主義的な態度”である。韓流ブームが日本と中国等東アジアの国家に対する民族主義的な優越感を高揚する契機になってはならない。日本文化評論家が指摘したように日本人は‘冬のソナタ’の中で美男子ペ・ヨンジュンだけを好きだし、韓流そのものを好きではないということである。

ドラマのロマンチックな幻想の対象がハリウッドスターから韓国俳優に変わったということで国家的、民族的な優越性を確認したいということはむしろ韓国の文化的劣等感を表明することになる。

韓流ブームが韓国文化の本流になるためには文化経済主義的な視覚と文化民族主義的視覚をも警戒しなければならない。

### 4. 未来に向けての提言

これからの文化交流はもっと深く、もっと広く

韓・日両国の政府は2005年を“韓日友情年”と定めて各種の交流行事を準備している。韓日両国の政府は国交正常化の40周年に重みを感じているのに対して韓国の歴史学会は“解放60周年、乙巳条約100周年”にウェイトを置いている。

このように政府と民間は立場が違う。未来のための文化交流とはどのように行われていくのだろうか。

韓・日両国はお互いに争ったり、批判したりしても協力と共助が不可欠な国である。韓・日修交40周年を記念して両国の政府が友情年として定めたのはそれなりの意味がある。しかし、それは政府がやることである。政府としては相互に友好の親善関係を強調することができるが、民間の次元ではその性格が違う。友情はいきなり生まれるものではなく、お互いかなりの理解を要する。

ビジネス関係であれば、実利が伴えばすぐ親しくなるけれども、友情とは相手に対する理解と関係の持続性に対して、その価値を認定する事なのである。東アジアの平和共存と未来繁榮のためには何よりも相手への理解がなければならない。

現在の日本は、右傾化の道をたどっており、中国も偏狭な中華覇権主義に傾いている。このような状況で韓・日・中国民の間で本当の友情が生まれるのだろうか。

相手への理解と信頼を築くためには次のようなことを提案したい。

1つ、韓・日・中三国の文化的な共同体を築き上げていかなければならない。文化の共同体を築き上げて行くこうとすることに、最も重要なことは文化的交流である。文化から構築された価値は政治経済の領域でどんなことが起きても揺さぶられることがないからである。

重要なのは若い世代の教育である。3国の未来世代が共有できる文化的な体験の機会が多くなければならない。この時重要なことは言葉である。休みの時には韓国語を学びたい学生らをホームステイさせ、韓国文化を体験させながら言葉を教える。若い世代が言葉を知って直接意思疎通できるようになればもっと親しい関係になるだろう。言葉を通じて文化の共通点と違いを体験すれば良いと思う。

2つ、韓・日両国が共同基金を設けて芸術分野の若者達に奨学金を与え、相手国に少なくとも2～3年間留学させる方法である。例えば日本の若い作家が韓国に長期間滞在しながら韓国語を学び、韓国人と付き合いながら芸術的な作品を生み出せばいい。このような経験は10年、また20年後に持続的に文化的な芸術的生産物を作り出すことになるからである。1つの国に2～3年間滞在しながら文化に触れ合った人はほとんどはその文化との友達になる。日本の作家は日本で韓国の文化大使になる。文化そのものが外交政策の役割を果たす。両国間の文化的架け橋が今までよりさらに良い相互関係に寄与することにもなる。

3つ、政府の次元で相手国を研究する専門家を長期的、持続的に支援していかなければならない。研究の人力が持続的に働くように政府からの基盤を作らなければならない。

中国で東北工程のプロジェクトを遂行しなければ、韓国の高句麗研究財団を運営する必要はなかっただろう。

国際関係から見れば、文化というのは政治領域と同じく重要な外交的役割を果たす。文化交流をしなければ民族間の交流は不可能である。

韓・日・中の文化共同体の構築は、3国の平和の発展と人類に対してどんな寄与をすることができるだろうか。

ヨーロッパは世界史上で様々な価値を生み出してきた。ヨーロッパで生み出された普遍的な価値の中で自由、正義、平等という価値は人類の文明史に大きな寄与をした。我々も東アジアの伝統からグローバル化できる価値を摸索しなければならない時期にきている。

今現在、韓・日・中3国の最大の危機は3国全てが経済第一主義に向けて力を注いでいる点である。このような現象は文化的には大きな危機である。3国すべてが自国民さえ幸せになれば良いというイデオロギー的な思考が強い。このような考え方を持ち続けるようでは東北アジアの文化共同体の形成は難しくなる。

<孟子>に‘惻隱之心’という言葉があるが、これを解釈すると‘他人に対する配慮’という意味である。相手を理解し、配慮する心である。両国の民族の平和と共存の観点から考えて見ると惻隱至心は重要な価値になる。

## 付録 2

## 文化、ソフトパワーと新・日韓関係

こぐのをやめると自転車は倒れる／日韓が「開かれたアジア」を主導

## 道上 尚史

内閣府参事官、元在韓国日本大使館参事官

- ・「パリ症候群」と対照的な「韓流ブーム」。うれしいが少し寂しい。
- ・日韓ともエッと驚く無知・誤解。韓国側の自省と進化—ソウル大「日本講座」  
「日本は昔どうしたと言わない韓国人なら、付き合える」？
- ・完全理解よりまずは関心を。「相手をちゃんと見る」基盤。対韓偏見の砦が崩壊。
- ・日韓「もう大丈夫」→いや、課題は多い。「結局分かり合えない」→希望ある。
- ・韓国と中国—日本での親近度「逆転」。

以下、私から七つのメッセージです。

## 1. 「日韓互いに不得意科目」「知らないことを知る」からスタート。

- ・日本は歴史（1945 以前）を、韓中は戦後の日本（1945 以降）を知らない。
- ・日本側に、アジアを下に見る古い体質と、台頭新アジアへのやや過剰な警戒。
- ・「自分が善、日本は悪」「自分の日本理解が正しい。違う見方は反動歪曲」と「日本を見下ろす」決め付け傾向。  
ミサイル、拉致で日本の怒り、困惑に鈍い。
- ・人間も国も双方向。自分を見下し、嫌っている人には、心を開かない。  
→「あなたに関心ある。大事な存在だ」という姿勢が基本。

## 2. バラ色の幻想は禁物。「日本文化好き」と「日本嫌い」は両立。

- ・文化、ソフトパワーの効果大。だが、国の核心問題を自動解決するわけではない。
- ・韓中は国益上特に重要—日本への否定的イメージが一番色濃く残る。  
→ 常に意識的な努力を。自転車は、こぐのをやめると止まるのでなく倒れる。
  - i) 文化の「開放」機能と「固定、排外」機能。一方的押し付けの誘因にも。
  - ii) 文化、経済、政治、国のあり方はみな連動。  
「文化が世の中を動かす」は独善。政治社会体制の子—「韓国も北と同じだろう」？  
98年、金大中大統領が戦後日本を高く評価。指導者の決断プラス日本観の成長。「一皮むけた韓国」「日韓新時代」実感→映画の双方流行。
  - iii) 起伏のこわさ（例：朝鮮通信使、否定的にも触れやすい若者）。隣国ゆえ常に葛藤→「はやりすたれに任せるには、日韓関係は重要すぎる」。安定化装置。

### 3. 戦後日本の根本問題は、セキュリティとヒストリー。

- ・ 歴史「認識」以前に、近隣国に関わる近代史の基礎「知識」を強化すべし。
- ・ 日本の根本問題は、反省不足や「右傾化」でなく、国家公共の問題に背を向けたこと。「安保に弱い」（「平和憲法があれば攻めてこない」、国際政治の現実見ず）と「歴史に弱い」（被害者意識オンリーあるいは「近隣国うるさい！」）は、実は同根。
- ・ 古いアジア観とやや過剰な警戒が同居。でも着実に進歩。

### 4. 韓中比較（内閣府世論調査；数字は%）

	1980年	2004年(20代)
韓国に親しみを感じる	43.1	56.7 (63.1)
中国に親しみを感じる	78.6	37.6 (31.3)

- ・ 80年代中国では、日本のドラマ、映画、アニメの存在感が今より大。「おしん、鉄腕アトム、一休さん、山口百恵、高倉健」が、政治的教訓でない「自由な西側文化」を代表。今は相対化。アメリカ、韓国の存在感。90年代の愛国主義教育強化。
- ・ 政治的事件等で、数字は敏感に変動。
- ・ 90年代、中国でも村上春樹、浜崎あゆみ→「普段着の付き合い」だけではダメ。相互理解のインフラ強化と常なる改善意欲が必要。
- ・ 韓中の差 ①日本観の鍛錬度、②価値観、言論の多様度（背後に経済、都市生活）。
- ・ 98年以降高値安定。50代理念的反日、30－40代経済知日、20代抵抗感弱まる。

### 5. ことばは大事な架け橋（別添）

### 6. 「アジア人のアジア観」をより開かれた、公正なものに。

- ・ 都市生活、共感帯の拡大はチャンス。でも…
- ・ 「東洋は弱く貧しいが、清く正しい」「物質文明では負けるが、道徳的精神的には上」。「アジアは1つ。同じ肌の色だからよく分かる」——世界に通じない独善と偏見、アジアの多様性無視がひそむ。
- ・ 日本がアメリカに親和的なのは「米への屈服、アジア差別」か？——日本が安心でき、親近感を持てる相手は？

### 7. 日韓主導で「新しいアジア」を

- ・ 日韓の長所と短所—「一人ひとりの人間が大事」（ナイーブな「世界市民」的発想）／たくましいリアリズム、教育熱（血・民族重視、国権主義的発想）  
→ 垣塙にいれ、互いに向上 → 中国等
- ・ 日韓が、貿易・投資・金融、環境、ODA、PKO、市民交流、「ひとりの人間を大事にし、排外的でない、しなやかな、世界に通じる」新しいアジア発信を主導。

## <補足参考>

### ① 韓流、ヨン様ブームは「薄っぺら」か？

2000年、ソウル大学の大学院で「日本の政治・外交」の講座を持った。その時の女子学生の言葉を思い出す。日本留学時代にボランティアで知り合ったおばさんから「あなたみたいに、日本は昔どうしたとかいわない人とは、うまく付き合えそうね」と言われ、「そうですね」と笑顔を返した。でも、元慰安婦のおばさんの報道を見ると涙が出、憤慨する自分がある。あの答えは間違っていたのではと思う—という話だ。韓流を「薄っぺらな一時的現象」と見るのか？「冬ソナ」ファンに上記「おばさん」的「薄っぺらさ」を見いだすことは可能だ。でも、私は肯定的に見る。

なぜか？ 第一に、日韓双方で、相手に対する理解がそれなりに育っており、その基盤の上に立った流行だからだ。韓国側には、旧来の否定的感情的な日本像に囚われない、多様で自由な発想が見られる。日本側も成長してきた。ワールドカップ共催も効果があった。国も人間も、「あなた嫌い」、「関心ない」とそっぽを向かれては、お互い、相手を好きになれないものだ。

第二に、友人や夫婦もそうだが、人間は完全に理解してから付き合うものではないからだ。まず相手に関心の目を向けること。人に会いたい、息づかいや生活に触れたいこと（第1段階）が重要。そこから、けんかもしつつ理解を深めていけばいい（第2段階）。これまで、この第1段階が弱かった。韓国の人も、「歴史の完全な知識と贖罪意識を持って接すること」を日本に求めているわけではない。先方も日本を十分知っているわけではない。普段着の、対等の付き合いでいいのだ。ただ私としては、歴史に関するごく基礎的な知識はあった方がいいと思うが。

第三に、最も保守頑迷な日本女性の韓国観が変わりつつあるからだ。偏見、食わず嫌いの砦が崩れてきた。欧米でなく隣国に、格好いい男性がいることを、共通かつ共感できる生活（家族、制服、校則、掃除当番や部活動）を、やや古典的な純愛ドラマを、ようやく見つけてくれた。

ただ、安心は禁物だ。自然に任せればよいというのは楽観に過ぎる。外国人への偏見は、何かをきっかけに燃えやすい。意識的な努力が必要だ。はやりすたれに任せるには、日韓関係は重要すぎる。文化、交流に携わる人が政治家になる必要はなく、観光客に学者並みの歴史知識を求めるのは間違いだが、「大事な国なんだ」「あなたの良いところは知っています」という気持ちを、お互い心の隅に持っていたい。政府、知識人はより意識的な努力が望まれる。

### ② ことばはだいじな架け橋だ

日本人にとって、韓国語はドキドキするほど近い言葉だ。高速道路はコーソクドーロ、約束はヤクソク、調味料はチョーミリョー。うどん、かばんなど、日本語語源もある。

私の韓国体験は、まず言葉の面白さに魅せられることから始まった。英語は高校時代、単語を辞書で引いても覚えられないことがあった。でも韓国語はまったく違った。快感だった。こんなに近い言葉があつていいのかと思った。漢字語の場合、初めて聞く知らない単語でも推測がつき、分かってしまう。一度覚えたら忘れることはない。

「トソゲン」は図書館、「サンソマスク」はそのまます酸素マスク、「シミン・ウンドン」は市民運動だ。木の芽が「スクスク」伸びると聞いたときは背中がゾクッとした。

私は最近中国語もかじっているが、韓国語は、中国語よりはるかに日本語に近い。語順が同じだから、関係代名詞のように前に戻って訳すことはない。「私は社長です」と「私が社長です」のニュアンスの差は韓

国語にもあるし、「が」はやはり「ガ」と発音するのだ。

政治、経済、学生交流などいろんな会議の通訳をした。外務大臣、総理大臣等の通訳をする機会もあった。北朝鮮に行っても、道ですれ違う人の会話が分かり、金日成競技場の人文字をさっと読み取れるのは、やはり大きかった。

韓国で友人知人ができたのも、仕事も、映画や歌の理解も、すべての基礎は言葉であった。英語の十分の一の努力で、十倍の効果がある。学習効果は驚くほど高い。言葉だけは間違いなく、「近くて近い」関係だ。ヨーロッパの首脳が通訳なしで話をする場合は珍しくない。少年時代に日本の教育を受けた韓国大統領が日本語を話す時代は過ぎた。将来日韓の首脳が通訳なしに話をするとき、それが真の日韓新時代といえよう。

### ③ ソフトパワーは日本の強み。ただ、道なお遠い。

ソフトパワーとは、強制によらず、魅力によって相手を引き付けることだ。感性に訴える文化だけではない。政治理念も、国の品位・イメージ（国際社会で尊敬されるか）も、時には製品イメージ、ブランドイメージもソフトパワーに含まれる。この意味で、文化と政治、経済は対立概念ではない。文化産業、ハリウッド産業、広告、日本の（韓国の）製品を海外に広める企業努力に見るように、経済とのリンクは強い。

「ソフトパワーによる勝利」の例として、第一に、米ソ冷戦でのアメリカがある。民主的で自由で様々な文化活動ゆえに、世界（特に、冷戦の主戦場たる欧州）はソ連よりアメリカにはるかに親近感と魅力を感じた。ソ連は軍事力というハードパワーに依存するしかなかった。第二に、南北の体制競争での韓国。外国に門を開いた、韓国の自由な経済社会は、屈辱や弱さでなく強みであることが、80年代後半には明白になった。ソウルオリンピックやサッカーワールドカップ開催も、世界に韓国をアピールした。

ソフトパワーは、ある国についての否定的思い込みや偏見を是正する。戦後の日本は、アメリカ人が、B29と原爆だけでないことを知った。冗談を言い合い、大きな車に乗り、大きな冷蔵庫に何でも揃っている生活に憧れた。その少し後、「出っ歯でめがね。下駄履きでだらしなく着物を着た、野蛮で格好悪い、何を考えているか分からず不気味な」日本人の姿は、欧米では、相当程度払拭された。むしろ東アジアの一部では消えていない（新聞雑誌の漫画等に今も残る）のが問題だ。

日本の強みはソフトパワーだ。焼け跡からの奇跡的復興、経済大国化。開発途上国支援は、ODAもPKOも、国際社会の評価が極めて高い。科学技術、アニメ、ゲーム、映画、日本食も。ひるがえれば、欧米でない国の近代化成功は、間違いなく世界に希望と勇気を与えた。

さて、日本文化の特性は何だろう。慶応大学の田所教授によれば、ドグマチックでない（強いメッセージがない）ことと、decency（ほどよい品位、良識。えげつなくない）。

イラクのオリンピック幹部が小泉総理に言った。「空手は欧米のスポーツ化しているが、イラクでは、日本古来の空手を教えている。勝つことより、精神を磨きお互いを尊重することが目的だ。それこそ、宗派や肌の色を異にするイラクの若者が団結するために重要だ」。

中韓(特に中国)の日常生活や文化はアメリカ的。政治的、優勝劣敗、勸善懲惡。明確なメッセージ。日本は、よりアジア的。悪く言えば、ぬるま湯的。「中国は19世紀と21世紀が同居。日本はどこまでも20世紀的」との表現に私はうなづく。

——古来人間は、言葉の通じない人を警戒する。今も昔もどの国も、外国人には偏見を持ちやすい。映画や歌はその偏見、ゆがみを緩和する効果がある。ただし、ここでも幻想は禁物だ。映画や歌で、安保や歴史問題等、国家間の核心問題が解消するものではない。「香港でもソウルでも、象印炊飯器でご飯を炊くお母さん、ホンダ、ヤマハのバイクに乗るお兄さん、日本の音楽に夢中のお姉さん、日本製ゲームやアニメに夢

中の子供、誰もが、安保や歴史については、日本は嫌い、悪い国と答える」現象は珍しくない。

外国（日本）理解はそこまで壁が厚いのだともいえる。日本人がより根本のところまで姿勢を正すべきだともいえる。歴史観云々という難しい問題より以前に、植民地支配を、閔妃暗殺を「知らない」のでは具合が悪い。まず、誰に言われるからでなく、自分の歴史だから、また、近隣国が今なお重視する歴史でもあるからだ。戦後、日本人は、安保と歴史という国家公共の問題、厄介な問題から目をそらしがちだった。近隣国への説明や発信を怠りがちだった。心を開き、誤解があれば、うつむくのもキレルのでもなく、堂々と説明すべきだ。

日本も、まだ道は遠い。ソフトパワー（魅力）があれば、「その国に行ってみよう」はずだが、日本は、来訪する観光客が世界36位だ。これは中国の6分の1以下で、タイ、マレーシアの半分だ。インドネシアや韓国より少ない。日本の物価の高さだけが原因ではない。地方の普通の店屋ではクレジットカード、英語が通じない。ホテルの部屋や空港ラウンジにコンピュータが設置されていない。アジアから見て「日本は不便、遅れている」という面も確かにある。アジアからの観光客誘致の工夫も始まった、いや、観光地によっては、始めたばかりのところもある。一人よがりではいけない。

(本プレゼン及び本稿は、個人の意見を述べたもので、政府の見解ではありません。)

## 付録 3

# 『韓流』と日韓関係

李 元徳

国民大学副教授

### 1. 『韓流』のイメージ

—今の『韓流ブーム』には戸惑いも感ずるが、喜ぶ出来事:最近の韓流には正直に戸惑いを感じずるほどであり、過去と比べると、隔世の感を覚える。1988年から94年まで長い留学経験を持っている私からみて、今の韓流ブームは違和感さえ感ずるほどである。ヨン様に対するマダムたちの熱狂ぶり、ビデオ屋で溢れる韓国映画、テレビで毎日のように流れている韓国のドラマ、キムチなど韓国の食文化の広がりなどは当時では全く想像もできなかった出来事である。このような現象は、非常にありがたいことであり、日韓関係でみると、革命的な現象とも言える。ただ長期的な流れとして定着するかどうかについては少し疑問もあるが、これがただの一瞬のブームとして終わるわけには行かないだろうと予測される

—韓流ブームは基本的に日韓関係によい影響:韓国や韓国文化、韓国人に対する日本の認識を改善するに非常にいい契機として作用するだろう。総理府の統計でも日本人の韓国に対する好感度及び親近感は戦後最高を記録した(56%)。中国に対する認識は最悪の状況にあるなかで、対韓認識が良好であるというのは非常に面白い側面であると指摘できる。今まで日本の韓国に対する否定的なイメージがこれをきっかけに払拭されることを大いに期待する。相互の文化に対する理解こそが友好関係の土台である。

### 2. 『韓流』現象をどう見るか。

—今の『韓流』現象は1998年以降における着実な文化交流の蓄積の結果:1998年金大中大統領の日本大衆文化に対する段階的な開放措置が今の韓流の原点であると思われる。その反面、韓国での『日流』現象も決して無視できない。特に韓国の子供や若い世代には日本のアニメやゲームあるいは日本のポップは1つの常識であり、共通の文化でもある。『韓流』と『日流』現象は明るい将来の韓日関係を示すシンボルとも言える。現在日本での『韓流』を作り出したのは何ととっても2002年ワールドカップの共催、『冬ソナ』が決定的な要素であろう。

—日韓関係が垂直的な関係から水平的(対等な)な関係へと移行する過程を象徴するシンボルとしてみることが出来る。韓国は1980年代後半から高度経済成長、政治民主化、市民社会の成熟、多元化を成し遂げた結果、従来の垂直的な日韓関係は相対的に水平的な関係へ変化しているが、『韓流』はその変化の象徴ともいえるものである。

### 3. 『韓流』現象の裏面：早急な楽観論は警戒すべき

－日韓関係における対立と摩擦要因は依然根強く残されている。東アジアには依然ナショナリズムが猛威を振っているのも否定できない事実である。韓流と日流現象にも関わらず、歴史問題や経済、外交安保の面で対立や摩擦は、依然として厄介な問題として存在するだろう。むしろ、ソフトな領域での蜜月とは裏腹にハードな領域においては両国関係がさらに悪化する可能性さえ否定できない。

－ソフトな側面での接近とハードな側面での認識のギャップの格差：『韓流』、『日流』の相互浸透で、日韓大衆レベルでの文化的な親近感（ソフトな側面）はますます増えつつあるが、果たして歴史問題や外交、安保的側面（ハード）での日韓間の認識のギャップもそうなりつつあるかと言えるかと言えば、それは決してそうとは言えない状況にあるのが今の現状である。

－『韓流』と歴史問題は別個：韓流現象にもかかわらず、日韓の間の歴史問題を初めとする対立懸案は依然として存在するし、今後も発生するだろう。今後とも対立や摩擦を減少するための努力が必要である。1988年にも一時韓国ブームがあったものの、90年代に起きた一連の歴史摩擦によって消え去った経験がある。もちろん今度の韓流は過去のそれよりは手厚いところがあるというのは否定できない。したがって、歴史問題は日韓関係の時限爆弾のような存在。予防措置や管理メカニズムが必要である。

－北朝鮮問題、中国観、米国観を巡る見方やアプローチは相当大きな違い：特に、この違いは韓国で金大中政権登場以後顕著になったが、盧武玄政権の誕生以後はもっと深刻になったといえる。北朝鮮をエンゲージして統合を模索しようとする韓国の立場と超強硬姿勢で北朝鮮への圧迫を強め、制裁を加えようとする日本の立場の違いは最近目立っている。周知のようにアメリカ、中国に対する認識や態度も日韓間には非常に大きい隔たりを示している。このような外交的な姿勢や見方に対する相互理解や相互尊重も非常に重要な課題である。

－『韓流』と今後の課題：日韓両国は自由、市場民主主義、開放的な文化などを共通の価値を共有しているアジアにおける最も重要な二国間関係である。今後、日韓は中国と共に東アジアの共同体を作る動きを牽引する役割を果たすべきであり、その場合、大衆レベルでの文化に対する相互理解や共通の文化的な基盤構築は貴重な資産になりうると評価できる。

# 関口グローバル研究会

## SGRAレポート・バックナンバーのご案内

- SGRAレポート01 設立記念講演録 船橋洋一「21世紀の日本とアジア」 2001.1.30 発行
- SGRAレポート02 CISV 国際シンポジウム講演録 「グローバル化への挑戦:多様性の中に調和を求めて」(今西淳子、高偉俊、F. マキト、金雄熙、李來賛)2001.1.15 発行
- SGRAレポート03 渥美国際交流奨学財団奨学生の集い講演録 畑村洋太郎「技術の創造」 2001.3.15 発行
- SGRAレポート04 第1回フォーラム講演録 「地球市民への皆さんへ」(関啓子、L.ビッヒラー、高熙卓) 2001.5.10 発行
- SGRAレポート05 第2回フォーラム講演録 「グローバル化のなかの新しい東アジア:経済協力をどう考えるべきか」(平川均、F. マキト、李鋼哲) 2001.5.10 発行
- SGRAレポート06 投稿 工藤正司「今日の留学」(今西淳子「はじめの一步」) 2001.8.30 発行
- SGRAレポート07 第3回フォーラム講演録 「共生時代のエネルギーを考える:ライフスタイルからの工夫」(木村建一、D. バート、高偉俊) 2001.10.10 発行
- SGRAレポート08 第4回フォーラム講演録「IT 教育革命:IT は教育をどう変えるか」(白井建彦、西野篤夫、V.コストブ、F.マキト、J.スリスマンティオ、蔣恵玲、楊接期、李來賛、斎藤信男) 2002.1.20 発行
- SGRAレポート09 第5回フォーラム講演録 「グローバル化と民族主義:対話と共生をキーワードに」(ペマ・ギャルポ、林泉忠) 2002.2.28 発行
- SGRAレポート10 第6回フォーラム講演録 「日本とイスラーム:文明間の対話のために」(S. ギュレチ、板垣雄三) 2002.6.15 発行
- SGRAレポート11 投稿 金香海「中国はなぜWTOに加盟したのか」 2002.7.8 発行
- SGRAレポート12 第7回フォーラム講演録 「地球環境診断:地球の砂漠化を考える」(建石隆太郎、B. ブレンサイン) 2002.10.25 発行
- SGRAレポート13 投稿 F. マキト「経済特区:フィリピンの視点から」 2002.12.12 発行
- SGRAレポート14 第8回フォーラム講演録 「グローバル化の中の新しい東アジア」+宮澤喜元総理大臣をお迎えしてフリーディスカッション(平川均、李鎮奎、ガト・アルヤ・プートゥラ、孟健軍、B. ヴィリエガス) 日本語版 2003.1.31 発行、韓国語版 2003.3.31 発行、中国語版 2003.5.30 発行、英語版 2003.3.6 発行
- SGRAレポート15 投稿 呉東鎬「中国における行政訴訟—請求と処理状況に対する考察—」 2003.1.31 発行
- SGRAレポート16 第9回フォーラム講演録 「情報化と教育」(苑復傑、遊間和子) 2003.5.30 発行
- SGRAレポート17 第10回フォーラム講演録 「21世紀の世界安全保障と東アジア」(白石隆、南基正、李恩民、村田晃嗣) 日本語版 2003.3.30 発行、英語版 2003.6.6 発行
- SGRAレポート18 第11回フォーラム講演録 「地球市民研究:国境を越える取り組み」(高橋甫、貫戸朋子) 2003.8.30 発行
- SGRAレポート19 投稿 朴榮濬 「海軍の誕生と近代日本—幕末期海軍建設の再検討と『海軍革命』の仮説」 2003.12.4 発行
- SGRAレポート20 第12回フォーラム講演録 「環境問題と国際協力:COP3の目標は実現可能か」(外岡豊、李海峰、鄭成春、高偉俊) 2004.3.10 発行
- SGRAレポート21 日韓アジア未来フォーラム 「アジア共同体構築に向けての日本及び韓国の役割について」 2004.6.30 発行
- SGRAレポート22 「渥美奨学生の集い」講演録 「民族紛争—どうして起こるのか どう解決するか」(明石康) 2004.4.20 発行
- SGRAレポート23 第13回フォーラム講演録 「日本は外国人をどう受け入れるべきか」(宮島喬、イコ・プラムティオノ) 2004.2.25 発行
- SGRAレポート24 投稿 フスレ「1945年のモンゴル人民共和国の中国に対する援助:その評価の歴史」 2004.10.25 発行
- SGRAレポート25 第14回フォーラム講演録 「国境を越える E-Learning」(斎藤信男、福田収一、渡辺吉銘、F.マキト、金雄熙) 2005.3.31 発行
- SGRAレポート26 第15回フォーラム講演録 「この夏、東京の電気は大丈夫?」(中上英俊、高偉俊) 2005.1.24 発行
- SGRAレポート27 第16回フォーラム講演録 「東アジア軍事同盟の過去・現在・未来」(竹田いさみ、R.エルドリッジ、朴榮濬、渡辺剛、伊藤裕子) 近日発行予定
- SGRAレポート28 第17回フォーラム講演録 「日本は外国人をどう受け入れるべきか—地球市民の義務教育—」(宮島喬、ヤマグチ・アナ・エリーザ、朴校熙、小林宏美) 近日発行予定
- SGRAレポート29 第18回フォーラム・第4回日韓アジア未来フォーラム講演録 「韓流・日流:東アジア地域協力におけるソフトパワー」(李鎮奎、林夏生、金智龍、道上尚史、木宮正史、李元徳、金雄熙) 2005.5.10 発行

☆ レポートご希望の方は、SGRA 事務局 (Tel:03-3943-7612 Email:[sgra-office@aisf.or.jp](mailto:sgra-office@aisf.or.jp)) へご連絡ください。

# 関口グローバル研究会

## SGRAレポート・バックナンバーのご案内

- SGRAレポート01 設立記念講演録 船橋洋一「21世紀の日本とアジア」 2001.1.30 発行
- SGRAレポート02 CISV 国際シンポジウム講演録 「グローバル化への挑戦:多様性の中に調和を求めて」(今西淳子、高偉俊、F. マキト、金雄熙、李來賛)2001.1.15 発行
- SGRAレポート03 渥美国際交流奨学財団奨学生の集い講演録 畑村洋太郎「技術の創造」 2001.3.15 発行
- SGRAレポート04 第1回フォーラム講演録 「地球市民への皆さんへ」(関啓子、L.ビッヒラー、高熙卓) 2001.5.10 発行
- SGRAレポート05 第2回フォーラム講演録 「グローバル化のなかの新しい東アジア:経済協力をどう考えるべきか」(平川均、F. マキト、李鋼哲) 2001.5.10 発行
- SGRAレポート06 投稿 工藤正司「今日の留学」(今西淳子「はじめの一步」) 2001.8.30 発行
- SGRAレポート07 第3回フォーラム講演録 「共生時代のエネルギーを考える:ライフスタイルからの工夫」(木村建一、D. バート、高偉俊) 2001.10.10 発行
- SGRAレポート08 第4回フォーラム講演録「IT 教育革命:IT は教育をどう変えるか」(白井建彦、西野篤夫、V.コストブ、F.マキト、J.スリスマンティオ、蔣恵玲、楊接期、李來賛、斎藤信男) 2002.1.20 発行
- SGRAレポート09 第5回フォーラム講演録 「グローバル化と民族主義:対話と共生をキーワードに」(ペマ・ギャルポ、林泉忠) 2002.2.28 発行
- SGRAレポート10 第6回フォーラム講演録 「日本とイスラーム:文明間の対話のために」(S. ギュレチ、板垣雄三) 2002.6.15 発行
- SGRAレポート11 投稿 金香海「中国はなぜWTOに加盟したのか」 2002.7.8 発行
- SGRAレポート12 第7回フォーラム講演録 「地球環境診断:地球の砂漠化を考える」(建石隆太郎、B. ブレンサイン) 2002.10.25 発行
- SGRAレポート13 投稿 F. マキト「経済特区:フィリピンの視点から」 2002.12.12 発行
- SGRAレポート14 第8回フォーラム講演録 「グローバル化の中の新しい東アジア」+宮澤喜元総理大臣をお迎えしてフリーディスカッション(平川均、李鎮奎、ガト・アルヤ・プートゥラ、孟健軍、B. ヴィリエガス) 日本語版 2003.1.31 発行、韓国語版 2003.3.31 発行、中国語版 2003.5.30 発行、英語版 2003.3.6 発行
- SGRAレポート15 投稿 呉東鎬「中国における行政訴訟—請求と処理状況に対する考察—」 2003.1.31 発行
- SGRAレポート16 第9回フォーラム講演録 「情報化と教育」(苑復傑、遊間和子) 2003.5.30 発行
- SGRAレポート17 第10回フォーラム講演録 「21世紀の世界安全保障と東アジア」(白石隆、南基正、李恩民、村田晃嗣) 日本語版 2003.3.30 発行、英語版 2003.6.6 発行
- SGRAレポート18 第11回フォーラム講演録 「地球市民研究:国境を越える取り組み」(高橋甫、貫戸朋子) 2003.8.30 発行
- SGRAレポート19 投稿 朴榮濬 「海軍の誕生と近代日本—幕末期海軍建設の再検討と『海軍革命』の仮説」 2003.12.4 発行
- SGRAレポート20 第12回フォーラム講演録 「環境問題と国際協力:COP3の目標は実現可能か」(外岡豊、李海峰、鄭成春、高偉俊) 2004.3.10 発行
- SGRAレポート21 日韓アジア未来フォーラム 「アジア共同体構築に向けての日本及び韓国の役割について」 2004.6.30 発行
- SGRAレポート22 「渥美奨学生の集い」講演録 「民族紛争—どうして起こるのか どう解決するか」(明石康) 2004.4.20 発行
- SGRAレポート23 第13回フォーラム講演録 「日本は外国人をどう受け入れるべきか」(宮島喬、イコ・プラムティオノ) 2004.2.25 発行
- SGRAレポート24 投稿 フスレ「1945年のモンゴル人民共和国の中国に対する援助:その評価の歴史」 2004.10.25 発行
- SGRAレポート25 第14回フォーラム講演録 「国境を越える E-Learning」(斎藤信男、福田収一、渡辺吉銘、F.マキト、金雄熙) 2005.3.31 発行
- SGRAレポート26 第15回フォーラム講演録 「この夏、東京の電気は大丈夫?」(中上英俊、高偉俊) 2005.1.24 発行
- SGRAレポート27 第16回フォーラム講演録 「東アジア軍事同盟の過去・現在・未来」(竹田いさみ、R.エルドリッジ、朴榮濬、渡辺剛、伊藤裕子) 近日発行予定
- SGRAレポート28 第17回フォーラム講演録 「日本は外国人をどう受け入れるべきか—地球市民の義務教育—」(宮島喬、ヤマグチ・アナ・エリーザ、朴校熙、小林宏美) 近日発行予定
- SGRAレポート29 第18回フォーラム・第4回日韓アジア未来フォーラム講演録 「韓流・日流:東アジア地域協力におけるソフトパワー」(李鎮奎、林夏生、金智龍、道上尚史、木宮正史、李元徳、金雄熙) 2005.5.10 発行

SGRAレポート No. 0029

---

第4回日韓アジア未来フォーラム・第18回SGRAフォーラム

「韓流・日流：東アジア地域協力におけるソフトパワー」

---

編集・発行 関口グローバル研究会 (SGRA)

〒112-0014 東京都文京区関口 3-5-8 (財) 渥美国際交流奨学財団内

Tel : 03-3943-7612 Fax : 03-3943-1512

SGRA ホームページ : <http://www.aisf.or.jp/sgra/>

電子メール : [sgra-office@aisf.or.jp](mailto:sgra-office@aisf.or.jp)

発行日 : 2005年5月20日

発行責任者 : 今西淳子

印刷 : 藤印刷

---

© 関口グローバル研究会 禁無断転載 本誌記事のお尋ね並びに引用の場合はご連絡ください。